

兵法諸流と武者言葉集との関係についての試論

——甲州流諸派の武者言葉集について (一)——

島田 勇雄

(承前) 有沢派の武者言葉集では、有沢永貞の「正夫之抄」が基本であり、これについてその子武貞が「正夫之抄私解」「正夫之抄図解」「備行宮秘解」を著述した。「正夫之抄私解」は「正夫之抄」について用語の解説等を行なった注釈書であり、「正夫抄図解」は同じく図解を中心とする注釈書であり、「備行宮秘解」は委細にわたる注釈書である。永貞が、甲州流祖小幡景憲の門下佐々木秀乗の印可を受けながらそれに満足せず、更に北条氏長や山鹿素行に近づいたのは彼らの体系的思考法に惹かれたからであろうこと、それらの学習を経てついに氏長や素行とも異なる道を開いたということはすでに述べた。それはまさに有沢派とでも言うべきものであった。永貞は独自の体系的思考法によって独特の一派を開いたわけであるが、その子武貞は父の開いた学説を正しく祖述し、その注釈的著述を多く編述して家学を盤石の安きに導いたと言える。有沢永貞の著述年代については金沢市立図書館蔵の永貞自筆本の奥書に次の如くある。

右正夫抄者寛文年中雖作之後歲視之粗不正之所有之故重而令挾正之者也干時元祿 巳日閏正月中旬有沢永貞清書之
また「軍詞之巻私解」については金沢市立図書館蔵「正夫之抄私解」の序に次の如くある。

兵法拔書正夫之抄三冊軍詞軍容撰功追加二冊兵器武功ハ有沢永貞作之テ治世ノ士年ヲ逐テ戦国ニ遠サカリ戦陣ヲ勤メタ

ル疋夫ノ業モ不知成行ニヨリ是ヲシラシメンタメニ其類ヲ寄テ集之其趣ヲ伝語スルノ便利トス 然ルニ予先年粗註ヲ加フト云トモ未タ全カラス 其後図解巻數七箇ヲ作テ猶是ヲ得知スルノ助トスル也 今年有故其私解ヲ改メ作シ軍詞軍容撰功兵器武功ノ註詞全ク成就ストイヘトモ兵法ノ始終ヲ尽スニアラス 唯疋夫之抄ヲ解スル而已

有沢武貞

また跋文には次のようにある。

右軍詞之巻私解者元禄十二巳卯歲稿之今歲正徳四甲午年悉令改正増補之處也 三月上旬

なお「三月上旬」のあとに「桃水子」と附記する一本もある。桃水子は武貞の号である。つまり、永貞が「軍詞之巻」に修正を施したのは元禄二年であり、その十年後の元禄十二年に武貞がそれに対する「私解」の素稿を作成し、更に約十五年後の正徳四年に素稿を改正増補したというのである。今は素稿の所在は明らかでないので、素稿から修正稿への変遷は明らかにすることが出来ない。なお、武貞は元禄十二年に「私解」の素稿を作成したあとで、「図解」を順次作成した。これは改稿しなかったようである。ところで、『図解』七巻の著述年次を家蔵本を中心に示せば次の如くである。

右軍詞之巻図解前者宝永四丁亥冬作之 桃水子（岩瀬文庫本）

右軍詞之巻図解後者宝永四丁亥冬作之 桃水子

右軍容撰功二巻之図解者宝永四丁亥冬作之 桃水子

右兵器之巻図解上者従宝永四丁亥冬到于宝永五戊子初春作之

右武功之図解者宝永五戊子作之 桃水子

右図解（注武功之巻）者宝永丁亥冬如筆之宝永戊子夏終之者也 於加陽有沢武貞作

「疋夫之抄」は五巻であり、それに対する「図解」が七巻であるが、それは「軍詞之巻」と「兵器之巻」とが前後および上下に分れるためである。この七巻は、宝永四年の冬から宝永五年にかけて完成されたことが知られる。管見の

範囲では、これらについては改正増補されたもののあることを知らない。そのことはなかったのであるうと思われる。

次に武貞は「私解」の素稿を作成し、改稿を完成した。改稿を完成した正徳四年より二十余年後享保二十一年（元文元年）に「匹夫之抄軍詞之巻 備行宮秘解」を著述した。その跋文に次の如く述べる。（石岡久夫氏蔵旧海軍大学本による）

右匹夫之抄備行宮秘解軍詞之巻之始メ也一冊ハ享保廿一丙辰年初夏五日ニ始^レ筆^ヲ、同月六日・七日・八日・九日・十日・十三日・十四日・十五日・十六日・十七日・十八日・十九日・廿日・廿一日・廿二日・廿三日・廿四日・廿五日・廿六日・廿七日・廿九日・五日朔日・二日・三日迄廿五箇日一時半刻ノ間ニ筆ヲ採^テ解^作之^ヲ者也。 有沢武貞述作ス

つまり享保廿一年の四月五日に筆を起し、五月三日に完了した。途中数日間事に当らぬ日があつたが廿五日間で完了したことになるというわけである。おそらく「私解」をもとに講述すること廿余年に及んだため、その間に感得することが多く、一氣にそれらを書きおろしたのであらう。さて、以上の「正夫之抄軍詞之巻」「軍詞之巻図解」「軍詞之巻私解」「正夫之抄軍詞之巻備行宮秘解」の四書につき、それらの記述内容の大略を知るため例示すれば次の如くなる。もつとも「図解」はその性質上図解を中心とするため、これを省略する。（以下引用文の句読点等は島田）

(甲)軍詞之巻——夫兵法ノ教其事繁フシテ其品多シ。是ヲ導ク諸流事理本末ノ弁見聞スルニ暇ナシ。

(乙)私解——「正夫之抄序。夫兵法ノ教。兵ト云ハ士ヲサシテ云。孫子曰兵者国之大事死生之地存亡之道也。不可不察也ト云々。兵ハ器械ニアラス。執之者ヲ云。凡人タル衣食住ノ三カケテハ生ヲ養ヒカタシ。然ルニ農ハ田ヲカヘシ蚕ヲヤシナヒテ衣食ヲ調エ、工ハ其器ヲコシラヘ家ヲ作テ居ヲ安クシ、商ハ其間ニ有テ器ヲ農人ニ配リ食ヲ工人ニアタヘテ事ヲ調ル也。是ヲ天下ノ三宝ト云。士ハ其業無シテ三民ニ長タル所以ハ能三民ヲ守護シテ邪惡ノ者ヲ征罰シテ太平トナスノ役人也。其士ノ中ニ主將士ノ三段アリ。其ノ命ヲ出スハ主也。其命ヲウケテ施スハ將ナリ。其令ニ随テ行ハ士也。故ニ士ハ英雄也。英雄ノ心ヲトルハ主將ノ法ナリトイヘリ。主將士各其道ニカナフトキハ国家易ク其道ニタカウトキハ危シ。依テ兵ハ死生存亡ノカ、ル所国之大事ト云ナリ。其兵法ノ教ヲ知ル士ノ当然也。

「其事繁フシテ其品多シ」。今兵法諸流多フシテ書ヲアラワシ伝フヒロクシテモ猶不足ノ事多ク其道ヲ全ウセントスルトキハ五百年來天下ノ治乱ヲ考ヘサレハ能ハ知カタシ。故ニ事多シト也。

「是ヲ導クノ諸流事理本末ノ弁見聞スルニ暇ナシ」。兵ヲ談スルニ至テ或ハ軍配ヲ貴トミ軍器ヲ作り或ハ兵術ヲ專トシ偽謀ヲ旨トシテ大本国家太平ノ法タル事ヲ不知トシテ其理ヲ以テ本トスルノ教ハ天文術數兵器計謀ハ皆兵法ノ枝葉ニシテ大本立テ後用之ニ利アリトス。或ハ仁義ノ說ヲ交ヘ語ノ其末葉ヲ輕ンスル者亦多シ。或ハ又兵ノ要沈淪シテ末葉ニ泥ム者ハ其本ヲ不知。其本源ヲ貴トム者ハ其業ヲ不勉。故ニ本末差別セルトテ是ヲ一ツニツラヌキ教ヘントスルアリ。依テ見尽シ聞尽スニ暇ナシト云々。

(丙) 備行營秘解——「疋夫之抄序。夫兵法ノ教。兵トハ兵器ノ事。此兵武ノ器ヲ採テ業ヲ身ニ係ルニヨル。故ニ士ヲ兵ト云。兵ヲツハモノト訓ズルハウツハモノ儀。器ノ中ニテ長トスルハ兵器鋒ヲ初トシテ刀弓矢ニ到ル迄也。其軍器ヲ採テ世ヲ修ムルハ士也。依テ孫子之発端ニモ兵者国之大事死生之地存亡之道也。不可不察也ト云々。然ハ兵法ト云ハ士法ト云事也。凡ソ人タル者今一世界ノ万国有トイヘトモ衣食住ノ三ツ闢テハ生ヲ養ヒ難シ。然ルニ農ハ田ヲ耕シテ食ヲ調フル。農婦ハ蚕ヲ養テ織事ヲナシ衣ヲ調ル。工ハ其器ヲ拵エ家ヲ作テ居ヲ安クシ商ハ其間ニ有テ器ヲ農人ニ与エ配リ衣食ヲ工人ニ与エ配リテ事ヲ調ル也。大農大工大商是ヲ天下ノ三大宝ト云。士ハ三民ノ業無シテ其三民ノ長トナル所以ハ能三民ヲ守護シテ不_レ耕シテ食シ不_レ工シテ居スル。不_レ商シテ世ニ交ルノ邪惡ノ者ヲ征罰シ太平トナスノ役人也。其士ノ中ニハ主將士歩卒ノ五等アリ。主ハ其初メ智勇相備テ自ツカラ諸人ノ方ヨリ崇敬シテ三民ノ業ヲ止サセテ其人ニ万事ヲ伺尋ネ其下知ニ三民随フヲ主ト云。主ハ又不正者ヲ征伐シテ国家ヲ安泰ナラシムル也。其主ノ德篤ケレバ子孫ニ及テ世々ノ主ト仰グ。主ニモ高下有ベシ。將トハ其主ノ命ヲ受テ下ニ施スノ役人。將ニモ段々階級有テ諸將諸頭諸奉行諸役人等ハ皆是將ト云ノ内也。士ハ其初メ農業ヲ勤メ事アル時ハ鎌鋤ヲ棄テ兵具ヲ採テ邪惡ノ者ヲ征伐スルニ自ツカラ兵事ヲ好ム者アリ嫌フ者アリ。嫌フ者ハ農ト成リ、武業ヲ好ミ智謀才等アル者ハ士ト成テ士農一致タリシガ、次第ニ分レテ別ニ士ノ境界分レタリ。士ノ内ヨリ將ト成、主トモ成者アリ。歩ハ士ノ境界立トキハ一等卑キ者歩ト云一類立也。卒トハ今云足輕以下ノ輕卒。士家一種ヲ立ルトキハ又無テ不_レ叶事也。上代農ヨリ兵ヲ勤メシトキモ大農ハ士ト成、中農ハ歩ト成、小農ハ卒ト成タル余風ニテ士歩卒ト成ヌル也。然ハ主將士歩卒ノ五等トハイヘトモ約テ云バ主將士ノ三ツ、猶約_レ之云バ士也。故ニ四民ト云トキノ士ハ英雄也。英ハ智万人ニ勝ルヲ云也。雄ハ勇万人ニ勝ルヲ云也。主將士各其道ニ叶フトキハ国家易ク、其道ニ違フトキハ国家危シ。依テ兵ハ死生存亡ノ係ル所国之大事ト

云ハ是也。故ニ其ノ兵法ノ教ヲ知ルガ士ノ当然也。

「其事繁フシテ其品多シ」。今兵法ノ説者諸流多シテ各言物ヲ顯シ伝ヲ弘クシテモ猶不足ノ事多ク其道ヲ全クセントスルトキハ天下古今ノ治乱ノ事蹟ヲ知ヲ以テ不_レ考_ヘハ知難シ。近クテ五百年來ノ興廢ヲ不知シテハ不叶也。依テ事品多シト也。タトヘバ士ト云テモ古今來成來ル所ヲ知、當時治世ノ心得ナクテハ心落着セザル也。夫々ノ役儀ヲ勤ル者モ又其々如比。依_レ之武貞別二十役之抄ヲ作テ弁_レ之。猶其書ニ便テ人々勤ル所ノ当然ヲバ可_レ知_レ之也。

「是ヲ導クノ諸流、事理本來ノ弁見聞スルニ暇ナシ」。兵ヲ談ズルニ至テ或ハ軍配ヲ貴ミ或ハ軍器ヲ作ル事ヲノミ云、或ハ兵術ヲ專トシ、或ハ偽謀ヲ旨トシテ大本國家太平ノ法タル事ヲ不知シテ其無用ノ詞ヲ費ス。其理ヲ以テ本トスルノ教ハ術ハ志ニ随フト云ヲ本トシテ先我_カ性理ヲ磨キ仁義ノ説ヲ交エ語テ天文術數兵器計謀等ハ皆兵法ノ末業ニシテ、其本立トキハ末業ハ自ツカラ成ト教ユルアリ。亦事ハ業也。或ハ兵ノ用沈淪シテ只末業ニ而已泥ム者ハ其大体ヲ不_レ知、偽術婉謀ニノミカ、ハツテ月日ヲ費シ実理ヲ不知或ハ本源ヲノミ云者其事業ヲ不_レ勉。彼モ是モ当然ヲ失フトナリ。故ニ其本末ノ差別セルヲ思ヒテ事理ヲ一致ニ貫キ教ントスル者アリ。依テ見_レ尽シ聞_レ尽スニ暇ナシト云々。タトヘバ賢聖ノ書ヲ学文スル者ハ理ヲ先ニ教ル也。理心裏ニ徹スレハ末業ノ諸般ハ不_レ教シテ格物致知ト立ル也。或ハ鑕_・劍術_・弓_・鉄砲等ノ業ハ勝負ノ理ハ不知トモ先其業ヲ修行シ其功積テ自ツカラ其勝負ト理ヲ知事、事先ニテ理跡也。又御馬_{キヨバ}ノ法ヲ修行シ習ハ手術ノ持樣乗下ノ法ヲ習テ騎乗スレハ其ヲ不_レ知者ヨリハ能。二三度乗タル者ハ亦其ヨリ宜ク情ヲ出シテ修行スレハ其修行稽古スルニ随ツテ其稽古ノ位程充ニ其業モ理モ通ズル也。其位々々程々ノ事理一致ニ通ズル也。是ニテ事理本末一致ノ訳ヲ知ベキ也。兵法ハ唯本元ヲ知テ当然ニ不迷ノ趣キヲ修行スベキ也。

引用はそれぞれの書の冒頭部分である。言つてみれば開講に当たつて教授者が開口一番に述べる部分で、教授者の学的姿勢をまず述べるという箇所である。その箇所において、父有沢永貞の兵学思想と子有沢武貞の兵学思想との相違という点をまず感じさせられる。というのは永貞の兵学思想はその「枢蜜要論」に述べるように、「兵学度量分間ヲ明ニシテ兵法実学ヲ委フセン事ヲ思ニア」るわけで、その兵法実学は城築、陣營の測量や座備行列の実技に関するものである。そういう観点に立つて軍詞が論じられる。それに対して武貞の兵学では「兵法ト云ハ士法ト云事」で、それは武士の人間觀の根源を尋ねる学問である。思想としての兵法学であるということができる。それはすでに山鹿素

行の兵学においてみられたものである。素行の意図するところは、日常の学習を通じて修身齊家治国平天下を目ざす実践的な学問を樹立することであり、具体的にはそれが素行の「聖学」であり「兵学」であると考えられている。¹⁾素行の儒学は「武教的儒教」とも言われるように兵学と儒学とが統一的に包括されていた。その素行に学んだ永貞は、その兵学の樹立に当たってその実践的側面により深い興味を持ちより多く学んだということができよう。それに対し武貞は修身齊家治国平天下の実践的側面により深い共鳴を持つに至ったということができるかも知れない。それは武貞が士の道を説くものとして「十役之抄」を著したという点において明らかである。

武貞の解釈にも「私解」と「備行宮秘解」との間にはある種の変遷が見られる。もっとも質的相違は見られないと言ってもよいかも知れない。たとえば、兵について「私解」では「士ヲサシテ云」と言い、「秘解」では「兵トハ兵器ノ事」と言いながら結局その「兵武ノ器ヲ採」る人をさし「故ニ士ヲ兵ト云」としたり、士について「私解」では主将士に三分類するが、「秘解」では主将士歩卒に五分類をしつつも、最終的には三分類に復帰したりすることにそれが見られる。しかしそうは言っても、その主も、当初は智勇相備わっていたため主と仰がれたものであり、その主の徳が篤ければその子孫に及んでも世々に主と仰がれるに至ると解説したり、将にも「段々階級」があるとしたりするくだりなどに視点の変化を見ることができよう。

そのような武貞の実践的側面も、それは武貞の晩年における到達点であり、武貞もまず永貞の樹立した兵学の実学的側面への理解から出発したということができるかも知れない。その実学的側面の解説を「図解」において見ることができる。「図解」の各巻の要旨は「凡例」によって示されている。それを挙げれば次の如くである。

凡例 軍詞ノ巻初ハ備立行列陣取ノ事ナリ。是ハ大図人形ノ象画ヲ以テ委シ。一二陰陽進退ノワカチハ木形ヲ盤ニノセテ知之。爰ニハ只其略図ノミ城取ニ至テ無際限拳ル所ノ名目図之。(『軍詞之巻』前)

凡例 軍詞ノ巻過半ハ城取ニ付テノ図ナリ。夫城築ハ戦国早成ノ砦塞等。当時太平ノ諸国ノ居城疊年造作ヲ加工土居ヲ石

垣トスルノ如クナラス。今図スル処ハ其普請造作トモニ大概中分ヨリ念ノ入タル方ナリ。戦争ノ日急築ノ城営如此ヲナスニ到ラズトイヘトモ其矩ノ極ル処ヲ知テ以テ地理ノ変化ニ随テ無用ノ人力ヲ尽スマシキ為ノ習ナルモノナレハ悉図之。猶地形ノ品節繩張ノ応変ハ事繁ケレハ略レ之。其末軍詞六軍八陣ノ品等曉シカタキハ粗図ヲ加エ出ス。〔軍詞之卷〕後

凡例 軍容之卷ハ図ニ作ルモノ少ナシ。大概曉シカタキモノ図之。就中大小勝敗主客攻守之法ニ到テ図スヘキノヨシナシ。略之。〔軍容之卷〕

凡例 撰功之卷ハ闘乱ノ筋且勇臆ノ論スルモノナレハ図スル事モ猶少ナシ。鎗場七段ノ働等大概ノ矩ヲ図ス。〔撰功之卷〕

凡例 兵器ノ巻初ハ六具之品節ナリ。六具ト云モノ故実流タニ依テ著別有之也。其用方ヲシラシメンタメ古器ノ様子モ少々加尤モ之テ當時ノ兵器ヲ知ノ便利トス。〔兵器之卷〕

凡例 武功之卷ハ別テ図シカタシ。巻中秘スル品ハ略シテ不図之。斥候之卷ニ到テ地形ノ事等普知所ハ略之。粗図スルモノモ有之。〔武功之卷〕

右の凡例によつて各巻の内容の要点や著述意図等を知ることができる。「図解」は要するに附図による解説であり、視覚的教材用具であり、これの存在により事柄によつては極めて理解を便にする特色がある。勿論事柄によつては図示に困難をきわめるものもある。「撰功之卷」の如きは少量にとどまるし、反面兵器の如きは図解を便とする点が大きく、事実その図解は二巻にわたっている。「図解」は、辞句による解説書としての「私解」の後に著述された。教授上の参考資料として「私解」がまず著述されたのであろうが、口頭による解説のみでは理解に困難をきたすことが多いであろうから、そのため視覚的教材用具として「図解」が著述されたのであろう。「図解」はそのように本来視覚的教材用具なので、図を主として解説はきわめて僅かである。たとえば「軍詞之卷」では、堀について種々の堀を図示し、それらに「水堀」「濶堀」「堀内道」「障子堀」「立堀」「捨堀」などと種類名を挙げるとどめて全く解説を施さない。ただ堀の作り方について、その図示の外に次の解説を添える。これは稀な例である。

城ノ方ヲナルク城外ヲ急ニ堀ヘシ。図ノ格合ニスヘシ。堀幅十間ニ深サ四間ハカリニシテ此格合ニ穿テ其土ヲ以テ敷八間ニ高サ三間ノ土居ヲ築クニ少シ余ルナリ。但四季、口伝。至テ堀幅広クトモ深サハ様子ニヨルヘシ。

もつとも、稀には家蔵の「兵器之巻図解」の如く文章形式による解説を多く持つものもある。これは頭注に「私解」を多く引用し、本文部に「聞書」を多く引用する。この「聞書」の実体は明らかでないが、「私解」に類する解説の多い点からすると、武貞が「私解」に基づいて行なつた講義の聞書であるかも知れない。ただしそのような伝書存在について確認することはできなかった。現在金沢市立図書館に蔵される「聞書」はこれとは全く異り、簡略なメモ的記述を持つものにすぎない。

(二)「軍詞之巻」を中心にして

有沢派兵法学の体系の中では、軍詞は平侍たる疋夫の心得るべき兵学中の一部門として位置づけられた。そのことは有沢派独特の方法というわけではない。既述のように「軍鑑拳要」においても「武者詞の巻」は平士の戦闘行動について主として論じる「小勇之巻」に納められ、平士の教養とされた。そのことは山鹿素行の「武教全書」においても同様で、それは「小身の士軍詞之事」の項で説かれる。これは以後の各種武者言葉集においても一貫していることと思われる。有沢永貞の体系においては、「軍詞之巻」は疋夫を対象とする「疋夫之抄」の一部分であり、「疋夫之抄」を構成する「軍詞之巻」「軍容之巻」「撰功之巻」「兵器之巻」「武功之巻」の五巻の中の一部である。その「疋夫之抄」は、正編と追加との二部に分かれ、正編は「軍詞之巻」「軍容之巻」「撰功之巻」の三巻であり、あとの二巻が追加である。そのことについては、有沢永貞は「軍詞之巻」の序相当で次のように述べる。

士トシテ戦陣ノ名目軍中ノ常法其働之善悪不知之而何ヲカ勤何ヲカ為シ。

このうち「戦陣ノ名目」を説くものが「軍詞之巻」に当たり「軍中ノ常法」を説くものが「軍容之巻」に当たり「其働之善悪」を説くものが「撰功之巻」に当たるのであろう。また永貞の子武貞はその著「疋夫之抄私解」で次のように

述べている。

軍詞軍容撰功ノ三卷ハ全牒甲州流ノ古法ヲ以テ書之。其事ノ不足ニ於テ且別家ノ書ヲ以補之迄也。故ニ其真理ヲ尋問トキハ皆古法ヲ以知之。追加ノ如キハ不然。古法ニ依事少シニテ武功ノ書ヲ集テ永貞私記スル所ナレハ追加トス。奥書ニ述ル如ク其品際限ナク其事ノ是非決スヘカラサレハ唯見聞スル所ニ随フ也。依テコレヲ追加トス。

「軍詞軍容撰功」の三卷は甲州流の古法を基準にして書き、足りないところを別家の書で補った。それでこれらを正編とする。したがってこの三卷は典拠がしつかりしている。ところが続く二卷は、永貞が私見をもとにして書いたものなので典拠とすべきものではない。それでこれは追加するのである。そういうのであろう。「甲州流ノ古法」とはおそらく「甲陽軍鑑」をさすのであろう。「別家ノ書」とは明らかでないが、甲州流の一派北条氏長らの著述をさすか、あるいは他流の著述をも含めて言うのであろうか。とにかく「正夫之抄」中の五卷の中に正編の扱いを受ける三卷と追加の扱いを受ける二卷の違いのあることは明らかである。そのことは内容上の相違とも関連する。つまり、軍詞に関連するのは正編の三卷であり、追加の二卷はそれとは直接の関係を持たない。

「軍詞之卷」の内容は二部に分類され、第一部では兵学用語が備定・行列・営法・城取・武者分・制法の六項に分類され、それらが更に若干に下位分類され、それぞれに兵学用語が列挙されるという方式を取る。第二部ではあらためて項目名として「軍詞」を設け、以下に兵学用語や戦場詞を中心にそれを文章形式で解説するという方式を取る(後述)。「軍詞之卷」がそのような内容を持つことは記述した。

「軍鑑挙要」の武者言葉集では分類概念としての項目名を定めず逐次列挙するという方法を取っていたが、「軍詞之卷」では項目名を定めて、関連の単語をその項目名のもとに一括してある。要門流の「武者言葉大概」のごときは、項目名を定めるものと定めないものとを混在させており、十分には体系的でないし、その後の武者言葉集にも分類不十分のものが多く、この点では「軍詞之卷」はすぐれている。有沢永貞の体系的思考法の感得されるところである。

次に、「軍詞之卷」の内容、即ち永貞の認める軍詞の範圍が兵法学用語の中でもかなり限定されたものであることが知られる。「軍鑑挙要」との比較から言えば、陣の備えや城の構造の一般論、戦場への行軍、途中の宿泊地の布陣、兵器、戦闘のための約束事、戦闘要員までを「軍詞之卷」は軍詞の主たるものとする。それに対し、「軍鑑挙要」は戦場への行軍に関するものを欠くが、戦闘行為に関するものを多く含める。即ち戦闘論一般、夜戦、物見、伏見、攻守（主戦・客戦）、勝敗、高名不覚、軍礼関係などに関するものが含まれる。「軍詞之卷」ではそれらを除外し、それらは「軍容之卷」「撰功之卷」等に納めてある。通常、軍詞や武者言葉の語によって理解されるような事柄のうち、主として戦闘行為以前に関するもの、戦闘のための前提的行動に限り、それを表現する兵法用語を「軍詞之卷」ことにその第一部に納めたと言つてよいであらう。

「軍詞之卷」の内容の大綱及びその記述法の二・三を示せば次の如くである。

備定

三箇之大本 手分 手配 手組

二之備 陰陽奇正・懸待

三之備 天人地

行列

備押之作法

頭奉行ハ先ニ乗。

先ヲ右トシ右ヲ先トス。

一行二行ハ道ノ広狭ニ随フ。

早静行止ハ太鼓ヲ以テ定。

道悪クハ作テ押。

一日ニ押道積。

家中旗本旗ノ押様。

當法

陣取作法

陣場奉行之事

小屋刻人数配

諸役者置様

虎口明様

篠垣

蹴出 外張

搔上

違土居

張番カギ・物聞

本簀カサリ 捨簀

陣払備

右座備・行列・陣取、戦陣三之備ト云。

古今定理之軍法也。

城取

城三様

平城

山城

平山城

繩張・虎口・門・馬出・郭・横矢・薮シロミヤシ・土居・堀・屏高下・櫓・橋・三段之堅固・城品々

武者分

侍大将 武者大将

足輕大将

六奉行 武者奉行二人

御旗奉行

持鎗奉行二人

制法

太鼓 螺

鐘

扱旗

集或纏・内居

馬験

守旗

見せ旗

軍詞

一 勅ヲ蒙テ朝敵ヲ退治ニ行ヲ節度使ト云。征伐トモ追討トモ進発トモ発向トモ云。
一 公方官領之出陣ヲハ御動座ト云。

一味方ノ人数ハ幾手ニ備タルト云。敵ノ人衆幾キレニ備タルト云。

一味方ノ手負ヲハ射サセタル・突セタル・切セタルト云。

一御馬イテマイレ・ツレテマイレト云。引テマイレト云ヘカラス。

なおこれらのうち「軍詞」とあるのは、山鹿素行の「武教全書」の「小身の士軍詞之事」にあるものを承けたものである。「軍詞之巻」にはそれらが五十三項目挙げてあるが、そのうち十六項目は永貞の増補したかと思われるもので、他は「武教全書」に載る。その十六項目も「武教全書」の解説を発展させれば自然に生じるようなものが多い。「枢要論」によれば、永貞は寛文二年に叔父関屋政春を経て「武教全書」を相伝されているので、このようなことがあつても不自然ではない。このことによって「軍詞之巻」の中に全巻の傾向とはやや違和感を持つ「軍詞」の項の存することへの疑念は解消される。軍詞の実体には若干曖昧な要素が感じられるとの私の既述は解消されるわけである。なお、「私解」を検するに、武貞はこれらが「武教全書」に基づくものであることを知らなかったようである。

「軍詞之巻」の記述内容との関連から「軍容之巻」に及べば、これは「出陣ヨリ合戦終ル迄」の巻である。二・三例示すれば次の如くである。

出陣ヨリ合戦終ル迄陣中作法

一諸侍各寄親組頭備頭ノ下知ヲ守リ万事少モ違背有間敷事。

一陣中備押ヨリ合戦終ル迄貝太鼓ニ随フヘシ。押行押留リ或急キ或静マリ人数ヲ揃ヘ備ヲ立居敷下リ立城ヘ取寄卷ホグシ

懸レ時守返ス時何モ太鼓ヲ以テス。紛レナキ様ニ太鼓ノ打様ハ物頭ヨリ言渡ス事。

一敵ノ首討取時咒文有。業尽有生 雖放不生 故宿人殿 同生仏果ト三反トナフルモノト言伝ル也。

一今日合戦日暮明日首実檢有之時ハ各討取首ニ札ヲ付ル。札ノ拵様付様ノ事。

小迫合大合戦様子并 勝軍負軍ノ事

小迫合ト言ハ両方トモニ本大將ハ不出シテ侍大將足輕大將互ノ境目ニ出合或ハ敵ノ宿城根小屋等ヲ焼或ハ夜中ニ如此ノ働ヲ

ナスヲ夜討夜込ト言也。或ハ能場ニテ馬ヲ入乗込乗切ナト言動アリ。所ニ依テ伏ヲ設テ敵ヲ引懸半途ヲ討。是ヲ察シ是ヲ防等ノ小サキ武功ハ皆小迫合ニアル手段也。亦国持大将对陣之内一手二手場中ニ出テ迫合ヲナシ城責ニハ虎口際ニテ押込押出シ日之内ニ幾度モセリ合事有テ勝テモ負テモ二三町ノ内ヲ追返シ或引取テ廿三四十程宛互ニ討レテ勝負ヲ争フ如キノ業ヲサシテ小迫合ト定メ勝負ハ人ノ多ク討レタル方ヲ負トス。惣テ戦ノ勢ヒハ唯一二人ノ勝負モカチタル方ニ其イキヲヒヲ増トイヘトモ小迫合一両度ノ勝敗ハ本大将ノ競ヒ後レトハサノミナサルモノ也。事ニヨルトイヘトモ大概如此。大合戦ト云ハ(略)

客戦・主戦

敵国ヘ働入ト我国ヘ敵ヲ引請ルト様々ノ品有之。先敵国ヘ働入ノ刻出陣ノ次第陣中ノ作法ハ初ニ書カ如シ。猶其事ヲ言シニ先其国ノ案内ヲ聞山川切所險難ノ地利ヲ考其身ノ手柄ヲ陣前ヨリ工夫スヘシ。

城責籠城

敵ノ居城或ハ枝城ニテモ永ク囲シテ責ルニハ時ニヨルトイヘトモ先敵城ヲ去ル事ニシテ陣付仕卒何レモ腰兵糧三人前アテ仕度シテサキヘ物見ヲ進メ地利ヲ見朝卯辰ノ刻ニ押寄虎口々々ヲ押ヘテ繰懸リニ取寄其後ニテ陣小屋ヲ掛ル也(略)

「軍容之卷」に述べることは「出陣ヨリ合戦終ル迄」のことであり、それは「軍鑑挙要」の武者言葉集にはそれに関する単語があり、「軍詞之卷」には欠けていたものの一部である。そういう意味でも、また一般の解釈でも、これらは軍詞に納めるものであり、その点これは「軍詞之卷」の延長と考えることもできるが、それを弁別する点に、「軍詞之卷」の特徴があるということもできる。事実、「軍詞之卷」と「軍容之卷」とには、その記述方法に根本的な相違が認められる。それは「軍詞之卷」では単に兵学用語を列挙するにとどめるという方法を取り、委細は講義の際の解説にまかせたのであろうと思われる方法を取っている。それに対し「軍容之卷」の内容は主として戦闘行為に関するものであるが、その記述方法はそれらに関する用語を列挙するものではなく、まず戦闘行為に伴う各種の作法、もしくは各人の心得とか部下に対する注意事項とかを細かく箇条書にして示す。その点に本巻の目的があると言えそうである。また、小迫合とはどういうものか、どんな場合がありうるかなどを文章形式で説明し、その行間に各種の兵学用

語を駆使するという方法を取る。用語を列挙することを主目的とせず、各種の戦闘状況を理解せしめて、諸侍の行動基準を理解せしめるのを目的とする。その解説の際文脈にかなった兵学用語は提示するが、関連する用語が多数ある場合も、それらは捨てて用いることをしない。この方法は客戦、主戦や城責、籠城の項でも同様に取られている。したがって「軍容之巻」に納められる兵学用語は各類の代表的なものに限られ、その他は省略されるということになっている。

次に「撰功之巻」は功名の種類を解説するもので、これも武者言葉集の中に含まれることの多いものである。「撰功之巻」の解説は「軍容之巻」と同様に解説文の中に功名関係の兵学用語を点在させるという方法を取っている。たとえば、「七段之手柄」の項では一番鎗の各項につき精しい解説を添え、「臆病者輕薄働之事」の項では首の種類名について解説を添えてあるが、それはもともとそれが功名の輕重の判定に関するためである。他は簡略に記述される。一体、戦闘のあとで功名の輕重に応じて正當に賞罰を与えることは兵家の最重要事であり、「疋夫之抄」には武田家における実検使の重責について述べることもある。即ち戦闘の際味方の勝敗にかかわらず、戦闘行為に全く参加せず客觀的に觀戦することによって味方の功名の輕重を客觀的に判定する役者の存在を述べている。撰功ということはそれほどの重要性和客觀性を持つべきことを含めて説かれたものであろう。したがってそこでは兵学用語が解説されたりはするが、たまたま必要上そうするまでであって、永貞の意図では、「軍詞之巻」のごとく術語を挙げることを目的とするものではないと思われる。次に「撰功之巻」の項目や本文の一部を挙げる。

合戦初ル相色鎗高名ノ次第並位定之事

敵味方ノ間一町程ニ近ヨレハ早互ニ鉄砲迫合初ル也。此時心懸次第諸侍長柄ヲ越出ヘシ。猶敵合近ヨリ一町ノ内ニ成トキハ早弓足輕モ矢ヲ放スモノ也。其間三十間斗ニモ詰寄ルトキハ足輕ハ早侍ノ跡ト成也。此時勇者次第味方ヲ離五間モ十間モ進出ルトキハ其備釵先ニナリ敵味方ノ間七八間ナラテナシ。其時弓鉄砲ニアタリ深手ヲ負或ハ死スル者ヲ進出討ヲ場中

高名ト言。扱猶近ク成テ鎧ヲ入初ルヲ一番鎧ト言。続テ二番鎧アリ。此時日比ノ得道具弓鉄砲等ヲ以テ右鎧ニツツキヨリ打射出スヲ鎧脇ト言。鎧ノ合ウチニ手負死人アルヲ其首ヲ討取ヲ鎧下ト言。一二ノ鎧々下ノ高名過レハ早何方ソ崩色付テ備ノ後ヨリ崩ルルモノナリ。其時敵ヲ討ヲ崩際ノ高名ト言。扱此後懸之追首也。一番首或ハ甲付高名ト号シ拔群トスル穿鑿甲州流ニハ無之事。(略)

右七段之手柄委細批判事

一 一番鎧 二 二番鎧 一場中勝負高名 一 鎧下 一 崩際 一 鎧脇 一 組討 一 生捕 一 敵ノ雑人等討所ナキ者ハ家来^{ママ}ツ、カハ生捕テ然ルヘキ事 一 鼻

味方勝テ敵ヲ追時働之事

一 驗 一 能侍者頭ヲ討事 一大将ヲ撃事 一家衆翻者 一 守返際 一 打留ノ高名

味方退返合時働之事

一 小返 一 一手守返ノ事 一 惣返ノ事

城責手柄之事

一 一番衆 一 先ニ進屏下ニ付事 一 虎口際迫合 一 能仕退事 一 能引退事 一味方ヲ助ル事 一指物ヲ落シ取テ帰ル事

味方惣敗軍之後手柄之事

一大将ニ付事 一大将ニ馬借事 一 後駆ノ事 一 後ロノ高名 一 道具ヲ拾事

不覺之働

臆病者輕薄働之事

一 病首 一 女首 一 拾首 一 奪首 一味方討 一作首作武辺 一 狄鎧

生得臆病者形儀事(略)

武道不知不覺之事(略)

惡氣臆病之事(略)

手負之批判(略)

仇討(略)

放討(略)

以上「軍詞之卷・軍容之卷・撰功之卷」の三部が「疋夫之抄」の正編に当たるものである。

その正編三卷の所載事項について、「軍鑑拳要」の「武者言葉集」との関係項目名を中心に形式本位に比較すると、

両者はほぼ相対応する関係にあることが知られる。しかし「正夫之抄」について各巻の著述意図を中心にして検討すると、各巻がそれぞれ異なる意図のもとに著作されていることが分かる。即ち純粹に兵学用語の採集分類を意図したのは「軍詞之巻」のみであり、他の巻では軍詞は副次的に記述されるにすぎない。軍詞ということが、軍容・撰功と並立されるような位置を「正夫之抄」において与えられている。「正夫之抄」は本来小身の侍に対して侍としての教養を説くものであり、そのことは「私解」に「右軍詞之巻ハ其名目ヲ拳テ知シムル為也」とあることによって知られる。その「軍詞之巻」の存在は、兵学上の術語教育を媒介にした言語教育が一つの座席を与えられていたことを意味するものと思われる。別の面から言えば、平侍に対する兵学上の指導が「正夫之抄」の範囲であり、「軍詞之巻」に挙げられる軍詞についてその学的知識に通じることが平侍の兵学上の教育の全てと考えられたのではなからうか。有沢派においても、兵法学は指揮者階級の学問と考えられていたのではあるまいかと考えられるのである。

「軍詞之巻」の各項に配置された術語は、それぞれの意味分野における術語体系との関係で考えると、術語体系中の多くの術語が欠落しており、それ自体決して十分な語彙表を備えているとは言いがたい。たとえば城郭用語においてそのことが言える。有沢永貞は早くから城取りを研究し、城郭に関する事項は彼の得意中の得意であり、それに関連する著述には、「城取品節抄」「城取本元抄」「城取離格問答」「城取奥秘九箇条」「城取奥秘九箇条疎註」「城取奥秘口解」「城図」「諸国城図附録」「平山城之図」「中陽軍鑑正夫之抄五城之図」等の多数を数える。それほど専門家であるにもかかわらず「軍詞之巻」に採用した城郭関係用語を、北条流の遠山信景が「軍詞之巻」の再編以前に公刊した「士鑑用法」（承応二年刊）と比較すれば、語彙量においても関連語の意味分野においても不備な点を多く持っていることに気付かされる。それらの不備な点は、永貞が元禄二年に本書を再検討した際、そのつもりでさえあれば既刊の「士鑑用法」を契機にしても十分改稿しえたはずである。にもかかわらず、今我われが不備と思われるような形のまま、残置したのであろうのには、それなりの意図のあったことと思われる。即ち、永貞にとっては、単なる語彙

量の増大とか項目数の増加とかが軍詞の指導についての最大目標ではなかったであろう。それらのことについては城取りに関する各種の指導に際して十分になしうると考えたことであろう。

軍詞の指導について永貞が何を意図したか、それについて永貞は述べてない。が、武貞の「私解」の解説がそれに就いて恰好の資料を提供している。既述したように、「天下ノ軍サコトバニシテ通用ノ詞ナリ。私ノ軍法ニテ諸国ニ不知コトバハ用ルニ不足」と規定している。軍詞の定義にあたつて、「天下ノ軍サコトバ」であることと、「通用ノ詞」であることとの二つの条件を挙げている。「天下ノ軍サコトバ」であることは、幕府の御用兵学としての甲州流の兵学用語をさすのであるべく、それは「私の軍法ニテ諸国ニ不知コトバ」としての、他流の兵学用語で一般的に使用されているとは必ずしも言えないような用語に対するものであるべく、同時にそれは軍詞における標準語意識、もしくは學術用語としての兵法用語の基準意識のようなものを持つものであらうことについては既述した。更に「私解」に述べるように、「正夫之抄」の正編三巻が「甲州流ノ古法ヲ以テ書」かれ、足りないものは「別家ノ書ヲ以補」われるという手続によっていることもそれを権威づけるものとして考えられたかも知れない。

永貞の意図したと思われる軍詞は、兵学用語のうち、戦場における戦闘以前の行動に関する術語に限定されるし、それらも古典に典拠を有するものに限定される。おそらく永貞はそれらの術語こそが兵法学一般に通じる學術語たるにふさわしいものであると考へたのではあるまいか。もつとも永貞はそのことについては述べていないが。もつとも「私解」中巻の「屋敷構」の解説に見られるように、「軍詞」は特定の視座から判定されたものではあらう。即ち、居宅としての「館」は堀など構えてあるが、それを「急難ヲ辟ルノ便リト」と解する立場からこれを「軍詞屋敷構」と称する。「館」を兵学用語から除き、「屋敷構」を兵学用語に加える。また「堀」につきこれを「水堀・洞堀・障子堀・立堀・捨堀」などの用語に分類する。そこにも「軍詞」の性格が見られる。

武貞は少し違う。少なくとも武貞は、永貞が「軍詞之巻」の中に素行の著述に由来する「軍詞」の項を添付したこ

とについての永貞の意図を知らなかったものと思われる。というのは「私解」における「軍詞」の項の解説に次のように述べ、以下の項にも素行の「武教全書」の当該項のことには触れないからである。

軍詞

是ヨリ末ニ書所ノ軍詞甲州流ニモ限ラス天下通用ノ詞也。惣テ軍サ詞ヲシラザレハ縦ヘ二三度働キアリテモ殊外弓矢ノ作法不案内ニ見エテ不宜モノト云々。結要本ニモ此事ヲ述タリ。

武貞はこの「軍詞」を「軍サ詞」と解し、「甲州流ニ限ラス天下通用ノ詞也」と解説した。この解説は「私解」の冒頭で、「軍詞之卷」について「天下ノ軍サコトバニシテ通用ノ詞ナリ」と解説した見地とも共通のものである。してみると、武貞においては「軍詞」は「軍サ詞」であり、自流の軍詞は「当時江戸ノ御軍法モ皆甲州流ナルユヘニ天下悉是ヲ用ル多シ」、即ち甲州流が幕府の御用兵学となつたため他流も甲州流兵学の用語を使用し、その結果甲州流の兵学用語は天下通用の兵学用語になつたのである、ということになる。しかし永貞は軍詞を六項目に分類してそれらに所属する用語を挙げ、後半に素行の「武教全書」に基づく「軍詞」その他を挙げる。永貞にとっては「軍詞」等は参考資料に過ぎなかつたのであろう。素行は「小身の士軍礼品々」に関連して「軍詞」を挙げた。永貞には素行の立場が理解されていたであらう。したがって実地の教授上でそれをどのように運用したかは明らかでないが、永貞自身の軍詞についての解釈をつきくずすほどの重みをそれに与えなかつたであろうことは容易に考えられる。要するに、軍詞という語の把握について永貞と武貞とは齟齬があつたのであろう。それは、兵法実学を旨とする永貞と、「兵法ト云ワ士法ト云事也」とする武貞との思想上の差違に由来するものであろう。それは単に個人の体質的相違ということだけに関連することではなく、時代の思潮の変遷にも関連することなのであるかも知れない。

永貞の兵学体系における「軍詞之卷」の位置づけはどうなるのであろうか。「軍詞之卷」における術語はそれぞれの語彙分野の中で占める座席が量的には決して十分なものではない。永貞は軍詞を六種の語彙分野に分類する。これを

六種の語彙体系に分類すると理解するなら、それぞれの語彙体系を小数の術語で代表させるにとどめているわけであり、それは決して語彙の充実による術語教育の充実を所期するものとは言えない。永貞の意図はそのことにはなかったであろう。永貞は有沢派兵学の体系を樹立した人である。体系的思考法には長じるが、部分的充実には本来興味を持たなかったであろう。おそらく永貞の意図は、甲州流学徒に対し言語的観点からその兵法学の優越性に対する自覚を迫ることにあったであろう。そのことは「私解」の冒頭における辞句によって知られる。即ち「私ノ軍法ニテ諸国ニ不知コトバハ用ルニ不足」であるが、甲州流の兵法用語は諸流一般に用いる用語なので「天下ノ軍サコトバニシテ通用ノ詞ナリ」ということができる、とする点にそれが見られる。これはもちろん「私解」における武貞の解説ではあるが、それは武貞が平素永貞から聞き知ったものであると解することができる。そのような自覚に立って、兵学用語のうち戦闘以前のものに限ってそれを「軍詞」と命名し、それを六分野に分類する点に「軍詞之卷」の特性が見られるのである。

武者言葉集を兵法学の体系の中へ導入したばあい、それにどのような学意義を期待するかは、兵法学の流派の違いによって相違することが多く、常に同一ということはできない。甲州流祖小幡景憲の指導のもとに成立した「軍鑑挙要」のばあい、既述のように主たる目的は「甲陽軍鑑」の読解を容易ならしめる点にあったと思われる。その小幡景憲の弟子であり有沢永貞にとっては師である山鹿素行は、軍詞を小身の侍の心得るべき軍札に関するものとして述べている。素行にとって兵法学は士道における実学としてあるものであり、そのような立場から素行は軍詞を説いた。素行は言語教育については「武教小学」の「言語応待」の項とか、「山鹿語類」巻第二十一の「慎言語」などにおいてその基本的姿勢を述べているが、「武教全書」の軍詞は小身の士の心得るべき具体的事項として説かれたものと理解することができる。諸礼家としての小笠原流水島派では、「軍詞乾押之卷伝記」において、伊藤幸氏の言と覚しきものによって「当道ハ軍詞ヲ習覚シテ仮初ニモ人前ニテ弱キ詞ノ禁句ヲ吐ヌ嗜專要也」と述べる。兵学者は武者言葉の具体的用法を知悉し、その具体的使用に当たって誤るところのなきを期せねばならぬが、我ら諸礼家の立場はそれとは異っている。

それを武者言葉について言えば、それらを具体的に習得して武者言葉による言語的交流の本質を理解し、必要に迫られてそれを使用する場に遭遇したばあい、その本来的用法にかなうように適切に使用することこそ当道の目的とするところである。幸氏の意図はそこにあるらしく思われる。武者言葉集を小身の侍のための軍礼指導の一端とするものには要門流の「武者言葉大概」を初め数多く挙げることができるが、多くの現存の武者言葉集では兵法学体系の中で座席も定まらぬし、武者言葉の概念さえも明確でないことが多い。それらに比較すれば、これは甲州流諸派はもちろん他流一般の中でも、確乎とした座席指定を持つ稀な例の一つである。

注(1) 杉本勲氏「近世実学史」の研究(昭和三七年、吉川好文館)。田原嗣郎氏「徳川思想史研究」(一九六七、未來社)など。

言語資料

(注。「正夫之抄」は有沢永貞自筆本とされるものによる。「正夫之抄」も「私解」もともに金沢市立図書館蔵本による。)

夫兵法ノ教其事繁フシテ其品多シ 是ヲ導クノ諸流事理本末ノ弁見聞スルニ暇ナシ 然ルニ士トシテ戦陣ノ名目軍中ノ常法其働之善惡不知之而何ヲカ勤何ヲカ為シ 故ニ其至近ニシテ不知シテ不^レ叶ノ品々ヲ集而正夫之抄トス 如^レ此ノ雜記近世其類無ニアラス 然トモ其利多クハ私ニ出テ戦国ノ風儀ニ遠キアリ 故ニ甲陽軍鑑ハ中興軍法ノ龜鑑ニシテ其伝広シ依^レ之余亦若年ヨリ学之粗^キ其要旨ヲ聞 然ルニ其書多其言繁フシテ或勤仕無^ニ閑暇^一或老学無余才而始終ヲ聞正ス事成カタキノ士ニ於テ当務ヲ以早々知シメント欲スルニ有而已

兵法拔書正夫之抄

軍詞之卷

備定

三箇之大本

手分 手配 手組

二ツ之備

陰陽 奇正^{キセイ} 懸待^{ケンタイ}

三ツ之備

天 人 地

七段之備

旗本 前備 脇備 右 左 後備

一之先 二之先 小荷駄奉行備

此外遊軍アリ 或浮勢

図云(略)

一備手組

侍五十騎 組頭二騎

鉄砲 弓 足輕五十人 大将二騎

長柄五十本 奉行二騎

旗本五本 馬驗二本 奉行二騎

侍大将 具太鼓 持筒 持弓 持鍵 歩者等アリ 自分ノ侍有之則シハ使役トス

五行座備之図(略)

旗本或大備手組

騎馬 大近習 奥近習

足輕 先足輕 持足輕

長柄 役長柄 御長柄

旗 惣旗 御旗

右段々頭奉行有之

歩行衆 組ヲ分 頭ヲ分 小人中間上ニ同

諸役者 六奉行 使番 目付 横目

右之外戦用無之役人数多有之

(図略)

先衆手組

同心与力 組 相備

警固^{ケイコ} 目明 実験使

右備立戦法之变化握勝^{ウケカチ}之要之

行列

備押之作法

頭奉行ハ先ニ乗

先ヲ右トシ右ヲ先トス

一行二行ハ道ノ広狭^{ヒロサ}ニ随フ

早静行止ハ太鼓ヲ以テ定

道悪クハ作テ押

一日ニ押道積

家中旗本旗ノ押様

一手備押之次第

旗 足輕 長柄 使役 乗替 集馬駿

貝太鼓 歩 侍太 手鑓 中 騎馬 先同心 跡被官

旗本備押之次第

先足輕 役長柄 惣旗 持筒 持弓

御馬 柄 使番 御乗替 御旗馬駿

檢見 目付 持鑓 太鼓 武者奉行 歩行衆

御手道具 御手道具 大將 使番 近所用人 横目

殿足輕 奥近習 大近習 使番 褒美長柄 目付

諸軍備押之次第

一之先 二之先 前備 旗本 右脇

左脇 後備 奉行 小荷騎 奉行 旗本 右脇

營法

陣取作法

陣場奉行之事

諸役者置様 虎口明様 篠垣

蹴出 外張 搔上^{カキ} 違土居

張番 カギ 物置 本簀 拾簀 陣拂備

本陣構作法

搔上

内虎落^{ウチモロ} 勝手 厩 出仕所

門	平門	櫓門	扉	臂金	地伏	透門	挙城方	双虎口
虎口	内升形	一之門	二之門	外升形	武者屯	馬屯		
大手	或追手	捌手	陰陽之繩					
繩張	本城	二三之郭	郭或曲輪ト書	内外惣テ丸トモ云				
城ニ三ノ様	平城	山城	平ラ山城					
城取	右座備行列陣取戰陣三ツ之備ト云							
大陣取	大人数之時旗本用之							
山陣取	後虎口	脇虎口	腰郭	人数配				
相陣取	惣軍連陳取	(図略)	(図略)					
方陣取	方陣取	(図略)						
栖櫓	見せ櫓	編敷	樂堂	柵木場	御旗	鍵立		
隱虎口	馬出	角馬出	丸馬出	辻馬出	曲尺ノ馬出			
郭	内郭	外郭	腰郭	横郭	斜郭			
捨郭	惣郭	出丸						
横矢	升形	邪形	屏風折					
土居	土居	屏	櫓	植物	屋敷			
堀	商下	勾倍	内外	芝土居	石垣			
武者走	雁木	合板	重坂	犬走				
水堀	潤堀	堀ノ内	道	障子堀	立堀			
捨堀	糞捨	塵取	塵防					
屏高下	真草	狭間	鉄砲	弓	重狭間			
覆	枳木							
石打棚	出屏	塵落	棚	虎落				

櫓 大小 二械 三械

渡リ 櫓 着到櫓 水櫓 天主 或ハ殿守

升形 橋升形 袖升形

橋

土橋 掛橋 引橋 廊下橋 並橋

長橋 欄干板 土橋葺

三段之堅固

国堅固 繁昌之地

郡堅固 防戦之地

城堅固 守成之地

城品々

国主居城 郡主居城 境目之城

取出 陣城 付城 向城 屋敷構

武者分

侍大将 武者大将

足輕大将

六奉行

武者奉行二人 御旗奉行二人 持鐘奉行二人

頭武者

組頭 番頭

歩頭 中間頭

物奉行

御長柄奉行

役長柄奉行

惣旗奉行

使武者 使番トモ

目付 横目

諸士 近習 外様 直参 同心 与力 又者

歩武者

徒虜武者

青葉者 或白齒

出法武者

右之外諸奉行

小荷駄奉行

作事奉行 兵糧奉行

此外陣中諸役人小姓咄衆納戸奉行

御膳奉行台所奉行賄方等ノ役人ハ

軍戦ノ用ニ非ス 其家風ニ随ヘシ 一枝

一芸ヲ以テ無テ不レ叶役人

文者 右筆 軍配者 出家 法印 使僧医者 本外

郷導 水練 忍或出拔 乱波トモ算ン勘ン者 大工

細工 金穿^{オサ} 鍛治^カ 猿^ル 樂^ク

制法

大鼓 螺 鐘 扱^ツ旗

集或纏 円居 馬駿 守駿 守旗 見セ旗

対指物 冑前立 三ツ卷 袖印^{スエ}

笠印 团扇 采幣 扇

合札 合^{オム} 相言

燧火或狼煙 相図ノ火 飛脚^{オウ}簞

軍詞

一勅^{オウ}ヲ蒙テ朝敵ヲ退治ニ行ヲ節度^{セツト}使^シト云 征伐トモ追討^{オウ}トモ

進発トモ発向トモ云

一公方官領^{キョウ}之出陣ヲハ御動座^{オウ}ト云

一陣トハ人数ヲ動カシ他国ヘ働ノ惣号也 故ニ陣中対陣出陣

歸陣ト云

一道ヲ打テ行間ヲ行軍ト云 其次第ヲ定ルヲ行列ト云 或備

押ト云 押陣武者押ナト、云ハ俗語也

一一夜陣ヲハ陣場ト云 五日トモ留ル所ヲ陣所ト云

一家ニ陣ヲナスヲ宿陳野ニ陣スルヲ野陣ト云

一陣ヲ取テ居ルヲ張ト云 引トルヲ拂ト云

一陣具柵木^{サカ}ノ類ヲハ取ト云

一柵ノ木ハサクト云時ハ付ルト云 シヤクト云トキハフルトモ云

一味方ノ人数ハ幾手ニ備タルト云 敵ノ人衆幾キレニ備タルト云

一大軍出合テ戦ヲ合戦ト云 一手ニ手或ハ足輕ニテ勝負ヲナ

スヲ小迫合或ハ足輕合ナト、云

一定レル勢ノ外一手ニ手ニテ別所ヘ行ヲ働ノ勢ト云

一進出ル備ノ跡ニ扣タルヲ胴勢ト云

一敵地ヘ働入退クトキ跡ニ扣タルヲ胴勢ト云

一敵地ヘ働入退クトキ跡ニ残り敵ヲ押ユルヲ殿リト云 或尻^{シツ}払ト云

一二二手敵味方相向テ迫合前ヲ守合ト云 ヒシト近寄ヲ鎧組ト云

一喰付喰留ルトリクサル事

一横鎧廻備ノ事

一小返守返惣返ノ事

一戦ノ場ヲ不^レ動ヲ芝居ヲ蹈ユルト云

一敵ノ首ヲ取ヲ高名ト云 討タル敵ノ太刀等ヲ首ニ添来ルヲ

分捕高名ト云

一敵国ノ村家ニテ人馬財宝ヲ奪取ヲ乱取或乱放ト云

一味方ノ人数引取ヲハアクルト云

一味方ノ敗軍スルヲハタテラレタルト云

一味方ノ手負ヲハ射サセタル突セタル切セタルト云

島 田 勇 雄

一 討死シタルヲハ討死遂タルト云

一 味方ノ城ヲ敵ノ責破リタルヲハヤフラセタト云

一 節所山川谷堀ナトヲ敵ヨリ越タルヲハ越サセタト云

一 国端村里ヲ敵ヨリ取タルヲハ其所里ヲトラセタト云

一 敵地ヲ焼ヲ放火ト云 味方ノ地ヲヤクヲ地焼ト云 或ハ煙

ヲ立ルト云

一 陣屋或ハ城ヨリ立煙ヲ飯霞^{イシカシ}人氣ト云

一 城ヲトリカコムヲ卷ト云 人数ヲアクルヲホゴスト云

一 寄口持口ノ事

一 敵城攻落スヲ乗取乗定ムルト云

一 攻取タル城ヲ破却^{ハキ}スルヲ掃^ハト云 亦城ヲ割トモ云

一 敵ノ橋ヲハ引ト云 味方ノ橋ヲハハネルト云

一 味方ノ馬ヲハイサムト云 敵ノヲハイナ鳴ト云

一 味方ノヲハ馬煙又ホコリ武者煙ナト、云 敵ノヲハマケア

リト云

一 味方ノ幕ヲハ打ト云 敵ノ幕ヲハ引ト云 船中ノ幕ヲハハ

シラカスト云 遊山見物ノトキハ張トモ云

一 太鼓ヲハ打トモイサムルトモ云

一 貝ヲハタツルト云

一 関ノ声ヲハツクルトモアクルトモ云

一 旗ヲハ立ルト云 納ルヲハマクタ、ムトハ云ヘカラス ア

クルト云

一 旗竿ハ切ト云ヘカラス ホルト云

一 矢ノ筈ヲハタツト云

一 旗ヲハ指ト云

一 母衣ヲハ掛ルト云 或ハス、ムルト云

一 空穂ヲハツクルト云

一 矢庫^{ヤクラ}箆ヲハ負ト云

一 箆ヲハタクト云

一 野狼煙ヲハアクルト云

一 御馬イテマイレツレテマイレト云 引テマイレト云ヘカラ

ス

一 人数五千トモアラハ軍勢ト云ヘシ 其ヨリ内ハ手勢ト云ヘ

シ

周礼^{シウレイ}六軍数

五人為^ス伍

五伍為^ス兩 二十五人

四兩為^ス卒 百人

五卒為^ス旅 五百人

五旅為^ス師 二千五百人 五師為^ス軍 一万二千五百人

王六軍 大国三軍 次国二軍

小国一軍

諸葛孔明八陣

天地風雲竜虎鳥蛇

軍詞之卷 私解上

兵法拔書正夫之抄三冊軍詞軍容撰功追加二冊兵器武功 有沢永貞作之ヲ治世ノ士年ヲ逐テ戦国ニ遠サカリ戦陣ヲ勤メタル正夫ノ業ヲモ不知成行ニヨリ是ヲシラシメンタメ其類ヲ寄テ集之其趣ヲ伝語スルノ便リトス 然ルニ予先年粗註ヲ加フト云トモ未タ全カラス 其後図解巻数七箇ヲ作テ猶是ヲ得知スルノ助トスル也 今年有故 其私解ヲ改メ作シ軍詞軍容撰功武功ノ註詞全ク成就ストイヘトモ兵法ノ始終ヲ尽スニアラス 唯正夫抄ヲ解スル而已也 有沢武貞

正夫抄序

夫兵法ノ教

兵ト云ハ士ヲサシテ云 孫子曰兵者国之大事死生之地存亡

之道也不可不察也ト云々 兵ハ器械ニアラス 執之者ヲ云凡人タル衣食住ノ三カケテハ生ヲ養ヒタシ 然ルニ農ハ田ヲカヘシ蚕ヲヤシナヒテ衣食ヲ調エ工ハ其器ヲコシラヘ家ヲ作テ居ヲ安クシ商ハ其間ニ有テ器ヲ農人ニ配リ食ヲ工人ニアタヘテ事ヲ調ル也 是ヲ天下ノ三宝ト云 士ハ其業無シテ三民ニ長タル所以ハ能三民ヲ守護シテ邪惡ノ者ヲ征罰シテ太平トナスノ役人也 其士ノ中ニ主將士ノ三段アリ 其命ヲ出スハ主也 其命ヲウケテ施スハ將ナリ 其令ニ隨テ行ハ士也 故ニ士ハ英雄也 英雄ノ心ヲトルハ主將ノ法ナリトイヘリ 主將士其道ニカナフトキハ国家易ク其道ニタカウトキハ危シ 依テ兵ハ死生存亡ノカ、ル所国之大事ト云ナリ 其兵法ノ教ヲ知ル士ノ当然也 其事繁フシテ其品多シ

今兵法諸流多フシテ書ヲアラワシ伝ヲヒロクシテモ猶不足ノ事多ク其道ヲ全フセントスルトキハ五百年來天下ノ治乱ヲ考ヘサレハ能ハ知カタシ 故ニ事多シト也 是ヲ導クノ諸流事理本末ノ弁見聞スルニ暇ナシ

兵ヲ談スルニ至テ或ハ軍配ヲ貴トミ軍器ヲ作り或ハ兵術ヲ專トシ偽謀ヲ旨トシテ大本国家太平ノ法タル事ヲ不知トシテ其理ヲ以テ本トスルノ教ハ天文術数兵器計謀ハ皆兵法ノ

枝葉ニシテ大本立テ後用之ニ利アリトス 或ハ仁義ノ説ヲ交ヘ語テ其末業ヲ輕ニスル者亦多シ 或ハ又兵ノ要沉淪シテ末業ニ泥ム者ハ其本ヲ不知 其本源ヲ貴トム者ハ其業ヲ不勉 故ニ本末差別セルトテ是ヲ一ツニツラヌキ教ヘントスルアリ 依テ見尽シ聞尽スニ暇ナシト云云

然ルニ士トシテ戦陣ノ名目

事繁キトテ士タルモノ陣中ノ名目ヲモシラテハ不叶事也

此末軍詞之卷ニ是ヲ挙ル也

軍中ノ常法

出陣ヨリ合戦終ル迄ノ作法様子此次軍容之卷ニ有増出スガ

如シ

其動之善惡不知之而何ヲカ勤何ヲカ為シ

合戦迫合勝敗ノ間ニ士ノカラヲ尽シテ働クニ高名トナリ不

覺トナルノ品節ヲ撰功之卷ニ類ヲ寄テ論スルカ如シ 軍詞

軍容撰功等ヲ不知シテ其勤ル所何ニヨツテカ為シト也

故ニ其至近ニシテ不知シテ不叶ノ品々ヲ集テ疋夫之抄トス

前ニ云如ク其事広ケレトモ我一分ノ勤ニハサノミハ不入也

戦国ノ士ノ度々ノ陣ニ馴テ自然ト覺エタル事ヲ聞テ集メ或

ハ其書ヲ拔書テ今治国ノ士ニシラシムルタメニ軍詞軍容撰

功ノ三卷ヲ作テ疋夫之抄ト号スルト也

如此ノ雜記近世其類無ニアラス 然トモ其利多クハ私ニ出テ

戦国ノ風儀一遠キアリ

或ハ北条氏長ノ作ノ小身百箇条雄鑑雄鑑或ハ山鹿義呂カ作

神武雄備集武教全書等ノ書其品多ク其余挙テカソヘザルノ

書モ又多シ 何レモ一理有ガ如シイヘトモ全ク戦国ノ風儀

ニ叶フ者常也 軍書ハ唯理ノヒキク業ノ叶フヲ第一トス

此善惡ヲ見分ル事成トキハ無師シテ兵法ニ至ル也

故ニ甲陽軍鑑ハ

軍書ハ多シトイヘトモ自身戦国ニ書タルモノ稀ナルモノ也

皆治国学者ノ筆作也 軍鑑ハ武田家ノ家老高坂彈正昌信信

玄公御一代ノ事蹟ヲ記シ且其末書上下卷并ニ結要本ニ奥旨

ヲ書モノニシテ如此モノ又無之

中興軍法ノ龜鑑ニシテ其伝広シ

依テ軍鑑ハ中興ノ軍法ノカミミトス 龜鑑ハノリカンガミ

ル也 然ルニ其軍鑑モ十九冊末書ノ上卷一冊下卷ノ内上中

下各九品ニテ廿七品結要本又九品アリ 是ヲ小幡氏景憲ヨ

リ伝エ来リテ次第ニ其伝広ク成テ悉ク詳カニ知ントスルモ

一生ノ学也

依之予亦若年ヨリ学之粗其要旨ヲ聞

予トハ有沢永貞 此抄ノ作者也

然ルニ其書多ク其言繁フシテ或勤仕無閑暇或老学無余才而始終ヲ聞正ス事成カタキノ士ニ於テ当務ヲ以早く知シメント欲スルニ有而已

本文ノ如ク軍鑑末書ノ伝ハ事繁ニヨリ指当ル事ヲ先シラシメン為ニ疋夫抄三冊ヲ作ル 然トモ此簡条トモノ奥旨ヲ委ク正シ知ント欲セハ軍書皆明ラメサレハヨクハスマヌ事也 右軍詞軍容撰功ノ三卷ノ外ニ兵器武功ノ二卷ハ追加ニシテ軍鑑ノ古法ハ少ク多クハ集メ書也 別而秘事多シ 但大事ト云ニアラズ 秘事ナル故ニ漫リニ不伝之 猶其所々ニ断之

兵法拔書疋夫之抄軍詞之卷

拔書

一 甲陽軍鑑之末書惣テ甲州流之書ヨリ拔書ナリ 他家ノ書トイフトモ其実理ニ叶フハ拔書也 就中兵器武功等ニ到テハ古兵ノ遺書談話ニ伝ルモ悉ク集メテ出之 故ニ拔書也

疋夫之抄

一人シテ働キヲナス小身者疋夫ナリ 大軍ノ大将ニテモ自身ノ働キヲナストキハ疋夫ノ功ヲシラズシテハ成ガタシ 亦大将ノツカウ処ノ士卒ハ則疋夫ナレハ其事ヲ不知シテ不

叶也 故ニ疋夫ノ業ハ兵法ノ初メ也 抄ハシルス也 軍詞之卷

天下ノ軍サコトバニシテ通用ノ詞ナリ 私ノ軍法ニテ諸国ニ不知コトバハ用ルニ不足 然トモ甲州流ノ軍詞ハ專用トス 是ハ当時江戸ノ御軍法モ皆甲州流ナルユヘ天下悉ク是ヲ用ル多シ 其外モ諸国タシカニ謂ナラハス言ヲ少々加之 猶古キ家ノ国主等ノ下ニ余国ニ替リタル名目等有之モノ也 是ハ其一国ヲモ治メラレテノ上ニハ一派ノ軍詞モ有ヘキ事也 近代天下ヲ知玉フノ主信長公秀吉公ノ家風ノ名目アリ 御当家天下ノ名目アリ 前ニモ云コトク様子ハ少シ替ル共法ハ甲州流ヨリ出ル所ナレハ是ヲ以テ本トシ余ハ加之 委クハ其所々ニ是ヲ断ルベシ

備定

人数諸道具打マシワツテ其法全ク欠ル事ナキヲ備ト云 殊ニ敵ト打合セ合戦ニ及フトキ備ヲ立テ其法宜キトキハ勝利ヲ得ルナレハ始ニ書之 此末ノ簡条ト七備ニ付テノ事多シ 三箇之大本

是甲州流ニ定ムル処ニテ軍法ノ大本也 委ク論スレマ 極位ニシテ又最初ナリ

手分

其国其家中ノ人数ヲ一ツニ合セ出テハ合戦スル事不叶 故

ニ其類々ヲ以テ幾手ニモ組ヲ立テ分ルヲ云 其分様ニ重々
習有事也 此次々ニ段々ニ知ル事也

手配

右何十手ニモ分タル備ヲ前後左右エ各何程々々ト配ルヲ云
也 分タルハカリニテ其配当ナキトキハ用ニ不足ナリ 猶
配リ様ニモ軽重ノ釣合ニ習アリ

手組

右分テ配リタル備ノ合戦ニ臨ムトキハ何レノ手ハ何レノ手
ヨリ救エト兼テ其組合ヲ定置ヲ云也 是戦勝利ノ本ニテ其
仕様品々習有 又ハ一備ノ内侍何程弓鉄砲鑓旗各何程宛頭
奉行何人ト組合スルヲモ手組ト云也 是又大備小備ニ付テ
習有事也 畢竟分配組ノ三ツハ一ツニシテ其仕様ノ差別ニ
ヨリテ習有事次々ニ委シ

二ツノ備

惣テ戦ヒ敵ハ一手ニ備テ懸ルトモ味方二ツニ分テ一ノ手敵
ト取合トキ二ノ手横鑓ヲ入テ勝ヲ取 此法ナクシテ押テ敵
ニ勝事モ多シトイヘトモ其ハ力ヲ勝ニテ誠ノ勝利ト云印シ
ナシ 軍法ト云ハ是也 和漢諸流ノ軍法此事アラズト云事
ナシ 但シ二ツト云ニ大小ニヨリテ其矩違ヒアル事其品無

際限事也

陰陽 奇正 懸待

初合戦ハ定テ陰也 二ノ手横鑓ハ変シテ陽也 然トモ陰ニ
陽アリ 陽ニ陰アル事無極 是ヲ孫子ニハ奇正ト云 正兵ハ
陰也 奇兵ハ陽也 陽ハ懸也 陰ハ待也 然ニ正兵初メニ
敵ニ向ハ懸也 奇兵ハ正兵ノ敵ニ向ノ様子ヲ見合居ル所待
也 是則陰中陽陽中陰也 又合戦闊乱シテ奇返テ正トナリ
正返テ奇トナル事アリ 是陽変シテ陰トナリ陰変シテ陽ト
ナル 其品委ク論スルトキハ無際限事也 此外ニモ陰陽異
名ハ如何程モアリ 唯軍法武功ト云ハ時ニ臨ンテ奇正ノ備
ヲ用ル事也 故ニ二之備ハ戦勝ノ理也 孫子曰戦勢ハ不
過ニ 奇正一ト云々

三ツ之備

右陰陽二ツノ備ニテ勝ヲトルトイヘトモ自然敵変化アルト
キハトリ備ヲ以テ勝ヲ握ル也 陰陽ニトリノ一手ヲ加エテ
三段ノ備也 是ニテ勝利全キ事甲州流ノ軍法也 五十騎ヨ
リ十万迄皆此三段ノ備ノ法ヲ以テス 二ツノ備ハ戦勝ノ利
和漢古エヨリノ法也 三ツノ備ハ人数ノ立様勝ヲ握ノ理ヲ
含ム事甲州流也 縦ヘハ十ガ五分ハ先三分ハ勝ヲ取ノ備ニ
分ハトリノ一手ニシテ勝ヲ握ノ備ト人数ヲ分ル心得也 是
ニ付重々習有事次々ニ委シ

天人地

右三ツノ備ノ名義也 陰陽トリノ三段トモ云 三段ノ理ニツキテ天地人ノ三才ノ備トモ云ナリ

七段ノ備

是山本勘介晴行入道鬼齊甲州流エ来テノ後伝之テ武田家ノ備立後ハ如斯ナル也 委キ様子ハ末書下卷下五之卷七之卷ニ有之 惣人数一万五千ヨリ少ナクテハ此法ニナリカタシ 是ヨリ人数スクナキトキハ只三段之法ヲ以テスル事也 七段ノ備重々ノ習次々ニ有之

旗本

惣軍ノ大将ノ居所ヲサシテ云也 旗本ノ騎馬ハ大将エ近士ノ士也

前備

旗本ニテ一戦ノトキニ其先ヲ勤ル備也 武田家ニ於テ前備ノ頭百騎余ノ騎馬持侍大将其陣ニヨリテ相勤ル役也 功者ノ入所也

脇備 右左

旗本ニテ一戦ノトキ左右ヨリ横鍵ヲ入二ノ見ヲナスノ備也 武田家数度ノ合戦ニ旗本ニテ勝負有ニ到テハ脇備ヨリ敵ノ左右エ懸リ或ハ敵ノ跡ヲ取切或ハ敵兵廻リテ味方ノ旗本ヘ

可懸様子アルヲ押エ留ムル等ノ働キヲ以テ勝利トナル事アリ

是脇備タル者ノ功者故也 武田家ニ於テ時ニヨルトイヘトモ前備脇備等ハ中身代ノ勤ムル事也 委クハ末書五之卷ニアリ

後備

是トリノ備ニテ旗本ノ跡ニ備ルユヘ先ツハ近キ親類ノ勤ル役也 武田家ニテハ信玄公ノ舍弟道達軒信連也 其組ニハ皆武田ノ一族衆ヲ指添ラル、一家ハ氣遣ナキ故也

一之先

其家中大身ナル者先手ヲ勤ル 其内弓箭功者ノ侍大将共ハ備頭ヲ勤メ其余ハ其組々々ニ随テ出ル 武田家ニテ先手ノ頭ヲ勤ル者七人アリテ一之先七手トス 敵ト戦フノ初メナレハ最モ功者ノ入所也 委クハ末書要本所々ニ此事出タリ

二之先

先手ノ数七手アレハ二之先モ七手也 是甲州流ニテ余国ニハ先手トハカリ有之二之先ノ沙汰ナシ 先手ノ内二一二陰陽ノ勝ヲ取事其徳尤多ク武田家遠州味方ヶ原合戦ノトキ先手七手二之手七手ヲ以一二ノ進退ヨリ勝ヲ取テ前備旗本等ハ少モ不働也 二ノ先ハ一之先ト違ヒ若手ノ將ヲ用ル也 武田家大方一家ノ大身ヲ用ラル、也 一之先トノツリ合等

ニ様子品々有事也 前ニモ云如ク先手ハ敵ノ銳氣ヲ碎ク備ナレハ一入重ク一二之手ヲ定テ輕タシクナキ事正兵至極ノ道理也 變ニ至ハ又外也

小荷駄奉行備

惣軍ノ小荷駄ハ陣屋ヨリ合戦場程近クハ小屋ニモ残スヘケレトモ大方ハ残シ置レヌモノ也 若敵ニ取レテハナラス 故ニ二三里トモ出ルニハ惣軍ノ跡ニ一所ニシテ連出備ユヘシ別シテ雜人故氣遺多シ 依之此奉行備ヲ左右ニ置武田家ニテ一二百騎ノ侍大将ノ死後其息幼少ニテ陣代ニテ出ルニ此役ヲ申付ル也 軍ニ無レ糧則亡ト云々 此ユヘニ他国エ入テハ猶更氣遺事也

右七段ノ備ニ三勝ノ理アル事習也 一之先二之先ニテ一段前備旗本協備ニテ一段後備ト小荷駄奉行ニテ一段トシテ三段ノ備ノ理ナリ 品ハ七品ニ別レテモ勝負ノ利ハ三ツナル事ヲ知ヘシ

此外遊軍アリ 或ハ浮勢

右七段ノ人数ハ定リタル備ナレハ或ハ敵城ヲ責取テ是ニ籠置或ハ敵ヲ押ユルニ勢ヲ残シ或ハ味方スル者ニ加勢ヲ乞レテ遺ス等ノ不時ニ人数ノ入トキノ為ニ除ケテ置ヲ甲州ニテ浮勢ト云 異朝ノ書ニハ遊軍遊兵ナト、云 此外浮勢ヲ以

テ敵ノ脇或後エ廻シ備ヲ用ヒ敵ノ備ヲ變シテ正兵ヨリ懸テ敵ヲ討等ノ法ニ至テ重々習有事也

七段之備之略図

図鉢一之先ノ内ニモ七手ナレハ七手ナラビテ備ヲ立ル 二之先モ七手少シサリテ備ヲ立ル 其次又余程間ヲ明テ前備ヲ立ル 其次旗本ナリ 旗本ノ左右ニ脇備也 其次又少シ間明テ後備也 惣跡ニ小荷駄ヲ立ルナリ 但浮勢アラハ後備ノ次ニ立ルナリ 又ハ脇備ノ左右ニモ立ル事モアルヘシ 大概如斯 委細末書要本等ニアリテ様々品アル事ナリ 一備手組

上方流ノ備ノ如キハ五千一万ノ人数ニテモ惣手ノ鉄砲ヲ先ニ立其次ニ弓其次ニ旗其次ニ長柄其次ニ侍共大方馬上ニテ鉄砲ヲ一度ニ放シ掛其跡ニ段々唯一勝負ニ懸ル様ノ作法也 是ハ一羽懸リ也 損多シ 故ニ甲州流ハ一備宛ニ道具配アリ 此積リ中分ノ備ナリ 是ヨリ少ナキハ小備トシテ一備ノ法不全トス 是ヨリ多キハ大備トシテ又少シ違アリ 侍五十騎 組頭二騎

廿五騎宛二組ニシテ則一備ノ内ニテ陰陽ナリ 左右ニ備テ繰懸リ繰引等モ自由ニナル也 故ニ組頭二騎ナリ 頭一騎ノ下知ニ廿五騎計能比ト云事戦国ニ定リタル矩ヲ知ヘシ

是ニテ中分トシテ大組小組ノ沙汰スヘシ

足輕五十人 大将二騎

是亦廿五人宛二組也 侍ノ数ヨリ少キハ不宜 侍ノ数ホド

足輕ヲ可差添也 多キ事ハ縦エ百人ニテモ不苦 扱弓ハ鉄

砲ノ数ノ半分 交合テ預ル事甲州流ナリ 然レハ三十人ノ

足輕ニハ廿人鉄砲十人弓ト成ノ積リ也 当時ハ大方五十人

ノ足輕ニハ内四十人鉄砲十人弓ト云ホトノ積リニ天下用之

ト見エタリ 猶弓ト鉄砲ト交エズ分々ニ弓組鉄砲組ト分ル

事等ノ論ハ品多キ故爰ニハ略之 右五十人ノ足輕ニハ大将

二騎也 足輕夫ヨリ多キトキハ三騎モ四五騎モ可有之 足

輕大組小組モ此矩ニテ可知之

長柄五十本 奉行二騎

是ハ五十騎ノ侍一騎ニ一本宛出ス役ノ長柄也 至テ小身成

者ニハ役ヲ許ス故五十騎ノ備ニ三十本ハカリアル事モアリ

其二侍大将ノ自分ノ長柄廿本バカリモアレバ合テ五十本ノ

事モアリ 足輕トハ違ヒ長柄ハ畢竟備ノカサリナレハ侍ノ

数ヨリ多キハ詮ナシ 少ナキ分ハ不苦 是甲州流也 上方

辺ノ軍役ニハ長柄多シ 扱奉行ハ五十本ニ一騎ニテモ扱フ

事ナレトモ一騎奉行ト云事ハ一備ノ法不全故二騎トス

旗五本馬駿二本 奉行二騎

役旗ハ甲州流十騎ニ一本宛当リニ其備ノ大将ヨリ出之 侍

五十騎ヨリ内ノ備ニハ旗ヲ不立 其手ノ備頭エ出ス也 馬

駿二本ハ侍大将ノ印ナリ 其仔細ハ末ニアリ 上方辺ハ旗

多シ 上杉謙信公ナトハ旗スクナシ 甲州流十騎ニ一本ノ

積リハ中分ト知ヘシ 扱奉行二騎ノ内一騎ハ旗一騎ハ馬駿

ヲ扱フ事替ル替ル也

侍大将 貝 太鼓 持筒 持弓 持鑼 歩者等アリ 自分ノ侍有之則使

役トス

身代不同ニテ大身ナレハ一備皆自分ノ家来ナリ 中身ナレ

ハ自分ノ侍二三十騎ニ与力組カケテ二三十騎モアレハ合テ

此備トナル 小身ナレハ不殘組又ハ与力ニテモ菟角諸々

五十騎ノ將タルヲ侍大将ト云 爰ノ積リハ中分ヨリ下也

侍大将自分ノ歩卒少々アリ 馬上ノ家来アレハ則乗使イタ

サセテヨシ

右一備手組ノ法ヲ以テ甲州流ニハ縦ヘハ侍十騎持者ノ積リ

ハ足輕十人長柄十本役旗ハ一本其備頭エ出ス 自分ニ馬駿

二本立ル 如斯ノ定メナリ 又騎馬百騎共持將ハ五十騎宛

二備ニシテ一備ハ我子カ弟カ甥カヲ以テ其將トシテ一手ヲ

別手別手ヲ一手ニシテ陰陽奇正懸待ノ変ヲナシテ勝利ヲ全

フス 若又七八十騎ノ將トイフトモ十騎カ廿騎分ヲ小備ト

五行座備之図

シ我跡ニ備エテ戦ノ二ノ見又ハトリノ備トシテ勝ヲ全フセントス 其人数ノ積リ皆此格ヲ以テス 猶先手ノ備頭等ノ大備ニ至リテハ又少シ別也 次ニ委ク有之

右ノ人数備ヲ立ル法也 五重ニナル故五行ト云 木火土金水ノ利ニ叶フト云説アレトモ其迄ノ論ニ不及事也 座備トハ侍モ馬上雜人立テアレバ備不静シテアシ、其故何モヲリシカセテ役人ハカリ馬上ニテ下知ヲナス也

道具配ノ理ハ侍ハ備ノ本駄也 弓鉄砲ハ飛道具ニテ備ノ先ニ不置シテ不叶也 長柄ハ足輕ト侍ノ間ニ立ルトキハ備厚ク見エテ勢ヨシ 侍ノ跡ニ可立カト云説アレトモ不宜 旗ハ備ノ印ナルユヘ跡ニ立ル 上方辺ニテハ旗ヲ先ニ立ル是同シク並ヒタル備ニテモ旗ヲ先ニ立ルト跡ニ立ルニテ遠方ヨリ見レハ先ニ立タルハ進ミタル様ニ見ユルニヨリ如斯スル也 然レトモ戦国侍ヲ一騎モ多ク抱エ次テハ足輕ヲ持トキハ長柄持旗指等ヲ撰ミ可召置余力ナシ 夫故旗指ハ雜人ト云 殊ニ長道具ヲ持故敵カ、レハ先ニ立タル旗崩レテ不覺ヲ取タル事例尤多シ 其故甲州流此利ヲ以テ後ロニ立ル也 馬ハ侍共皆下立テ跡ニ置平地ノ合戦ハ余リ遠クニ不置 山戦等足場不宜ニハ近クニ不置事モアリ

旗本或大備手組

右五行座備ノ法ヲ以テ大軍ハ幾重モカサネテ立ルトイヘトモ惣軍ノ旗本又ハ先手頭ノ侍大将ナトハ自然ト大備ニ成ナリ 其時ハ騎馬足輕等モ品多クナル也 大駄信玄公旗本ノ備ヲ以テ註之

騎馬 大近習 奥近習

旗本ノ侍ハサホド多クハ無之モノ也 甲州大近習ハ六番一番ニ廿五騎宛百五十騎アリ 奥近習モ六番一番ニ五騎宛三十騎アリ 此外甲州ニテ在郷近習又ハ新参者ヲ諸牢人衆ナト、テ有トイヘトモ皆前備脇備ニ入りテ旗本ハ大奥ノ両近習迄也 惣テ諸侍ノ名目ハ国ニヨリ替リアリトモ用法ハ不替ノ品アルヘシ 信長公秀吉公等ニテハ諸士小姓馬廻ノ名アリ 松平家ニテハ大番御書院番ノ名アリ 其余諸国古キ家ニハ其家々ノ名目アリ 近年江戸ニテ新タニ名目出来ルノ諸組モアリ 然レトモ旗本一隊ノ騎馬数其矩ヲ知ヘシ 信玄公モ後大身ニ成玉ヒテハ如斯スヘキト内ナラシヲ末書ニ下卷下之九ニ書タルハ又少シ其様子替リタル事有 爰ニハ略之

足輕 先足輕 持足輕

甲州ニテ旗本ノ備前ニ足輕十組アリ 是先足輕也 當時江

戸ノ御持筒持弓ノ如シ 甲州ニテ持足輕三組アリテ出頭人此頭也 當時江戸ノ百挺頭ノ如ク大組也 今江戸ニ御先手ト云ハ大番御書院番ニ指添ラル、事ニテ少シ品違ヘリ 是共ニ其本ハ甲州流ヨリ出ル也 委クハ末書九ニアリ

長柄 役長柄 御長柄

諸侍知行役ニ出ス 長柄ニ奉行二騎也 外ニ御大将ノ數長柄貳百本奉行四騎 是甲州ニテ如斯 當時江戸ノ御長柄モ貳百本ノ由也 信長公ハ三間半柄ノ朱鍔五百本モタセラル、ト云云 上方辺ニテ中巻ト云モノヲ多クモタスル事モアリ 是御長柄ノ類カト云々

右長柄二品ノ外信玄公ハ持鍔トテ大身ノ鍔廿本十文字二本合テ廿二本モタセラル 是ハ御身辺近ク置テ其用法闘乱シテノ後大将ヲ守護スル事アリシナリ

旗 惣旗 御旗

旗本組身代ニ依テ出ス役旗則惣旗也 此奉行二騎アリ 信玄公御旗ハ武田代々ノ旗一本神名之旗十本孫子ノ旗一本合テ十二本也 此奉行ノ事末ニアリ 當時江戸ノ御旗ハ白地ニ黒キ御紋三ツ付タル旗七本金ノ七本骨ノ開キ扇子ノ御纏ヒ一本外ニ御馬駿有之ト云々 信長公ハ朽葉色ノ地ニ白キ永樂錢ノ紋三ツ宛付テ招キニ白地ニ墨ニテハネ題目ヲ書タ

ル御旗五十本モタセラル、ト云々 謙信公ハ日ノ丸ノ旗一本早ノ字ノ旗一本昆ノ字ノ旗一本只三本ナラテ御モタセナキ也 如斯同時代ノ名將其思召ニ違アル事ヲ可知 過不及ノ矩ヲ知テ中分然ルヘキカト云々

右段々頭奉行有之

騎馬ニモ大頭小頭アリ 足輕ニモ其頭其下ニ与力小頭等アリ 長柄旗ニモ奉行各アリ 御旗御持鍔等ノ奉行ハ兼役アリ 末ニ有之

歩行衆 組ヲ合 頭ヲ定

甲州ニテ廿人衆ト号シ百廿人有之 五組ニ分テ一組ニ頭二人宛十騎アリ 出陣ノトキハ士ハ騎馬タル故御大将ノ馬ノ廻リハ歩行ハカリ也 其故譜代ヲ撰ムト云々 尤其内手廻ノモタセ出ル器等ノ裁許スル役人モアルヘシ 頭十騎ハ則目付役ヲ兼ル也 右ハ武田家如斯 家康公十人組ヲ仰付ラレタル始メハ甲州ノ二十人衆ヲ似セテ其如クト有タル由也 其余他家ニテ此品ノ者ヲ北条家ニテ走り衆ト云 今川家ニテ手脇衆ト云 上杉家ニテ身脇衆ト云タルモ皆同シ事也 小人 中間 上ニ同

甲州ニテ小人ハ三四十人有之 此内貝太鼓ノ役人等アリト云云 歩行ニ指シタル者也 中間ハ二三三百モ有タルカ

雄 勇 田 島

是ハ大将ノ身近キ御旗御持鑓等其外ノ道具ヲ持或ハ御馬ノ口取等迄此内ニアリ 是ニモ頭十騎アリ 小人中間ヲ扱フ小人頭ナレ共大ノ方中間ユヘ中間頭ト云ト也 其下ニ小頭モアリ 中間頭十騎ハ横目ヲ兼ル也 甲州ニテ歩頭中間頭合廿騎ハ同列同役ノ如シト也

諸役者 六奉行 使番 目付 横目

甲州ニテ武者奉行二騎御旗奉行二騎御持鑓奉行二騎ヲ六奉行ト云也 使番ハ十二騎アリ 目付横目ハ前段ノ如シ 猶委クハ末ノ武者分ノ所ニ註ス

右之外戦用無之役人数多有之

末ニ武者分ノ処ニ委ク論之

旗本備之図

武田家ニ於テ先足輕十組前ニ備エ其次ニ役長柄其次ニ惣旗是ハ旗本ニテ合戦希ナル故爰ニモ立ルナリ 但シ備後ロニ立ル事モアルヘシ 此図舩旗ヲ豎ニナラベタル処ニ書 然レトモ横ニナラヘテモ不苦也 惣旗ノ左右ニ持足輕二組惣旗持足輕ノ次ニ御長柄貳百本其次中程ニ御旗十本御大将ノ前後左右夫々ノ役人道具等図ノ如シ 持鑓廿二本ハ豎ニテモ横ニテモ其場ニ依テ立之 尤大将ノ床机ノ近辺ニ夫々居敷列居スヘシ 其余ノ歩行小人中間其跡ニ居ル 其跡ニ持

足輕ノ内一組殿ニ備フ 扱大将近辺ノ左右ニ奥近習六組右ニ三組左ニ三組段々ニ備ユル 其外左右ニ大近習是モ奥近習ノ通一方ニ三段宛 左右六番備エテ 前後左右ハ毎日クリ／＼ニ替ル 其替リ様末書ニ委シ 諸侍下立テ座備ナルユヘ馬ハ惣跡ニ備ユル也 是信玄公ノ備ノ趣也 此格ヲ以テ旗本ニ準スル大備ハ立ヘキ也 委細ハ大図又ハ算木形ヲ以テ知ヘシ

先衆手組

右五行座備ヲ重ネタルモノ也 幾備モ合テ一手トスル故其手組ニ品々入交ル也 大身成先手ノ備頭エハ組少ク小身成備頭エハ組相備多ク附ル也 至テ大身ナルハ組ナシニモ勤ル 其故不同アルモノ也 其一手ノ手組ニ入交事アリ 如此

同心与力

一騎モノヲ大身エ添ルヲ武田家ニテ同心或与力ト云 当時江戸ニテハ同心ト云ハ足輕ノ事ヲ云 其小頭ノ侍ヲ与力又ハ馬乗同心ナト、云 末書ニモ馬乗同心ト云処モアリ

組

甲州流侍四十騎ヨリ下持中身ヲ備頭ニ添ラル、ヲ組ト云ナリ 惣テ四十騎迄ハ一備ノ法不全 故如斯云也

相備

侍五十騎以上ヲ持大身ヲ備頭ニ添ラル、ヲ相備ト云 五十騎以上ハ自分ノ備ニ旗ヲモ立テ備ノ法全キガ故如斯

警固

大身ノ備幾手モアリテ働クトキ其シマリノタメ一家衆或ハ譜代ノ侍大將ヲ以テ惣軍ノ指引ヲナサシムルヲ云也 先手ノ備頭トハ様子少シ替リタル事也 末書ニ信玄公十万人内試ノ所ニ関東奥筋ノ人数ハ穴山梅雪次第ト有之 是則穴山ヲ警固頭ノ心ナリ 又信玄公天下ヲ取ハ都ニ誥人諸大名ノ内四人武田ノ一家衆ノ内ヨリ二人譜代ノ侍大將二人ト有之 是一家衆ハ警固頭也 譜代ノ侍大將ハ目明也 亦慶長五年関ヶ原ノ役ニ初メ関東ヨリ諸大名衆三十六人登ラル、トキ井伊本多両將ヲ指添ラレ諸事此兩人ノ指引トアル 是警固頭ノ類ヒナリ

目明

右警固ノ外ニ亦功者ノ足輕大將ヲ指添諸事警固頭ト談合スルヲ云也 武田家ニテ高坂彈正ニ小幡山城ヲ添ラレ山懸三郎兵衛ニ横田十郎兵衛ヲ添ラル、カ如シ 猶委ク其意末書ニアリ

実験使

合戦ノ当日ニ足輕大將カ或ハ使番等ヲ先手ノ備エ遣ハサル

、ヲ云也 縦へハ三増合戦ノトキ馬場美濃守備エ真田喜兵衛勝頼ノ備エ三枝松勘解由左衛門浅利式部備エ曾根内匠一条右衛門大夫備エ小幡又兵衛ヲ遣ハサレシカ如シ 其時ニ

真田ハ一番鎗ヲ合曾根ハ浅利討死ノトキ旗本ノ実験使ハ此時ノタメトテ下知シテ備ヲ不乱 小幡ハ敵崩レテ後敵ノ実衆エ付テ働キアリ 三枝松ハ勝頼ノ一番鎗ヲ合セラル、ニヨリ其働サセル事ナシ 是実験使ノ心得ナリ

右警固目明実験使ハ時ニヨリ有無不同ナリ

右備立戦法之变化握勝之要略之

凡備之事末書ニ段々有之 三百五百ノ備ヨリ七千一万一千貳万五千十万迄ノ法ヲ以テ戦法ヲ尽シ握勝ヲ示ス 猶其上ニ地形ニ依時機ニヨリ用法ノ習種々多シトイヘトモ軍法之卷ヨリ末書要本等ニ到テ悉ク知ル事也 故ニ爰ニハ略之 其名義ノ近キ事迄ヲ挙ル而已也

行列

右備ノ動ク所ヲ云 自国他国共ニ其働キ入ノ道筋其法ヲ整ルヲ云ナリ 行列正シケレハ敵半途ヲ討事不叶

備押之作法

其次第備ヲ伸タルモノ也 替ル所少シ也 次々ニ有之ニテ

可知之

頭奉行ハ先ニ乗

常ノ行列ハ先エ組子又ハ預リノ人数道具ヲ遣シ跡ニ頭奉行乗ナリ 是ハ先ノ形儀ヲ見定ムル為ナリ 陣ノトキハ頭奉行先ニ乗テ不図敵出ルトキ其俵乗廻シテ備ヲモ立又山川ノ難所ヲモ下知シテ越シムルニ手廻シヨキ也

先ヲ右トシ右ヲ先トス

長ク押行人数ヲ並フトキハ先ノ者右エ跡ハ左エ段々列ス又備ヲ押出シ行列ニスルトキハ右ノ者先エ押出シ左程跡エ段々ニ押次也 是必右ヲ先トシテ得アルニモ非ス 勝負ノトキ右ヨリ戦ヲ始メテ勝手ヨキユヘ也 如斯右ヲ先ニスル事常々ノ作法ト定メ置也 和漢トモニ古来ヨリ左文右武ト云云 左ヲ先ト云流モアレ共不宜也

一行二行ハ道ノ広狭ニ随フ

一行ニ押トキハ行列長クナリテ大軍ナトハ限モナク遅シ故ニ道広クハ二行ニ押タルヨシ 其時ハ猶以テ先ヲ右右ヲ先ト可心得也 縦ヘハ行先ニ狭キ橋アレハ右ヨリ先ニ渡ル心得ナリ 一行ノ行列十町ナレハ二行ニシテ五六町ニナル也 然レ共旗或ハ馬上等ハ二行ニ成カタクハ其外ヲ二行ニシテモ積レハ短カクナル也

早静行止ハ太鼓ヲ以テ定ム

行列ヲ早ムルトキ同早キヲ静カニスルトキ言葉ニテ云事ナシ 太鼓ノ相図ヲ兼テ定置其音ノ数又ハ打トキノ早キ遅キニテ知様ニスル也 勿論押行人数ヲ押止ルモ止リタル人数ヲ又押出スモ皆太鼓ヲ以テスル也

道悪クハ作テ押

少シノキレ溝堀ナトノフチ高キヲ切カキ平均シテ通ルヘシ五間三間ノ所ハ道ヲ付テモ通ルヘシ 故ニ道作ノ人夫ヲ兼テ定メ普譜奉行連テ行列ノ先ニ押事甲州流ナリ 三増合戦ノトキ内藤修理小荷駄奉行ニテ甲州ノ方エ引取トキ相州津久井ノ城下ヲ通ルニ敵方ヨリ堀切或ハ柵ヲ付テ住来ヲ塞クヲ内藤下知シテ道ヲ作ラセ静ニ押通ルト有之 惣テ大軍ノ通ルニ小シ道悪キ処ヲ不作ト云事ナシ

一日ニ押道積

人数ノ多小ニヨリ自他国ニヨリ事ノ緩急ニヨリテ替ルトイヘトモ五千トモ有人数ハ五六里ヲ以テ常道トスル事古エヨリノ法ナリ 朝ハ卯ノ刻ニ出昼休ミナシニ午ノ刻ニ陣場エ着 如此ナクテハ小屋カケ食物等ノ支度ナラズ タトヘ野陣ヲ張トモ食物薪用水迄ニ早ク陣着サレハ不整事ナリ 然レ共事急ニテ陪道兼行ノトキハ格別也

家中旗本旗ノ押様

先手ノ旗ハ一手々々ノ先エ為押ナリ 是御旗本ヨリ誰カ手
何方迄押タルト云事ヲ御大将御覚ナサル、ニ一手々々ノ切
々マテ知テヨシ 扱敵出ハ備ヲ立ルキ法ノ如ク旗ハ跡ニ
立ル也 旗本ノ旗ハ備ノ次第ノ如ク中ニ押也 猶次ニ有之
一手備押之次第

五行座備ノ道具配ヲ伸タルモノ也 少シノ違アリテモ備ヲ
立ルニ滞ナキヲ本意トスヘシ

旗 足輕 長柄 使役 乗替 集馬駿 太鼓 歩
侍 手鍵 中 騎馬 先同心
甲 大将 小人 跡被官

本文行列ノ次第旗ヲ先ニ押ハ家中ノ行列故也 其次ニ足輕
ヲ押也 但鉄砲先弓其次也 合セ預ルノトキハ入交テ押也
其次ニ長柄其次使役トアルヨリ侍大将中間小者マテハ侍大
將ノ近辺 此次第前後ハ少シ違テモ不苦 其次騎馬ハ則侍
也 先同心跡被官トハ与力ノ侍先ニ其次ニ自分ノ騎馬ヲ乘
ヘシ 尤夫々頭奉行ハ先ニ乗ベシ

右ハ一行ノトキ也 二行ノ押様ニ説タアリ 其品如斯 但
足輕バカリ書之 余慣之テ知ベシ

当番 足輕大将小頭一人足輕五人同同同同
非番 足輕大将小頭一人足輕五人同同同同

如斯二行ニ押ヘシト云々 亦一説ニ

当番足輕大将組之足輕 非番足輕大将組之足輕

如斯二行ニ押ヘシト云々 両説共ニ捨カタシ 時ニヨリ其
宜キニ随テ右両様内ヲ用テ可ナランカト云々

旗本備押之次第

是又前ノ大備ノ図ヲ伸タルト知ヘシ 備トハ次第少シ違ア
レトモ早ク備ニ直スニ手間不取様ニスヘシ

先足輕 役長柄 惣旗 持筒持弓 御長柄 使番 御乗替
御旗馬駿 横目 持鍵 太鼓 武者奉行 歩行衆 御手道具
大将 中 使番 近所用人 横目 殿足輕 奥近習 大近習
甲 小人 襄美長持 目付

本文行列ノ次第先足輕役長柄惣旗ト押テ其次持筒持弓御長
柄ト押事大行列ナル故足輕ヲ皆押テ其次ニ長柄ヲ皆押時ト
キハ長柄多キニヨリ勝負ヲ持タル足輕ヲ長柄ノ間エ雜エテ
モシ不時ニ敵出テモ持筒持弓ノ処ニ騎馬數モアルニヨリ其
取合セヨシ 是此習也 其次使番ヨリ殿足輕迄無別事 但
使番ヲ前後ニ分ル事ハ先エノ使ハ誰モ望ム事ナリ 跡エ使
ニ行事ヲ嫌フニヨリ兼テ三四人程宛跡番ヲクリノニ定テ
置事ナリ扱大将ノ馬ノ廻リニハ步行ノ者供ヲスル 但シ近
習ノ侍ノ内モ余リ烈敷事モナクハ歩ニテ少々供スル事モア
ルヘシ 近所ノ用人ノ内ニハ右筆医師等モアルヘシ 襄美

長持ハ功アル者ニ即座ニ是ヲ称セラレテ下サルヘキ物ヲ入テ持スル也 扱跡ニ押奥近習六番大近習六番是モ各六番ノ内其日ノ当番先ニ押ス 明日ノ当番ハ跡ニ押 旗本ノ殿リヲナスナリ 猶其番代リノ仕様末書ニ委シ、

諸軍備押之次第

一之先 二之先 前備 旗本 右脇 左脇 後備 奉小荷

駄奉行

初之七段ノ備ヲ伸タルモノ也 其内一之先二之先ノ押様ハ一之先二之先一之先二之先一之先ト幾手有トモ一二々々組合テ押也 一之先皆押テ其次二二之先皆押ニハアラス 其次ニ前備ヲ押 其次旗本ヲ押 其次右脇備ヲ押 其次ニ左脇備ヲ押也 脇備ハ旗本ヲ救フ筈ナルユヘ跡ニ押也 浮勢アレバ脇備ノ次ニ押 扱後備ヲ押也 其次小荷駄奉行一行押 其次小荷駄 惣跡ニ又小荷奉行一手押也

右ハ行列ノ定法也 山川險難ノ地ニカ、リ敵国ニ於テ打入時帰ル時其変ニ依テ様子ハ替ルトモ作法ハ違フ事ナキ也 畢竟行列ト備ト余リ其法違ハス 唯地理ヲ考テ不意ヲ討レサルヲ以テ行列ノ本意トス 委キ事ハ此処ニ論シ尽シガタシ

営法

當トハ日本ニテ陣取ノ事ナリ 行者ハ莫^レ不^レ止云云 故ニ行列ノ次ニ書之 治国ノ旅ニ泊宿ニ居スルカ如シ

陣取作法

他ノ地エ入テ宿陳ハ不用心ナル故陳取ヲ構ユル也 縦ヘ野陣ヲ張トモ此作法ノ心得アルヘシ

陣場奉行之事

一二万ノ人数ニテハ百騎二百騎バカリノ侍大将一人此役トシテ惣軍ニ先立テ行陣場ノ利害ヲ考エテ旗本ヲ始メ諸陣ヲ割渡ス也 但大繩ニテ誰カ手エハ是ヨリ是迄陣場ニ渡スト云カ如ク也 其内ノ小割ハ又手々ニテ其手ノ六奉行割也 其地形ヲ見立ルニ考エ種々習有事也 常々此事ニ打懸リテ其一家中ノ人数ヲモ知其陣場是程々々ト云度量ヲモ能覚エサレハ不叶事也 猶其様子武者分ノ所ニモ書之

小屋割人数配

則備ノ立配リノ如ク前ニ足輕左右後ニ侍ノ小屋ヲ掛廻シ中ニ諸役者段々アリ 内ヨリ出ルニ滞ナキ様ニ配当スル也 諸役者置様

者頭物奉行諸役人ヲ虎口際々々々ニ置或ハ小屋ノ端々ニ置トキハ其組付自然ト作法ヨシ 其外六奉行使番目付横目等本陣エ手寄能所ニ小屋ヲ掛ル 末ノ図ニ有之

虎口明様

前中ノ口ヨリ足輕ヲ初メ段々道具ヲ押出シ左右ノ口ヨリ則
左右ノ侍ヲ押出スナリ 左ノ方後ロエヨリテ有之 口ヨリ
後ノ方ニ小屋掛タル人数押出ス也 後ロノ小口ハ只通路自
由ノタメニ明ル也 畢竟人数ヲ押出スニ無滞様ニ口ヲ明ヘ
シ 其人数ニヨリテ小屋モ厚薄有ニ寄テ小口ノ数モ其ニ随
テ多少有ベシ 扱小口ノ仕様ハ笠木ナシニヒラキ戸ニスベ
シ 指物差ナガラ馬上ニテ住来スルトキツカヘズシテヨシ

篠垣

陣取ノカコイハ土井屏等ヲ作ル事ニ非ス 故ニ竹ノ葉ナカ
ラモ垣ニトリ付テ内ノ小屋ノ見ニクキヲ隠シ陣中ノ人数ノ
散様ニシテ其間ヲ夜廻リノ番人ヲ通スナリ 縦ヘ垣ニ薙コ
モヲ張テモ篠垣ト云也 畢竟篠垣ニテ敵ヲ防クニテハナシ
急ナルトキハ篠垣ヲ押倒シテ外エ出防戦ヲ遂ルト知ヘシ
篠垣ト陣屋ノ間所ニヨルトイヘトモ大概五六間斗ニテヨシ

蹴出

陣屋篠垣ノ外前左右廿間モ卅間モ空地ヲ除置一陣ノ人数急
ニ出テモ備ヲ立ルニ不込様ニスルヲ蹴出ト云 陣場ノ後
ロハ跡ノ陣ノ蹴出也

外張

蹴出ノ外ハ二町三町乃至五町十町迄モ空地アルヲ外張ト云
爰ニテ惣軍ノ備ヲ立自然敵出ルトキハ防戦ヲナス場也 此
蹴出外張ノ空地ナキ所ハ陣場ニナシカタシ

撞上

陣中ニテ少^{ママ}キ堀ヲ穿土手ヲツキ又ハ小^{ママ}キ山等ノ上ヲナラシ
テ構トス 本陣ノ廻リ等是也 陣城附城等ヲ輕ク構タルヲ
撞上城ナト、云カ如シ

違土居

蹴出外張ノ間敵ノ来ルヘキ筋ニ少^{ママ}サキ土手ヲツキ若敵夜討等
ヲ仕掛ルトキ味方其土手ニ足輕ヲ伏テ其外エハ味方一人モ
不出而鉄砲ヲ放サシムレハ防クニ便アリテヨシ 土手ノヒ
キサ膝タケホトニシタルヨシ 此方ヲ穿テ土ヲ向エ上レハ
味方ノ形ハ見エスシテ敵ハ半身ヨリ上見ユルトナリ 内ヨ
リ出ルタメナレハ違土居ニ口ヲ数多明ルヨシ

張番 カキ 物聞

陣中小口等ツマリ々々ノ番人ヲ張番ト云 常ハ辻番ト云
陣中ニテ張番也 不怠ニ守ル心也 且陣取ノ内外ヲ廻リテ
敵来ルカラ窺フヲカギ物聞ト云也 夜中ナレハ形チハ見え
ズ 人氣ヲカギ物音ヲ聞心也 書物ニヨリ外聞ナト、云モ
此類也

本篝

陣取ノ小口篠垣ノ外ニテ日暮ヨリ夜中焼ツ、ケル也 足輕ノ役也 篠垣ノ内ト云説ハ不宜也 夜中味方ノ往来ヲ改ムルタメ也

捨篝

所ニヨリ二三町四五町モ先ニ敵ノ来ルヘキカト思フ所ニ考エ焼ベシ 是ハ薪ヲ長ク積テ片端ニ火ヲ付置折々廻リテ見ヘシ 但風上ヨリ火ヲ付テハ薪早ク尽ル心得アルヘシ 是ハ敵ノ来ルカヲ見ル為ニ焼篝也 猶篝ノ事説々焼様アリ

陣拂備

陣取ノ所ヲ替ルトキハ惣軍押出シタル跡ニ小屋具共ヲモ集メテ先エ可持物ハ小荷駄ト一所ニ遺ス也 其跡ニ残リタルイラサル物ヲ一所ニ集メ焼捨ル 所ニヨリ本陣ノ構ナドハコボチ捨テ敵ニ此方ノ陣場ノ跡ヲミセヌ也 井戸雪隠等ニ至ルマテ悉クナラシテ其様子ヲ見セサルヲヨシトス 一手々々ヨリモ其役人ヲ残シテ陣拂ヲナス也 旗本ノ陣拂ハ其日ノ跡殿リノ番ニ当リタル太近習一組残りテ勤之也 惣軍ノ陣拂ノトリハ小荷駄奉行ノ跡番ニ当リタル一備残りテ勤之也 勿論普請道具等ノ可入物ハ又先エ持参スル也 人ノ落シタル器ニモ不覺ニナルヘキ物ヲハ心ヲ付ヘキ也

本陣構作法

大將ノ御座所ヲ本陣ト云 陣取ノ内ニテモ少シ構ヲ堅クスル也

擡上

十四五間或ハ廿間ハカリ四方ニ堀口一間ハカリカラ堀ヲ穿其土ヲ内ノ方土居ニスルヲ云 小山等ナレハ則カキナラシテ是ヲ本陣トスル也 堀ナラハ人ノ飛越レヌ程ニスル也

内虎落

右ノ少キ土手ノ上ニモカリヲ結ヲ云 外ノ篠垣ニ対シテ内虎落ト云也 惣テ虎落ハ左前ニ重ヌルモノ也 鎗ヲ突出ス

ニヨシ 其迄モナシ 弓矢ノ作法也 此外異説アリ 不可用也

勝手

大將ノ御座所モ二三間張ニ四五間ナラテ有ヘカラス 故ニ御食物ヲ調ル所少々作ル 是勝手也 賄所等ハ構ノ外下陣ニ有ヘシ

厩

大將ノ御召ノ馬二三疋立置所ハ御本陣構ノ内ニ作ルヘシ 惣馬屋ハ構ノ外下陣ノ内ニ作ルヘシ

出仕所

家老ヲ始メ諸役者御本陣エ来ルトキハ御小屋ノ内狭ケレハ皆土場エ出仕スル所ヲ云也 編敷樂ノ堂等アルヘシ

栖樓 見セ櫓

本陣ノ内後ロノ方ニ栖樓ヲ三ツ作りテ四方遠近ヲ候ヒ見ルタメ也 其内一ツ少シ大キニシテ奇麗ニ作り大將此櫓ヨリ見給フヘキト見セテ大將ハ其櫓ニ居給ハサルホトニ見セ櫓也 又敵夜軍ヲ仕カクヘキヲフセカントメノ夜守ノ陣ナトニハ見セ櫓ニ火ヲ立テ置キ若敵夜討等ニ入ト見ハ残り二ツノ栖櫓ニモ火ヲ立ルニ付火三ツニ成遠クヨリ見デモ二ツハ見ユル也 然レハ変アルト諸軍ニ知也 如是ノ類ニ三ツアルニ徳アル也

編敷

本陣ノ場門ヨリ内ニハ木ニテモ竹ニテモ編テ敷也 惣テ本陣エ出ル侍モ門ヨリ内エハ草履取ヲモ不召連故也

樂堂

本陣ノ内外番所々々ヲ竹ヲ押ワゲ立テ上ニ何ニテモ掛テ日覆雨覆トス 成程カロキモノナリ 此起リ禁庭ニ樂ノアルトキ樂人ノ装束所ヲ仮ニ作ル 其ニ似タルニヨリ仮樂ノ堂ト云儀也

柵木場 御旗 鐘立

本陣ノ門ノ内ハ狭キ故御纏御馬駿御手鐘等ノ外ハ本陣ノ前門外ニ少キ柵ヲフリテ御旗御持鐘等ヲ立置所ヲ云也 則御旗指 御持鐘ヲ持者等其番ヲ勤ル也

方面陣取

甲州ニテ陣場奉行原加賀守カ作ル所也 甲州流ノ陣取役者配此陣図ヲ本トシテ大小共ニ極ル也 委クハ末書三之卷ニアリ

図鉢中ニ本陣其前ニ柵木場等ノ空地アリテ其外ニ奥近習ノ小屋ヲ掛廻シ本陣ト其小屋ノ間ニハ医者等ノ小屋ヲ掛ル也 扱惣廻リニ前ニ足輕左右後ニ大近習ノ小屋ヲ掛廻シ其小屋ト奥近習ノ小屋ノ間ニハ図ノ書付ノ如ク諸々ノ小屋ヲ掛ル也 但シ四方小屋掛廻シタルハ惣廻リト内ニ一重ト共ニ二重也 其間々ノ小屋ハ豎横其勝手ニマカセ如何様ニモ掛ル也 其外役者配リ虎口明様前ニ書タル通也 此前後ノ心ヲ以テ地形ノ変化又ハ人数ノ多少ニヨルトモ様子ハ替リテ作法ハ等シカルヘシ

相陣取

是ハ先手一組々々ノ陣取也 一組ノ小屋ノ外ニ篠垣ヲ結也 図鉢略図也 中ノ下ノ方ハ備頭也 其外ハ相備又ハ組也 小屋割ハ何モ方尙ノ陣取ノ格ヲ以テ知ヘキ也 猶委クハ別

ニ大図ヲ以テ知ヘシ

惣軍連陣取

前ニ有七段ノ備ノ陣取平陸ノ地ニ取敷時前後左右ノ配リ様此作法ナリ 若山川海陸沼渚池等ノ地ニヨリ長短広狭屈曲ノ地ニテモ陣ヲ敷トキハ此心ヲ以テ様々変化ヲナスヘシ 図牀一囲々々則篠垣也 中ハ大将ノ陣則方角也 前後左右各相陣取ニテ先手ハ先手前脇備其方ニ陣スル牀ナリ 但若遊軍此陣ノ内ニ陣トラハ脇後備ノ陣取ノ内エ分テ入ヘシ 是ハ若浮勢ユヘ外エ行タルトキ跡不欠シテヨシ 此作法ヲ以テ山陣等モ地ニヨリ違アリトモ此格ヲ用ユヘシ

山陣取

山ハ本陣高キユヘ陣内敵方ヨリ見ユル事有ヘシ 其ユヘ構様心得アリ 殊ニ地形平地ノ如クナラス 高低アリトモ方角ノ意ヲ以テ小屋配アルヘシ

後虎口

本陣ハ平地ノ如ク向エ虎口ヲトラハ其坂敵方ヨリ見ユヘシ 故ニ山陣ノ高キ所ヲ本陣ニシテハ味方ノ陣後ノ方エ虎口ヲ明レハ其坂ノ上下往來敵方ヨリ見エスシテヨシ

脇虎口

右ノ通りナレトモ所ニヨリ後口エ口ヲ明ラヌ事モアルヘ

シ 其トキハ脇ノ方エモ明テヨシ 又後虎口一ツニテ通路不自由ナラバ脇ニモアケテ通用スルトモ云也

腰郭

山ノ高ミヲ必ス本陣トスル也 若高ミ脇カ後口エヨリタルトキハ本陣トナスニ其廻リニ小屋掛廻ス事不叶 其トキハ一段卑ク廻リ道ヲ付テ其ニモ虎落ヲ結ヒ其間ヲ夜廻リノ番人ヲ廻シ本陣ヲ厚クスル也 其ヲ腰郭ト云 地形高下広狭不同也

人数配

山陣取ニハ右ニ書ク本陣ノ虎口後口脇等エ明ル故方角ノ陣ノ人数配ノ如クニテハ事不叶 故ニ六奉行ノ小屋ヲ始メ御本陣エ御用繁キ役人ノ小屋ハ右ニ云後口脇等ノ虎口ノ近キ所ニ掛ル御旗鑓立等モ其通り也 但其外ハ方角ノ作法ノ如ク也

大陣取

大方陣取ハ二三千ヨリ六七千ハカリ迄ハ一陣ニ構ユル也 然トモ人数一万ニモ及トキハ小屋ヲ多ク重ネテ厚ク陣取其法悪ケレハ人数ヲ外エ出スニ込合テ不宜 故ニ信玄公御工夫ニテ魚鱗ノ陣取トテ其法習末書下巻下三之卷ニ有之 方向ノ陣ハ外エ出ル虎口五ツアリ 相陣取ハ七ツアリ 魚

鱗ニハニアリ 是ニテ人数多キホト虎口多キ事モ一ツノ習也 猶小屋ノ掛様等委キ習アリ

大人数之時旗本ニ用之

軍法^マ之卷ニ云ルハ十箇国持迄ノ旗本陣ハ方隅然ルヘシ 廿箇国共持タハ旗本極メテ大軍タルヘシ 是ニハ必ス魚鱗ノ陣取ヲ用ユヘシト有之 去共信玄公上方発向ノ内試シノトキハ関東ノ北条家和談ニテ北越ノ謙信ノ押ヘモ冬ナレハ不入 人数ノ積リ多キ故旗本ノ陣取魚鱗也 是ニヨツテ末書三ニ有之図モ此トキノ試シノ心ニテ書タルナリト知ヘシ 猶此処ニ論シ尽シ難シ

右座備行列陣取戰陣三之備ト云 古今定理之軍法也

備行營ノ三ツハ軍法ノ大元此法ヲナサステ合戦ヲナシカタシ 故ニ三ツハ離ル、事ナクシテ戰陣三ツノ備ト云 軍法和漢何流ニテモ是ヲ外ニセズ 其仕様善惡精粗古今ニ違フ所ト不違所トノ矩アリ 是ヲ勤ルヲ軍法修行ト云 少シモ大身ノ侍又ハ其事ニ携ルノ士ハ此法ヲ整ルヲ兵法ヲ練ト云 一朝一夕ニナシカタキ事也

軍詞之卷 私解 中

城取

城ハ常々大将ノ居所ナレハ軍法ノ始メニモ書也 又備ハ日ヲ越ベカラズトテ二日トハ備テ居ラレヌモノ也 故ニ小屋ヲ掛テ陣取也 營ハ月ヲ越ベカラズトテ二月トハ対陣ヲ張ガタキモノ也 城ハ年ヲ越ベカラズトテ二年トハ守城ヲトゲガタキモノ也 故ニ如斯次第ヲ立ル也 軍書ノ編題ニ此前後ノ替リアリ 其城取ニ於テ普請作事ニ依テノ習アリ 其本ハ繩張也 繩張ノ本ハ其城大小ノ度量也 委クハ次々書之

城三様

凡城ヲ構ル其本大城小城ニアリ 地形堅固ニ便リ不便ノワカチアリ 凡其堅固山川海陸沼池渥蒹葭林木等一ツトシテ不用ト云事ナシ 然レ共縮メテ云トキハ山ト平地トノ二ツ也 其間ヲイヘハ平山城ト云是ナリ 故ニ本文ノ三品ニ不遇也

平城

平陸ニ堀ヲ穿其土ヲ以テ土居ヲ築城トナスヲ云 古エハ平城少シ 治国ニナリテ山ハ不自由ナル故平地ニ居シテヨシトテ最居城ニ多シ

山城

山ヲ切ナラシテ土居ナク廻リニ屏ハカリヲ掛ルナリ 山ニ
高下アルトモ惣テ山城也 境目ノ城ニ多クシテ古城ニ山城
多キ也

平山城

是ハ丘ナドニテ本城ニ之郭ハ高ク二三之丸ヨリ平地ニツ、
クヲ云 是ニモ高キハ山城ニ近ク卑キハ平城ニ近シ 城
ノ高下ノ事大概右三品也

繩張

惣テ城ノ形チ其利ヲ計テ取出ス繩張ト云 家作ノ指図ト云
カ如シ 又ハ古城ノ不宜所ナト改メ直スモ誰某カ繩張ニテ
改ムルト云ノ類ヒ也

本城

城ノ中央高ミニ構テ城主ノ居所ナリ 城ノ根本ナリ 本丸
トモ云 惣テ城ノ大中小ノ間數歩數等ノ習アルモ本丸ノ事
也 先ツハ高キ所ヲ本丸トスレトモ不堅固ナルトキハ地少
シ卑クテモ堅固ノ方ヲ本丸トスル事モアリ

二三之郭 郭或ハ曲輪ト書 内外惣テ丸トモ云

本城一重ニテハ構薄キ故二三之郭ヲ設テ本城ヲ厚クスル
一方ニ方ニテモ堅固ニ便ルトキハ其方ハ二三之郭ナクテモ
ヨシ 又大キナル城ニテ郭ノ數多クトモ本丸ニ之丸三之丸

等ノ号アリテ其ヨリ外ハ四之丸五之丸トハ不云 別ニ号ア
ルヘシ 扱又本郭トハ不云 二之城三之城トモ不云也 内
ヲ城ト云 外ヲ郭ト云ナリ 孟子曰三里之城七里之郭ト云
云 丸ト云ハ俗語ニテ久敷通称也

大手 或追手

其城ノ内ニテ敵ニ向フ方ヲ云 城ノ内外ニ広ミヲ受テ明ル
虎口是ナリ 城ヲ築クニ大手ノ方ノ構様第一也

搦手

大手ノ外其城ノ脇或ハ後ノ方エ出ル小口ニツモ三ツモ可有
之 是ヲ云 敵ノ入ニクキ様ニ構ユヘシ

陰陽之繩

敵ヲ防クニ利有ヲ陰ト云 内ヨリ出テ防戦ニ利アルヲ陽ト
云 外ヨリ内ノ不見様ニスルヲ陰ト云 内ヨリ外ノヨク見
ユル様ニスルヲ陽ト云 虎口モ外ヨリハ入カタク内ヨリハ
出易キ是陰陽也 城ノ惣躰モ本城ハ陰ニ二三ハ陽ニ取ナリ
如此其形其利ヲツメテ繩ヲ受ルヲ陰陽和合之繩ナト、云也

虎口

敵味方ノ出入烈敷場ナルユヘ虎口ト書来ルトイヘリ 内ヨ
リ出易キ様ニスレハ入トキ敵跡ヲ追テ付入ニセントスル故
ニ出ルニ易ク敵ノ入難キ様ニスル事重々習多シ

内升形 一之門 二之門

城ハ門ヲ明テ内ノ見エサル様ニ構ユル也 故ニ門ノ内ニ鑑ノ手ニシトミノ土居ヲ築キ門ヲ二重ニ立ル也 其外ノ門ヲ一之門ト云 内ノ門ヲ二之門ト云 敵ノ攻ルトキハ一之門ハ明テ入レ二之門ハタテ、一二之門ノ間タニアル敵ヲ三方ヨリ矢玉或ハ石弓城内ヨリ石ヲ打也 城内ニ敷栗石等アルハ是ニモ用ルニヨシ ヲ打敵ヲ殺スナリ 其時ノ様子ニヨリ二之門ヲモ明テ出テ敵ヲ討 此節味方出入ニ宜キタメ二之門ハ中三間ヲ披キノ扉ニシ其左右両方ニ一間宛ノ披キノ扉ヲ立ル一之門ハ三間ニシテ其扉ノ内ニク、リヲスル也 如此ニシテ味方出入ニ敵方ヨリ慕入事不叶 内升形ニ一二之門アルノ得也

一之門ヲ入テ右ノ方ニ一之門アルハ是本勝手ニテ敵ハ入ニク、内ヨリ出ルニ鑑等ヲ持テ出テモ其勝手ヨシ 但シ一之門ヲ入テ左ノ方ニ二之門アルハ逆勝手ト云 用法本勝手程ニ無之ト知ベシ 扱又城ノ門ハ敵付ノ方ヲ一トシ内ヲ二トスル事也 尚内升形間数等重々習アリ

外升形

右内升形ハ其徳多シトイヘトモ城内狭キトキハ外エ升形ヲ築出シテナリトモ一二之門ヲ建テヨシ 其形チ如何様ニテ

毛利ニ叶フ様ニスヘシ 半分外升形ニスレハ皆外升形ヨリハ用法ヨシ

武者屯

一二之門ノ間タヲモ云 惣テ門内ノ空地ヲ武者屯ト云也 馬屯

惣テ城ノ門外ヲ云 本丸ノ馬屯ハ二之丸ノ武者屯ナル所モアリ 大手ニハ武者屯馬屯ノ空地ナクテ不叶 或ハ懶手等ノ通路ハカリノタメノ小口等ハ此空地ナキモ可有之

門 平門 櫓門 扉 臂金 地伏 透門 拳城戸

城門ヲ制スルハ常ノ門トハ違フ也 但シ早築ノ城門等草ナルハ格別ナリ

平門トハ常ノ屋敷ノ門ノ如シ 一之門是也 亦ハ城ノ脇後口等ノ通路ノ小口等櫓門ニ不及所ハ平門也 其仕様扉ヲ披ニシテ扉ノ内ニク、リアリ 門ノ内ニ扉ヲ披キタルトキタテヨセ^マノ所ヲスル 最ヤネアリ 門ノヤネハ左右ノ扉ノヤネヨリハ高シ 但シ所ニヨルヘシ 櫓門ハ門ノ両方ニ門台ヲ三門^マ四方バカリニ石垣ヲ築キ其台ノ上ニ掛テ櫓門トス 最ニ楷也 渡櫓共云也 二之門ハ是也 一重建ル門モ二楷門ニスル事モアリ 其門ハ中ヲ披扉左右ニ披ノ小扉アリ 門ノ上ニ雨落ノ尻アリ 其二楷門ノ上ノ外ノ方ハ惣マクリ

戸ニシテ石弓等ヲ打ニ宜キ様ニスル事也 最其外櫓ノ如ク狭間戸ヲ明ル也 右門台モ城ニヨリ所ニヨリ幅ハ三間ニテモ長ミ四五間其ヨリ長キモアル也

扉ハ常ノ門ハ横ニ骨ヲサシテ豎ニ板ヲ打也 城戸ハ角物ヲ以テ豎ニナラベ貫ニテツナキ骨トシ其外ニ板ヲ横ニ打其上ニ豎ニ筋金ヲ渡ス也 扉ヲ皆鉄ニテ包ムモアリ 鉄門ナト云是也

臂金ハ常ノ扉ニ打如クスレハ下ヨリ手子ニテ反レバ扉ヲハツル、也 城下ハ柱ニ二ツ扉ニ一ツ宛三ツ坪ニシテ二所或ハ三所大扉ハ四所モ打テセンヲ指也 又ハ常ノ臂坪ノ如クニスルトキハ上ノ笠木ヲ幅広クシテ扉ヲタツレハ笠木ニツカヘテ下ヨリ反テモ外レサル如クスレハヨシト云々

地伏ハ地覆トモ書ク 国ニヨリ蹴込トモ云也 常ハタヤスク外ル、様ニスルナリ 城ニハ外ストモ又伏セタルトキニ外

レザル如クスヘシ 但又籠城ノトキ門外エ付タル敵ヲ地伏ヲ内ヨリ外シ長刀ニテ足ヲ獲把フト云説アレ共其ハ異説也 透門ハ城エ向ヒタル門ハ必ス透門ニスル也 扉ヲ板ヲ不打シテ骨計リナレハ柵ノ木ノ如ク門ノ内向エバ見ユル 故ニ城エ向フ門ハ城ノ方ヨリ門内見ユル様ニ如是スル也 但貫

木ノ通りニ板ヲ打也 草ノ角馬出ヲ立ル門等必ズ透門也

又異説ニ云 惣テ城戸ハ扉ヲ左右ヨリ立テ合スルト其中一二寸モ透テ不合様ニスヘシ 是外ヨリ敵ノ鎗等挾リタルトキモツカヘスシテ扉ヲタツト云々 此如ノ臆説不可用 証拠ナキ事也

挙城戸ハ扉ヲ柵ノ如クシテ上ノ笠木ノ方ニ臂ツボヲナシ内ヨリ外エ突上ニシテ枇杷状ヲ以テ上置往来ヲナス 是草ノ作事ニテ城中ニ於テ輕クシマリノ所等ニアル事モアリト知ベシ 其制ニモ輕重アリ 但シ異説ニ門柱ノ両方ニ樋ヲ彫

扉ヲ町屋ノ葺戸ノ如ク二階門ノ上エ引上テ置 敵其下エ来ルト上ヨリ落シカクルト云々 是其度量ヲ不知説ニテ不可用

双虎口

一方エ小口二ツ双ヒテ明タルヲ云 是両方エ道路ノ為ニアル事也 又一方ノ小口ヲ外エ敵付タルヲ一方ノ小口ヨリ出テ拂フ心得ニモアル事也

隠虎口

向ハ一面ニ屏ノ如クシテ小口ニ切明用ノトキハ明テ敵ヲ拂フ如クスルヲ云也 又処々ニヨリ往来ナラヌ処ニモ切土堀ヲ用ルハ大筒等ヲ放ニ堀損セスシテヨシ 其外石弓ノタメ塵落シノタメ等ニ用ル 山城腰郭隱曲輪等ニアル事也

馬出

城ノ虎口ハ前ニアル内升形一二之門ニテ敵ヲ防クニ利ハヨ

シトイヘトモ外エ出ルニ出ニクシ 故ニ大手ノ少シ広キ所
ノ橋ノ向ニ少サキ構ヲナシテ向ヲ防キ左右ニ口ヲ明テ敵城
際エ寄来ルトキ右ノ方ヨリ備ヲ出シ左ノ口ヨリ敵ヲ拂フ如
クスル也 馬ヲ出スニ利有テ以テ別名トス 其度量用法重
々習アル事也 外エ備ヲ出スニ出シ易ク其人数ヲ内エ引入
ルニ入易クシテ敵幕入事不叶 馬出ハ山本勘助流ノ極秘ナ
リ 其品々次ニアリ

角馬出

堀ヨリ向エ十間左右エ廿間其外ニ土居高サ二間下ノ敷六間
也 此土大方堀幅五六間ノ土ニテ有之也 是角馬出ノ築キ
様也 但シ是ハ馬出ノ起リ也 委クハ丸馬出ノ所ニ書之
草ノ角馬出ニ至テハ間数定リ無之 真ノ角馬出ト云事ハナ
キ事ナリ

丸馬出

右角馬出ニテ城外エ出敵ヲ拂ヒ則城内エ引取トキノ作法ニ
宜シトイヘトモ馬出ノ向エ敵来ルトキ城内ヨリ打拂フニ角
ツカユルニヨリ其角ヲ落シテ丸クスル心ナリ 実城ニ築ク
ハ丸馬出最多シ 是故馬出シノ法ハ角ニ起リテ丸ニ成就ト
可知之也 十間廿間ノ間数等角馬出ニ同クシテ角ヲ落シ丸
クナル故内ノ坪数ハ狭クナル也 猶丸馬出ニ真草間数ノ度

量等アル事重々習多ク秘伝アル也

辻馬出

城ヨリ出ル小口ニツ出合タルトキ外馬出一ツニテカコイ其
馬出ノ両方ニ口ヲ明レハ城内ノ口ト馬出ノ口ト四ツ四辻ノ
如クニ成也 依テ辻ノ馬出トス 是ハ間数不定大キナル方ト
可知也 但是ハ城内ヨリノ小口直ニ二ツナラヒタル処ノ外
ニハ馬出ヲ構ルニテハナシ 絵図ニテ知ヘシ 辻ノ心也

曲尺馬出

横郭ノ際エ寄テ城内ヨリノ小口付タルトキ角馬出ノ一方ヲ
取タル如クニ馬出ヲ築ク 曲尺ノ形ニ似タル故名トス 然
レハ一方ヨリ城ヨリ出ル橋見ユルニツキ升形ヲ築出スヲ坪
之升形ト云 曲尺ニ坪之対スルユヘナリ 大工ノ坪曲尺ニ
ヨリテ伝授アリト云説ハ不可然也 其外異説品々アリ 不
可用

留馬出

門外狭キ処又ハ長橋ナドノ向ヨリ見通ス処々ニハ少サキ土居
ヲ築キ射場ノ留ノ如クナルユヘ名トス 堀ヲ穿トキハ外三
角ニ穿也 長橋等ノ堀幅広ク城ノ土居ニ土余ルトキハ留馬
出ニハ堀ナシニモ土居バカリヲ築ク也

郭馬出

雄 勇 田 島

重馬出

山城ナトハ其山ノ様子形チニヨリ山上ヨリ段々郭ヲ構テ猶地形ノ余慶有之トキハ馬出ノ間數ヨリ廣クトモ其俣是ヲ馬出ニスル事也 其モ所ニヨリ内ニ侍屋數ナトヲモ割事モアリ 間數四五十間ニ及フトモ郭馬出ト号シ平城ノ馬出ニ屏ハ不掛トモ山城ノ馬出ニ屏ヲ掛ル等別而郭馬出ニ付重々習アルコト也 平城ニモ此心得アル事猶口伝アリ

是山城ニアル事也 山ハ地高キユヘ馬出一ツニテ大手ノ平地マテ通シカタキトキハ馬出ヲ段々ニ取重ネテ下迄取ツ、クル事ナリ 極メテ山城ニ有事也 是モ小郭ヲ重ナルト不云シテ重馬出ト云ノ違ヒアル事習アル也

双馬出

是モ所ニヨリ馬出ニツモ三ツモナラヘテ取事アリ 本ノ馬出ヲカコイノ為ニ幾ツモナラベテ取事モアリ 又ハ城内ノ外ヨリ見ユル処ヲ蒔シノ為ニ付タル馬出モアリ 敵ノ城際エ寄来ルヲ拂ニ然ルヘキタメニ設クル馬出モアリ 又捨堀ノ用同事ニ用タル馬出モアリ 畢竟馬出ノ事伝授ノ上ニ明カ也 然レトモ双馬出ハ此品々ノ内ニテ構タル馬出アレハ自カラ數多クナリ馬出双フニヨリ名トスト知ヘシ

郭

本丸ヲカコフ為ニ二重モ三重モ構ユルナリ 或ハ山川ノ堅固ニ便ルトキハ平地不堅固ノ方エ幾重モ構エ出ス心得也 城取練習ノ上ニ能知ル事也

内郭

郭ハ惣テ本城ヲ内ニシテ外ニ築クモノトイヘトモ其内ニモ脇後ノ方ニ人質ヲ置或ハ藏ヲ建其トリノ為ニ築クハ内郭ト云也 或ハ国主居城等ニ内証方ノ居住或ハ隠居等ノ居住アル郭ハ内郭也 何郭トカ名アルヘシト知ヘシ

外郭

右ノ通りノ内敵ニ向ヒ働キヲナス為ニ築ク郭常々モ二三之郭等ニ表向ノ出入アル郭ハ外郭也 惣テ城ヲ構ルニ内郭外郭ノ差別ヲ弁エテ繩張ヲナスヲヨシトス

腰郭

山城ノ本丸ヲ高ミニ構エテモ其高ミ脇エヨリテ一重ナルトキハ一段卑ク廻リ道ヲ有ルヲ腰郭ト云 山陣取ノ腰郭ヨリハ少シ念ノ入タルナルヘシ 国ニヨリ常郭ナト、云 但本丸一重ニテモ山高ク巖石ナトニテ堅固ナラハ腰郭ニ不及也 平城ニテモ腰郭ノ心得有事モアリ

横郭

城ヨリ出ル小口ノ右ニテモ左ニテモ横ニ郭出ルトキハ其小

口際エ付敵ヲ拂フニ能也 横郭ヨリ矢玉ヲ打立ル故也 郭ニ添横小口ニ取トキハ自然ト横郭ニナルナリ 是其小口堅固ニテヨシ

斜郭

横郭ノ如ク折出ス事不叶処ハ外ノ方ヘ斜ミテ取タルハ升形横郭ナクテモ横矢ヨク掛ル也 城内モ広クテ斜郭ハヨシ 猶横矢ノ処ニ委シ

捨郭

二三ノ丸ノ外ノ郭ハ城内ノ人数多キトキハ守之城主留守等ニテ人数少キトキハ捨テ不守也 故ニ其時其郭エ敵入テモ敵ノ合力ニナサル様ニ其郭ノ内ヨク見エ渡リテ隠レナキ様ニ構エ置ヘシ 惣テ城ハ此心也 二之丸ハ本丸ヨリヨク見エ渡リ三之丸ハ二之丸ヨリ能見エ渡ル様ニ構ユヘキナリ 惣構

侍町城下ノ町屋等迄ニ外ニ構ヲナシ常々城下ノ法度ヲ正フシ敵攻来ルトキ人数多ケレハ大阪ナトノ如ク惣構ヲ守リテモ防クヘシ 又人数少キトキハ惣構ハ捨テ惣構ヲ越来ル敵エ懸テ防戦ニ利ヲモ得ヘシ 其ニツキ其構様一重二重様々アリ 国ニヨリ惣川ナト、云モアリ

出丸

城ヲ離レテ一構ヲナス 或ハ惣構ノ続キニ小サキ構ヲナスヲ云也 大坂ニテ真田丸ナトノ如シ 是其ニ敵寄来ラハ如何様ニ防キテ利ヲ得ヘキト前廉心ヲ定メテ可築之

横矢

敵城外エ来ルトキ遠キ間ハ屏ノ狭間ヨリ打拂エ共ヒシト屏ノ狭間ノ間エ付タルトキハ打ハラフヘキ様ナシ 故ニ横ニ打ハラフ様ニスルヲ横矢ト云 其仕様次ニアリ

升形

惣屏ヨリハ一二間モ三間モ出シテ升形ヲ築ク 或ハ角ニ築ケハ二方エ横矢カ、ル也

邪

右斜郭ノ心ニテ邪ミヲトレハ其邪ミタルニテ相横矢ニ掛ルナリ

屏風折

屏ノ長キ所ハ三角ニ折出セハ横矢モ能懸リ又向エモ矢ノキカヌ処ナクテ能也 惣テ二間カ三間ホド宛廿間卅間ニテ折タルモ屏風折ト云也

葩蒔

惣テ城取ハ堀切ノ間屏ノ違目何方ニテモ少モ外ヨリ内ニ見エサル様ニ構ユル作法也 然レ共平城ハ堀ノ間ヨリ内見エ

透山城ハ本丸ニ之丸ノ坂高キトキハ外ヨリ見ユルノ難アリ
其ヲ見エサル様ニ内ニ物ヲ立ルヲ蒔ト云 外ニ物ヲ立ルヲ
蒔ト云 其品々次々ニアリ

土居

堀切ノ間見ユルニ少キ土居ヲ城内ノ堀ノ際ニ築キテ外ヨリ
見エヌ様ニスルヲ蒔ト云 蒔ニハ大方ハ土居ハ不築也

屏

右ノ如クナルトキ城外ノ堀際ニ屏ヲカケテ堀切ヨリ内ノ見
エヌ様ニスルハ蒔ノ屏ト云ナリ

櫓

縦エハ本丸ヨリ下ル坂城外ヨリ見ユルトキ其坂ノ見エヌ様
ニニ之丸ニ櫓ヲ上テ其櫓ニツカエテ坂ヲ見セズ 是蒔ノ櫓
也 坂高ケレハ三階櫓ニモスルナリ

植物

城ノ外ヨリ見ユル所土居屏柵虎落等ヲ以テ蒔蒔ストイヘト
モ山城等ニ至テ又外ノ山ヨリ城内ヲ見スカス処モ有ヘシ
其トキハ木竹ヲ植テ城内ノ見エサル様ニスヘシ 平城ニテ
モ此心得有ヘシ

屋敷

堀切ノ間ヨリ城内見ユルトキ処ニヨリ堀ノ外ニ屋敷ヲ構テ

其屋敷ノ外城内ヨリ見エ渡ル様ナラハ則其所ニ屋敷ヲ構エ
其ニ障リテ城内見エサルトキハ則是蒔ノ屋敷也 又城内ノ
方ニ是ヲナストキハ蒔ノ屋敷也

右蒔蒔ノ事其品如斯ニシテ其変際限ナシ 此蒔蒔ノ外ニ城
外ニ捨土捨石柵虎落等ニ至ル迄城ノ厭ヒモノナリ 皆敵ニ
合力仕寄也ト知ヘシ

土居

平地ニ堀ヲ穿其土ヲ以テ内ニ土居ヲ築ク 昔ハ平城マレ也
近代ハ常ノ居住ニ平城多シ 其築キ様土居ナル故委ク次ニ
カク

高下

高サ三間也 但地高ケレハ土居卑シ 地猶高キトキハ土居
ナクテモヨシ 又馬出ハ高サ二間小郭等高サ一間ニモスル
ナリ

勾倍内外

高サ一間ノ土居ニハ勾倍ノ敷一間ナケレハ不堪モノナリ
然レハ高サ三間ノ土居ニハ一方ノ敷三間内外両方合テ六間
土居上ノ平均二間合テ土居敷八間也 是折返シノ勾倍ト云
高サ三間ニ三間ノ敷故也 但其土地ニヨリ此折返シノ勾倍
ニテ不堪土モアルヘシ 其トキハ高サ三間ニ敷九間十間モ

アルヘシ

芝土居

右ニ書タ、キ土居ヨリハ勾倍卑クテモ芝ハ堪ユル也 高サ三間上ノナラシ二間ノ土居ニハ内外トモニ芝ナレハ敷六間ニテモ堪ユルナリ 外ハ芝土居内ハタ、キ土居ナラハ敷七間ニテ堪ユル也 闇敷時分虎口際等タ、キ土居モ草ナレハ少シ念ヲ入テ築クニ石垣ハ事重キ故芝土居等ニスルナリ

石垣

土居ノ外不残石垣ニスル事ハ大国ノ主或ハ天下ノ主ニアラサレハ不叶 其トモニ内外両方石垣ニスルトキハ上ヨリ雨露ノ漏テ石垣ノ根ユルミ石ヲ孕ミ出ス事アリ 故ニ両面石垣ハ嫌フ也 外ハ石垣ニテモ内ハタ、キ土居ニスル事也 サナキ城ニハ小口際等計リ石垣ニスル 又ハ櫓台升形台ハカリ又少シ念ヲ入タルニハ本丸ハカリ惣石垣ニモスルナリ 石垣ハ地形ノ勾倍スクナクテモ堪ユル也 高サ一間ハカリノ石垣ハ勾倍ナクテモ堪ユル也 高サ二三間ニテハ一間ニ一尺ノ勾倍ニテモ堪ユル也 四五間ノ高サニハ一間ニ一尺五寸位ノ勾倍ニテモヨシ 至テ高石垣ニハ扇勾倍ト云事モアリ

惣テ石垣ヲ積ニハ下ニ五葉松ノ木ヲ敷其上ニ石ヲ積懸ルナ

リ 石垣ノ裏ハ栗石ニテ結ル也 扱石垣ノ強ミハ石ノ長キ

方ヲ扣エニシテツラニハ短キ方ヲナス タトヘハツラ一尺扣エ二尺五寸モアルヘシト云々 又出角ノ積様ハ算木積トテ組違エニスル也 且石垣ノ面石ト石ヲ切合セテ透間ナキ様ニスルヲ上切合ト云 是ハヨハクテ不可然 野面トテ石ヲ積タル面ハ不宜トイヘトモ石ノ胴ニテ持ユヘ強クシテヨシ 是ヲ上ノ面モヨクセントテ胴ニテ切合セ面モヨク石ノクイ合様ニスルヲ胴切合セト云 サレトモ是ハ殊ノ外人力入テナラヌ事也 猶其上ニ大石ヲ下ニ積小石ヲ上ニ積ハ強クテヨシト云云

武者走 雁木 合坂 重り坂

右高サ三間ノ土居ノ上エ上ル坂ヲ云也 又土居ノ上ノ平均ノ屏ノ裏ヲモ武者走ト云也 但其上エ上ル坂ノ付様直ニ石段ヲ付テ上ルヲ雁木ト云ナリ 是ハ地形狭キ所ナトニテ如此 虎口際等ニ用ル也 筋違ニ付タル坂ヨシ 上下自由也 其付様ニ坂ノ上ニテモ下ニテモ坂口ノ合タルハ合坂トテ嫌フ也 上下ニ付人数込合テ不宜 段々ニ重リテ人数不込合様ニスルヲ重り坂トテヨシトス

犬走

屏ノ表ニ二三尺モ余リノ地アルヲ犬走ト云也 又高石垣等

堀

ニハ其石垣ノ中ニ段ヲ取テ築ケハ強クシテヨシ 土居ニテモ高ケレハ犬走二三段付ルモアリ

水堀

土居ノ土ヲ上シタメニ堀ヲ穿ナリ 數ハ間高サ三間ノ土居ヲ築ク土ハ堀口十間深サ四間ハカリノ堀ノ土ニテ少シ余ルホトナリ 但シ堀ノ内モ城ノ方ヲ浅ク城外ノ方ヲ深ク穿ヘシ 又春夏ハ土ヲ穿テモ其土不減シテヨシ 秋冬ハ土ヲ動セハ減スト云々 然レハ堀ヲ穿チタル土ニテ土居ヲ築クトモ其心得有ヘシ 山城ハ地形高キ故堀ニ不及也

平地ニ堀ヲ穿ハ大方水出ル也 又流水ヲ切入ル事モアリ品ニ可依也 但水ナキ地ニ溜水ハ嫌フ也 自然敵ニ水ヲ引落サレタルトキ城中力ヲ落テ不宜ト云々 又水堀ニ水鳥ノツキタルハヨキ事也

涸堀

山城其外地高キトキハ水不出事モアリ カラ堀モ土居ノ高クナル所ハ同利也

堀内道

山城或ハ平山城ナト郭外エ坂ヲ付カタキ所ハ堀ノ内マテ下テ其ヨリ外エ出ル如クスルヲ云 多ク有モノ也

障子堀

カラホリノ内ニ少^マキ土居ニテモ柵ニテモ付置敵堀ノ内迄入テモ障子ニ障ル所ヲ屏櫓等ヨリ打也 又平城ノ水堀ニテモタテ横ニ躊^{チウ}ヲ残シヲケハ水モ一度ニ不引シテ能也

立堀

是ハ山城ノ勾倍ユルク筋違ニツタヒテ行事ナル処ハ立ニ堀切トキハ其通路不叶也 立ニ柵ヲ付ルモ同利也

捨堀

城外ニ堀ハカリ穿タルヲ云 平城山城共ニアル事也 捨堀ニハキレタ々ニ道ヲ幾処ニモ明ル也 其穿様ニモ向ヲ急ニ城ノ方ヲナルク穿ヘシ 畢竟捨堀ハ城外平易ノ地ニテ城内ヨリ出テ防戦スルニ利無ト見ハ捨堀ヲ飯ノ堅固トナシ敵ヲ捨堀ノ虎口ヨリ出入サセテ味方出テ討ニ利有様ニ穿ヘシ

糞捨

城内ノ不淨ヲ捨ル所ヲ兼テ拵^テ置サレハ城ノ難儀ニ及フモノ也 平城流水ニ便ルハ此手遣^テヨシ 山城ハ谷エモ捨ル平山城等其心得ナクハ籠城ノトキアシキ事也

塵取

堀ノ内ノ塵芥ヲモ取上テ捨ル道ヲ付ルヲ云 河道ナトノ様ニ付ル 付取ハ櫓等ノ向ナトニ付レハ敵入事不叶也

塵防

堀ノフチ向ニ少キ土居ヲ築キ堀エ雨水等流レ不入様ニスヘシ
堀端不損シテヨシ 殊ニ堀端往来繁キ所ハ人不落シテヨシ
但シ其土手高ケレハ其陰ニ敵カクレテ合力仕寄トナルユヘ高サ膝節切ト末書ニ出タリ 近年堀端ニ繩柵ト云ヲナス 用法同利也

屏 高下 真草

平城ハ土居ノ上山城ハ地形高キ故土居ナシニカクル 其カケ様真草アリ 爰ニ書ハ中分也 惣テ土台引ニシテ掛ル事ハ念入トモ弱キ方也 中分ノ作事ニハ土中エ穿立ニシテ土中ニ貫一通り地上ニ貫二通り入柱ハ五寸角ニテ竹ヲ以テ両方ヨリコマイヲカキ中エ栗石ヲツメ両方ヨリ土ニテ塗大方厚サ九寸程ニナル也 柱間ノ事ハ四尺間ニモ立ル 又ハ四尺二尺四尺二尺トモ立ル 二尺間ノ処ヲ狭間トストモイヘリ 真草ハ不及云也

高下ノ事人長ノカクル、程ナリ 山城ハ五尺五寸至テ高キ処ハ五尺四尺ニモスル 平城ハ六尺ニモ六尺余ニモスル也 但内外見ユル処カ升形或ハ虎口際等高屏ニスル処ハ八九尺一丈モアルヘシ

真草ハ当時治国ノ居城等ハ普請作事丈夫ニテ真也 戦争ノ

覆

節俄ニカクル屏ハ右ニ書ヨリモ猶草ナリ 亦惣テ城中ノ所ニヨリテ屏ノ真草アリ

敵方ヨリ火ヲ付ラレヌタメニハ瓦覆ヨシ 草ノ普請ニハ板覆ニモスル 腕木ニ取付レマシキナラハ屏ノ外腕木裏ニ板ヲモ打也 又草ナラハ簾ノ巻覆ニテモ堪ユルナリ 俄ノ普請等ニテ竈城スルトキナラハ覆ナシニコマイ竹ノ先ヲソギテモ置 外ヨリ結句乗ニクシ

扣木

直ニ立テ貫ヲ二通り入テ屏ノ柱エ取付ル也 聖リ扣ト云ハ筋違テ立貫ヲサケテ下ニ一通り入ル 城ノ屏ニハ不好 去共所ニヨツテ用ル事モアリ

狭間 鉄砲 弓

鉄砲狭間指渡シ四寸或ハ五六寸ニモ丸カ四角カ三角カニ切ナリ 屏厚キユヘ内八文字ニ切也 乳ヨリ八寸高ク切ト云習アリ 四角ナル狭間ハ四ツノ角スキテアシ、トモ云也 弓ノ矢狭間幅三四寸長サ一尺二寸ヨリ一尺五寸マデモアルヘシ 是ハ外八文字ニ切ヘシ 膝節ヨリ下ルトモアケテ切ヘカラスト云習アリ 且扣木ノ際ニハ不切 又堀幅以ノ外広キ処ニ不切也 惣テ狭間ノ事ハ猶習多キ事ナリ

重狭間

高屏一丈トモアラハ鉄砲狭間二段切ヘシ 上ノ狭間ハ石打棚ヨリ打也

石打棚

扣木ノ上ニ板ヲナラヘテ其上エ登レハ半身ホト屏ノ外エ見ユル也 是敵城近ク責登ルホトノトキ石打棚ヨリ見定メ石弓ヲ打タメ也 依テ名トス 重狭間ノトキハ必常ニ石打棚アルヘシ

出屏

屏ノ覆ノ通りハ不違シテ下ノ方土居ノ際ニテハ三尺ホトモ屏ヲ外エ掛出シ下ノ明間ヨリ石弓ヲ打様ニスル 又ハ其出屏ニシノギニツ立ルモアリ 一ツ立ルモアリ 左右ノ屏エ横矢ノタメ狭間ヲモ切也 委ク絵図ニアリ

又出狭間ト云アリ 屏ヨリ外エ格子ニシテ作り出シ小屋称ヲモスル也 用法出屏ト同利也

塵落

右出屏出狭間ノ下ハ必ス塵落シ也 其蓋ハ内ノ方ヲ掛金ニシテ向ノ方エ揚ル様ニスヘシ

柵

屏ヲ掛レハ其陰形見エス 所ニヨリ城ニ向ヒタル処ナトハ

柵ヲ以テスヘシ 最堀切ノ間ヨリ城内見ユルニ筋違テ見ユ

ル処ハ柵ヲ付レハ其ニテ内見エスシテヨシ ケ様ノ処ヲ一代柵木ト云ナリ 土橋ノ左右等ニ柵アルヘシ 但又一説ニ土台引ニシテ笠木ノ有テ柵ト云ナリ 又五寸角ヲ五寸間ニ穿立ニシテ上ノ方ヲソキタルヲ尺ト云トイヘリ

虎落

柵ヨリ猶以草ナルトキハ虎落ニテヨシ 結様陣取ノ所ニ書

ト同シ

櫓 大小 二械 三械

其造作大ナル事ナレハ治国居城ノ如クニ多クハ建ガタシ故ニ少サク作りテ其様叶様ニスヘシ 扱下ヨリ上ノ重ハ二間劣リニスル也 且又作り様下棟ノアルハ見分ハヨケレトモ用方ニハ下棟ナシニ作りタルヨク殊ニ作事ノ雑用モ少ナシ

大ノ櫓ハ九間四方十間四方ニモスル 中ハ五間四方六間四方也 小ハ三間四方ニモ 是ヨリ小サキハ用法叶カタシ 二械三械ハ遠方ヲ見ルノ程ニヨル也 又ハ葎葎ノ為又ハ天守ノ心ニモ用 又ハ城ノカサリニモ三械等アルヘシ

渡櫓

二ノ門ノ上ヲモ云 惣テ城ノ長屋ヲモ云 長屋作りノ事

州多門ノ城ニ初ルトテ多門トモ云ト也 其長屋ノ作り様ニ
櫓ヨリツ、ケテ作ルモアリ 又櫓ト少シ離レテ作り五十間
カ三十間ニテ間ヲ離シテ作り余リ長クツ、ケス 是火事ヲ
防ク等ニモ宜シカルヘシ

着到櫓

本丸ヨリ追手エ出入スル通路城ノ内外能見ユル櫓ヲ云 着
到ヲ付ルノ心也

水槽

城際カ城内ヲ小河流水ナトノ通ルトキ櫓ヲカケ作りニシテ
下ノ水ヲ汲取様ニスルヲ云 其櫓ニテ葦菰ニ成流水ノ間ヨ
リ城中見ユル所不見シテヨシ 最横矢ヲ取故ニ共ニ三ツノ
得アリト云々

天主 或殿守

勘介流ニハ無之 上方辺ノ城ニ専有之 松永彈正久秀和州
志貴ノ城ニ初テ作ルトイヘリ 天主ノ大キナルハ信長公江
州安土ノ城ヨリ起ルト云々 城ノ飾リ自然ハ本丸迄敵入テ
モ天主ニテ暫ク防シ為トナリ 或ハ天主殿守ナト、書ナリ
五重七重ニモスル也 マツ天主台廿間四方一方エハ其ヨリ
長クモスル 廻リヲ石垣ニ疊ミ上内ノ方ヲモ石垣ニスル
其天主エ上ル所ニ段ヲ取ヲ小天主ナト、云ナリ 爰ニ井戸

ノ有タルハ猶宜シト云々 作事ハ見分ノ宜キ様ニ下棟等様
々アルヘシ 惣上ノ一重ニハ高欄等ヲ付ル也 常ノ櫓ト違
天主ハ高キ故一重々々下ヨリ上ハ四間劣リ程ニモ作ルヘシ
ト也 惣テ大ナル造作也

升形

櫓台ニ櫓ヲ不作高屏ヲカケ二重狭間ヲ切石打棚ヲカケテ外
ヲ打拂フ 櫓ノ草ナルモノニテ結句遠方ヲ窺フノ用サエナ
クハ櫓ヨリ手廻シヨシト也 外郭等多ハ升形然ルヘシ

橋升形

城内狭ク内升形ニ築キカタクハ外ノ堀ノ内エ地ヲツキ出シ一
之門ヲ立ルヲ橋升形ト云 又ハ其虎口ノミニヨラズ 堀切ノ
間ヨリ城内ノ橋見ユルト云ハ堀ノ内エ升形ノ如ク築キ出シ
其ニ障リテ橋ノ見エヌ様ニスルヲモ云 説々アリ

袖升形

虎口ノ左右ニ升形ヲ築キ出シ其口ヲ打拂フ如クスルヲ云也
一方ナレハ左袖ノ升形ナト、云 両方ニアレハ両袖ト云
但シ城ノ左右ト云トキハ惣テ城内ニ在テノ左右也

橋

堀切トキハ橋ヲ以テ通路ヲナス^{ママ} 其品如左様子多シ
土橋

平城多クハ土橋也 流水ニテナクハ土橋ヨシ 造作ナク火
難ニ不逢ヨシ 土橋ハ最初ヨリ穿残シタルモノト可知也

掛橋

堀ノ水流ル、トキハ掛橋也 又所ニヨリ時ニヨリ橋ヲ引テ
利ヲ可得ト思フ所ヲ兼テ掛橋ニスル也

又半分土橋半分掛橋ニスル事モ所ニヨルヘシ 橋ノ左右堀
ノ内ノ地形高低等アルトキ土橋ハカリニテハ大雨等ノ後一
方ノ地高キ方ノ堀エ水増トキハ土橋ノ上エ水越ス事モアル
ヘシ 然ルヘキニハ半ハ土橋ヲ引テ少シ掛橋ニスルトキハ
其下ヨリ水増テモ地低キ方ノ堀エ水落ル也 如此品普請造
作トモニ少シノ事ニテ心付有事也

引橋

常ハ不用ノ所ハ門際九尺ハカリ橋ニ車ヲ付テ内エ引込置ヲ
モ云 又ハ門ノ扉ノ外ニ則其橋ヲ九尺ハカリニテモ二間ハ
カリニテモ行桁共ニ引上ケテトリ内外ノ通路ヲ絶スヲ反橋
ナト、云也

廊下橋

本城ヨリ二之郭エ出ル橋堀切ノ間ヨリ見通シ両方カラ見ユ
ルトキハ橋ノ上ニ廊下ヲ掛テ見エヌ様ニスベシ 最狭間ヲ
モ切也 内ハ必ス引橋ニスベシ 但本城ニテモ大手ノ方ナ

ラハ無用也 外郭ニテハセサル事也

并橋

本城ヨリ出ル橋ト二三之郭ヨリ出ル橋ト自然ニ堀ツ、キニ
并フ事アリ 其時ハ必ス奥ノ橋ヲ廊下ニスル 但シ并フト
モ同郭エ出ル橋二ツナラヒタル分ニテハ廊下橋ニ不及事也
橋ト橋トノ間ニ又一郭ノ境アリテ内外ト隔ルトキニハ奥ノ
橋ヲ廊下ニスル 其モ廊下橋ノ場ニ非スハ欄干ニ板立ル也
長橋

堀幅広キ所ハ橋自然ト長シ 細ク長キ処ハ敵モ入ニク、味
方モ出ニクシ 其故陰ノ小口也 横郭升形等ニテ構様宜ケ
レハ出ルニモヨクナル也 三十間余モアレハ長橋也

欄干ニ板

馬出エノ橋或ハ外郭エ出ル橋堀切ヨリ見ユル処ハ欄干ニ板
ヲ打テ出入ノ人ノ見ヘサル様ニスル也

土橋部

前段同利 但土橋ユエ其外ヨリ見ユル方ヲ屏ヲ掛テ部ムナ
リ 欄干ニ板モ此土橋部モ一方ヨリ見ユルトキハ一方ハカ
リニ物ヲ立ル也 但又土橋部ハ屏ニテナリトモナルヘキト
キハ柵ニテモ部ムヘシ 土居ニテ土橋部トナス事モアルヘ
シ 大方ハ屏也

三段之堅固

城ニ堅固ヲ用ユルモ山ナラハ高キヲ好川ナレハ深キヲ望ム
 是常人ノ心也 其城ニヨリ堅固ニ違アル事ヲツ、メテ三段
 本文ニ挙タリ 猶其品細カニ論スルトキハ無際限事也 国
 主居城ハ平易之地ヲ好ミ境目ニハ險岨ヲ好ム 是又常人ノ
 心ナリ 惣テ城ハ其形ニ顯ル、外ニ習アリト知ヘシ 次々
 ニ述之

国堅固 繁昌之地

城ノ廻リハ平易ニシテ広ク往来自由能二三里四五里或八十
 里ノ内ニ節所ヲ用ルヲ云 甲州ナト如此繁昌ノ地トテ山川
 海陸手寄ヨク薪葛田畠魚鳥迄自由ノ能ヲ云也 天下取大國
 ノ主等此地ヲ肝要ニ用ル也 又四神相応ノ地ト云アリ 東
 ニ小河田沢アルヲ青竜ト云 西ニ大道アルヲ白虎ト云 南
 ニ大河海等ノアルヲ朱雀ト云 北ニ山林アルヲ玄武ト云
 其地南低ク北高ク東西狭ク南北長ク東南西ニ流水アリ 是
 則今ノ平安城ノ地形也 是ニハ違フトモ此心ニテ地ニ勢ヒ
 アリテ高低モアリ 海陸山川ノ通路宜ハ必ス繁昌ノ地ト知
 ベシ 然ラハ其国境ニ險ヲ求メテ國中ノ繁昌ノ地ニ居住ス
 シ

郡堅固 防戦之地

是モ城下ハ平地ニテ十町廿町ノ間ニ山川沼地埜田切沢森林
 藪等ノ節所多キヲ云 其節所エ敵来ルトキ城ヨリ出テ防戦
 ニ利有ヲ云 郡主等ハ此心得ナクテ不叶也 信州上田辺加
 州小松辺等能防戦之地也

城堅固 守成之地

山ニテモ平陸ニテモ四方ニ險難ノ所多ク敵大勢ニテモ攻カ
 タキヲ云也 駿州久能是也 守成之地至極也 惣テ境目ノ
 城後詰ヲ得テ敵ヲ拂フヘキニハ守成之地肝要也 三段ノ堅
 固ニ付委ク地形ノ事ヲ論スレハ限リナシ

城品々

城ヲ築テ大將居之 或ハ是ニ人数ヲシテ守ラシムルノ二ツ
 也 然レ共大小輕重急緩ニ依テ其品分ル、処ヲイヘハ又限
 リナシトイヘトモ大概ノ品目次ニアル如シ

国主居城

右国堅固ノ処ニ述ル如ク領國ノ中央ニ繁昌之地ヲ撰テ常居
 ノ用トス 其大ナルモノハ近代秀吉公ノ播州姫路ニ始ル 第
 一通路宜ク繩ヲ張ヘキ也 扱又天下ノ居城等ノ事ハ其國地
 ニ詮議アル事也 異國本朝古来ヨリノ天下ヲ知ノ主ノ居所
 経営等ヲ以テ考有之事ハ略之 国主ノ居所ニモ此考無ニア
 ラストイヘトモ爰ニハ略之

郡主居城

一二郡ノ主ハ戦国地取合ノ急難ヲ防ンタメニ築クヨリ起ル其繩張守成防戦ニ兼テ用ユヘシトナリ 郡堅固ノ所ニモ様子ヲ書也

境目之城

隣国之押エニ国境ニ城ヲ構敵其城ヲ攻ルトキ後攻ヲナシテ城内ヨリモ突テ出敵ヲ指狭ンテ討ニ利アリ 戦国ノトキハ境目ノ城多クアル事也 或ハ急ニ築クモアリ 或ハ古城ヲ改メテ人数ヲ籠ルモアリ 或ハ敵城ヲ得テ其ヲ則用テ守ラシムルアリ 其品限リナク城取ノ習只境目ノ城ニ究ル也 重々爰ニ述尽シガタシ

取出

城ヨリ十町廿町乃至一里ハカリノ間ニ少キ搔上ヲシテ敵其筋エ来ルトキ押エ止メテ城ヨリ備ヲ出シテ防戦ノ為ニ利アル様ニ築ク 最輕キ構ニテ山城モ平城モアリ 根城ヨリ遠キハ境目惣構続キハ出丸ト云 其中分取出也 遠キ程構ハ重キ方ト知ヘシ 但又所ニヨリ自他国ノ境ヲ越テ敵国エ入テ築ク小量ヲ取出ト云モアリ 塞砦ノ字ヲ皆トリデトヨム也

陣城

敵味方對陣ノ時分大將ノ陣ヲ輕ク構ヲナシ或ハ其辺ノ小城

古城ナトエ便リテ陣スルヲ云也 第一山アラハ則其ニ陣ヲ敷トキハ構堅ク陣城也 平地ニテモ幅狭キ堀ヲ穿少^マサキ土居ヲ築キテ用心ヲヨクスル等ヲ云

付城

敵城ヲ攻ルトキ大將ノ居所ニ少サキ搔上^マヲナシ城ヲ押エ栖樓等ヲ上テ城内ヲ見スカシナトスルナリ 侍大將モ攻口々々ニ付城ヲ構ユベシ

向城

右付城ノ大キナルモノ也 本大將是ニ居玉フ也 敵城ヲ去事廿町卅町乃至五十町モ其時ニヨルヘキ也 但信長公江州小谷ニ對シテ虎御前山ニ構ヲナシ御座ナサレ又脇エ御働キノトキハ跡ニ人数ヲ残サレタル様ノ事モアリ 秀吉公小田原攻ノトキハ石垣山ニ向城ヲ取玉ヒ一夜ニ白壁ヲナシテ敵ヲ威シ玉フ等ノ類アル事也 太平記ニ對城ナト、是ヲ書也 屋敷構

城ニ不及所ハ堀ヲ穿土居ヲ築テ一重ニ構ユルヲ館ト云 屋敷構是也 昔シハ城ハ山ニ構エテ下ノ平地ニ屋敷構ヲナシ居住スル事多シ 甲州モ石水寺ノ城山アリテ常ハ御館ニ居ス 信州葛尾ナト高キ山城ニテ村上氏ハ下ノ坂本ニ居館ア

リ 諸国此類ヒ多ク当時ノ城共ノ内ニモ如此モノ多シ 扱
又屋敷構ハカリ築クトモ構ノ外ニ馬場等ヲ設ケ流水等ニ便
リ輕キ捨堀ナトヲ穿トキハ自カラ急難ヲ辟ルノ便リトナル
ヘシ 猶亦京都將軍家室町ノ御所ト云モ屋敷構也 其後
信長公ハ御館ナクテ御生害アリテ秀吉公ハ聚楽ニ城ヲ築カ
ル 御当家ニ到テ二条之御館トナル等ノ差別ハ爰ニ論シ尽
シカタシ

右城取ノ名目大躰如此 此外ニ委シキ事ハ末書要本等ニ到
テ輕重事理ニ付テノ習アリ 繩張ヲ修行スル者絵図土図ヲ
以テ其得失ヲ知也 城取ハ軍学ノ内ニテモ今世諸国ニ実城
多ク有モノナレハタシカニ其善惡ノ利ヲ知易シ 故ニ又其
習モ詳カニシテ疑ヒナキ也 今世城取ノ習トナル者ハ皆山
本道鬼力伝ニシテ高坂昌信カ末書要本ヨリ出ルト知ヘシ

軍 詞 之 卷 私 解 下

武者分

家中ノ諸侍ハ其品ヲ分テ其役ヲ勤メサセ高名不覺ヲ定ムル
為ニ其々ニ名付ル也 戦国家々ニ少宛ノ替アリ 爰ニ拳ル
所甲州流也

侍大将

侍五十騎ノ將ハ其備ニ扨旗ヲ立一備ノ法定マル故其將ヲ甲
州流ニ侍大将ト云 縦ハ五百騎千騎ヲ持將ト云トモ主人ヲ
持者ハ侍大将ト云也

武者大将

先手ノ侍大将五人モ七人モ有之内一二二人功者ノ侍大将ニ惣
先手ノ事ヲ指引サスルヲ云也 武田家ニ於テ馬場美濃守内
藤修理山懸三郎兵衛高坂彈正四人也 如斯ノ類余国ニモア
リ 大坂陣ニ加陽ノ手ニ武者大将ハ山崎闇斎本多安房守大
夢也 ナリト云々 古エノ軍奉行ナト云此類カ

足輕大将

甲州ニテハ四十騎以下侍ヲ召連ル中身ヲ云也 是一備ノ法
不全故侍大将ト不云ナリ 又惣テ弓鉄砲ノ者ヲ預ル者ヲ足
輕大将ト云 是ハ矢玉ハ五丁拾丁ニテ相応ノ働キ者ユヘナ
リ 過分ノ名也 甲州流委ク論スレハ此足輕大将ト云ニモ
品々アリ 足輕十人廿人預リタル者モアリ 又足輕百人或
ハ七十五人五十人ニ与力ノ侍廿騎卅騎四十騎余モ預リテ前
脇備ノ内ニ入又ハ先手ノ目明等ヲ勤ルナリ 其品一樣ニ限
ラス 原美濃守ハ身代三千貫ニテ輕キ侍大将ヨリ大身ナレ
トモ一生足輕大将ヲ勤ル也 如斯ノ類ヒ余国ニモ有之事也
是侍大将トイヘハマツハ前後左右其請取タル処ヲ勤ム

足輕大將トアレハ進退輕ク六カシキ所ヲ何方ニテモ加リ勤
 ムル事アリ 其一品ヲ以テイヘトモ其違如斯 其余足輕大
 將ノ勤ル事拳テ数エカタシ 加藤清正ノ家中ニ飯田角兵衛
 三宅寛左衛門ナト云足輕大將此類ヒナリ 加陽ニモ大身ノ
 足輕大將小塚権太夫上坂又兵衛稻垣与右衛門等ノ類ヒ多ク
 有シナリ 殊ニ甲州流ハ其器量ニ依テ足輕ヲ預ルニ多少ア
 リ 戦国ハ余国モ此通り也 治国ハサナク組ヲ分テ足輕ヲ
 預ルニ甲乙ナキ様ナリ 扱又大身ノ侍大將ノ下ニ足輕ヲ預
 ル者アレハ是モ足輕大將也 前ニモ云通り勝負ヲ持故大將ト
 号スル也 然レハ甲州流ニ弓大將鉄砲大將弓頭鉄砲頭弓
 奉行鉄砲奉行ナト、ハ不云也 品ハ多クテ皆足輕大將也
 猶此事ハ爰ニ述尽シガタシ

六奉行

三役ニテ一役ニ二人宛合テ六奉行ト云

武者奉行 二人

侍大將組頭等ノ外ニ成程武道功者ノ武士ヲ申付御大將ノ御
 名代ニ軍中諸事ノ下知ヲナス役人也 貝太鼓ヲ司ル也 其
 品ヲイヘハ歳四十以上ニナクテハ人ノ用ル事薄シ 若其仁
 人数ヲ持トモ子カ弟カ甥カニ其人数ハ渡シ其身ハ一騎ニテ
 乗廻シ下知スル也 其上此役ニ相応ノ器量ナキ時ハ名ハカ

リト云伝等アリ 武田家ニテ加藤駿河守ハ本ノ武者奉行也
 其余ハ名ハカリ也ト云々 猶委クハ末書等ニ出タリ 但シ
 治国ニハ此役ナシ 事アルトキハ申付ル也

御旗奉行 二人

御大將ノ御旗御纏御馬駿ノ奉行ナリ 右武者奉行バカリニ
 テ備以下ノ裁許調カタキユヘ御旗奉行ノ当番ハ御旗ヲ下知
 シ非番ハ武者奉行ニ随テ走廻ル也

持鍵奉行 二人

是又御持鍵ヲ下知シ右御旗奉行ノ如ク非番ハ武者奉行ニ随
 フ也

右六奉行何モ弓箭功者ノ武士ヲ撰テ申付ル 最采幣御免也

中ニモ武者奉行ハ重ク其外ハ少シ輕シ 扱六奉行ノ内非番

三人ハ物具等ヲナシテ其利ヲハカル也 猶委クハ末書ニア

リ 是甲州流也

頭武者

人数多トキハ其大將ハカリニテ扱カタキ故侍廿騎廿五騎程
 宛ニ頭ヲ定ム 人数ニ依テ幾人モ有之 人ニ付テ云トキハ

頭ト云 是甲州流也

組頭

傍輩ヲ扱フ事最大役也 武田家近習ノ頭等ハ遠キ筋目アル

仁ヲ用ル 扱ハ其身ノ器量ニヨルベキ役也 其下ノ小頭ニ
弓箭功者ノ武士ヲ以テスル事甲州流也

番頭

甲州流ハ組頭番頭一役二名也 当時江戸ニテハ番頭ハ上ニ
テ其下ニ組頭アリ 国ニヨリ組頭ハ上ニテ番頭下ナルモア

リ

歩頭

甲州ニテ廿人衆頭ト云 役カラ輕ク組ノ内ヨリ頭ニナルナ

リ

中間頭

甲州ニテ馬乗小人ナド云是也 小人ノ内ヨリ出ルト見エタ

リ 其勤廿人衆頭ト同事也 甲州ニテ歩頭中間頭合廿騎ハ

常々陣中トモニ御大將ニ近仕昼夜勤番夜ハ不寝ノ番等ヲ勤

ム 其器量武勇モアル者共也 信玄公信州河中島合戦ノト

キ持鎧廿本ヲ此廿人取持テ大將ヲ守護スト云々 或ハ駿府

ヘ乱入ノトキ先立テ此内ノ者ヲ遣シ御館ヲ焼シメ又ハ戰場

等ニテモ晴ナル働等ヲ申付ラル、也 新田義貞公ノ十六騎

ノ党柴田勝家ノ近士ニ力量武勇ノ者ヲ置ル、如ク戦国氣遣

シキ時節ハ御大將ノ御用心有ヘキ事也 是ニ及ハサル事ナ

カラ甲州歩頭中間頭ノ事ヲ述ルニ依テ書之 猶詮議有事也

物奉行

甲州流道具ニ付テ扱フ者ヲ奉行ト云 其余上ノ下知ヲウケ
テ下ヲ裁許スルヲ惣テ奉行ト云也 夫故鎧大將旗大將ナト
、ハ不言也

御長柄奉行

其預リタル長柄ヲ乱レサル様ニ扱ヒ合戦勝利ノ後ハ自分ノ
働キヲモナスヘシ 甲州流ハ武功アルノ士ヲ以テス

役長柄奉行

前段ニ違事ナシ 但陣屋ニテハ役長柄ヲ出ス諸士ノ小屋々
々エ長柄同持者モ入ヘキナレハ又押出ス等ノトキマキレサ
ル様ニ裁許スル等也

惣旗奉行

是モ前段共ノ如シ 但シ旗ハ長柄ヨリ事ハ重シト知ヘシ

右此三役武田家ニテ在郷近習ノ内ヨリ武功ノ侍ヲ撰テ申付

ルト云々

使武者 使番トモ

大將ノ御意ヲ諸手エ云渡シ先ノ様子敵合ノ利不利ヲ大將エ
申上ル役ナリ 陣中何方ヲ走り廻リテモ咎ル者ナク預リノ
人数道具ナキユヘ自身ノ働キヲモ自由ニナス也 若キ武士
第一望有之役也 甲州ニテ蛇ノ指物衆トテ十二騎アリ 後

々侍大将足輕大将ニモ成タル也 此役ニ成タルモノ其心得
重々有事ナリ 物見敵合虚実ノ変等ヲ知事也 爰ニハ略之
信長公ニテ赤母衣黒母衣ノ衆ト云モ此役也

目付

甲州流ハ諸人ノ善悪ヲ正ス役也

横目

同目付ノ依怙最眞有カヲ正ス役ナリ 甲州ニテ歩頭ハ目付
中間頭ハ横目ヲ兼役也 中間頭ハ目付歩頭ハ横目ノ事モア
リ 久敷同シ役ニテハ依怙モ有ヘキナレバ其役ヲ互ニ替ル
ト也

諸士 近習 外様 直参 同心 与力 又者

近習ハ大将ノ手廻リ旗本組ノ侍也 甲州ニテ奥近習ハ近習
ノ如シ 国ニヨリ名目ハ替ルトモ旗本ノ士ヲ云 外様ハ
旗本組ノ外大将ニ遠キ諸士ヲ云ナリ 直参ハ御大将ヨリ直
ニ禄ヲ請ルヲ云也 同心ト云与力ト云ハ前ノ先手ノ処ニ書
如ク大身ノ寄親エ付ヲ云 又者ハ士大将足輕大将ニヨラス
自分ノ騎馬也 大概如斯 諸士ノ組分名目等ハ其家風可有之
一昧ニ定ルニ非ス

歩武者

甲州ニテハ廿人衆ト云 惣テ此組ノ内ニテ色々兼役ヲモツ

トムル也 家風ニヨリ是ニ類スル組アリテ名目等品々モア
ルヘシ 但又甲州流足輕長柄持等ニ到ル迄甲冑ヲ帶シテ出
ル程ノ者ハ皆歩武者ト云也

從膚武者

具足ヲ著シテ出ル侍ノ肩ナドニ薄手ヲ負テ具足ハ著ラレヌ
時大合戦ナド可有之ニ薄手トテ不出事モナラヌニヨリ頭
奉行等エ其段ヲ断リ具足ヲ不著スハタニテ出ル侍ヲ云也
但又刀ヲモ指輕キ歩若党ノ具足不著者ヲハ從膚者ト云テモ
クルシカルマジキト末書下卷中ニ有之

青葉者 或白齒

小者中間草履取夫風子ナトノ具足一円不著者ハスハダモノ
トモ不云 アヲハモノト云也 昔ハ士タルモノ鉄槩ヲ付テ
齒ヲ黒メタリ 下々ハサナキユヘ白齒ト書ヘキカト云々
下々ヲアヲバモノト云事甲信ノ郷談ナリ

出法武者

具足ヲ着テ指物サ、ヌヲ云 故ニ其人ニ高下アリ 対指物ヲ
免サレテサ、ヌ頭奉行カ又ハ輕歩若党也 指物ハ常法也
サナキハ出ル^レ法^ヲト書ヘキカト云々 然レ共ズンボウハ
郷談ト見エタリ ズンボウ或ハズツボウ等皆此事也

右之外諸奉行

右ハ戰場エ出ルノ品也 其外猶アル事ヲ云也

小荷駄奉行

前ニ備ノ所ニモ書如ク侍大將ノ役ナリ 惣軍ノ小荷駄ヲ扱フ也 敵地ニテ小荷駄ヲ奪レテハ不叶故ニ備其奉行トスル也 烈敷事モナキニハ武田家ニテハ甘利左衛門死去ノ跡息幼少ノ内陣代ニテ勤ル 其以後淺利式部討死ノ跡モ此通りニテ小荷駄奉行備也 然レ共相州三増合戦ノ時ノ如ク前後ニ敵アル様ノ節ハ内藤修理カ小荷駄奉行勤シ如ク大功ノ侍大將モスル事也

陣場奉行

前ノ陣取ノ所ニ委シク述ル如ク侍大將ノ役也 武田家ニテ原加賀守其子原隼人佐二代勤ル 常々此役ハ他國ノ画図案内ヲモ能聞覚テ工夫スル也 行列ノトキハ味方ニ二三里モ先立テ普請奉行作事奉行等ヲ連テ押行陣着テ陣場ヲ割渡ス 若先ニテ敵急ニ出ルトキ二三里跡ノ味方ヲ待付ル間防クタメニ人数少ナクテハ危シ 故ニ原隼人佐百廿騎ノ侍大將也 備ノトキハ脇備ニアリ 是若隼人討死ニテハ跡ニ事欠ルトアリテ如此 陣取ノトキハ先手旗本ノ間ニ陣スルト云々 甲州流如此也 原隼人常ハ奏者番ナリト軍鑑ニアリ 普請奉行

普請人足ノ二千人モ普請道具ヲモタセ陣場奉行ニ随テ行道等ヲ作ラシム 先ニテ本陣搔上堀土居等ヲ作ラシム 若又俄ニ城等ヲモ築ク事ノ役也 金穿石垣積ナト此下ニアルヘシ

作事奉行

大工其外作事ニ入ベキ諸細工人ヲ召連大將ノ小屋ヲカケ櫓樓見セ櫓櫓虎落等ヲ作り搔上等ヲ急ニ構ユルトキハ屏櫓門等ヲ作ラスルノ役人也 陣場奉行ニ随テ押付道ニテ橋ナトノ損シタルヲ直シ通ル也 城攻ニハ仕寄ヲ付土俵伝堀等普請奉行作事奉行ノ業也

兵糧奉行

陣中常々共ニ其職タルモノハ自國四境ノ兵糧ノ貯エ馬草糠藁ニ到迄心得アルヘシ 糧因敵トテ敵地エ入テハ敵國ノ兵糧奪取テモ食ス故ニ他國米藏ノ在所ヲモ兼テ知ヘキ也 船手寄アル國等ハ兵糧運送ノ有無等其筋々ノ代官ノ心得有事也 最段々役人有ヘシ

此外陣中諸役人小姓咄衆納戸奉行御膳奉行台所奉行賄方等ノ役人ハ軍戦ノ用ニ非ス 其家風ニ随ヘシ

本文ノ通也 甲州ニテ咄衆トテ或ハ隱居ノ衆或ハ高家ノ衆等アリ 信玄公同シ出立ノ者ヲナサレタルト云モ此咄衆ノ

内ニアリ 其外本文ノ外ニモ大名ノ家ニヨリ戦用ニ非サル
役人或ハ兼役等ニシテ其品多ク有ヘキ也 猶馬方ノ役人等
多ク有ヘシ

一技一芸ヲ以テ無テ不叶役人

是ハ其芸ヲ以テノ役人也 皆陣中エ召連ル者也

文者

書簡ノ文法願書等ノ文ヲカ、スル役人也 常ノ文トハ違事

ナリ

右筆

陣中ニテ法度書首帳感状矢文其外敵方エノ書翰等常ト替リ

アリ

軍配者

日取時取方角等善惡ノ沙汰第一ハ軍氣ヲ見ル等ノ事ヲ知ノ

役人ナリ

出家 法印 使僧

是モ陣中エ召連 法印ハ陣中ニテ護摩ナト修行サセテ味方下

々等ニ到ル迄安堵ヲナサシムルノ便リアリ 使僧トハ敵方

エ用アルトキ侍ハ遣シカタキ故用事ノトキニ出家ヲ遣ス也

信玄公ハ一向宗長門寺ト云出家ヲ使僧トシ玉フトアリ

医者 本外

常ト違人数多キ故藥種モ常ノ如クニテハ不叶故医家ニ習ア
ル事ト云々 外医最金瘡多キ筈ナレハ医ニ非ストモ手負ヲ
扱フ為ニモ金瘡ヲ心得テヨシト云々

郷導

其国々々ノ案内者也 隣国等ハ兼テモ知処也 其トモニ可

働 入国ノ案内ハ其時ニ到テ聞事也 又ハ其時ニ当テ其所

ノ者ヲ案内者トスル事モアリ

水練

江河ノ浅深ヲ知役人也 海ヲウケタル国ハ舟軍等アルベケ

レハ舟手ノ役人段々有ヘキ也 其品ハ多キ故略之

忍 或出抜 乱波共

江州伊賀甲賀ヨリ忍ノ出ル処ナリ 關東ニテ乱波ト云 甲

州ニテ出抜ト云也 敵方ノ事ヲ聞為ニ形ヲ隱シテ遣スヲ忍

ヒト云也 忍ヒノ習ニハ諸国ノ間通ヲ通ル事ナト多ク秘伝

アリト云々 月夜闇籠ナト云伝アリト云々 月夜トハ形ヲ

顯シテ其業ヲナス 闇トハ形ヲ隱シテ其事ヲナス 籠トハ

形ヲ隱スト不隱ノ間ニテ其業ヲ尽スト云々 委事ハ其道ノ

者ノ知所也

算勘者

常ノ算用トハ違ヒ大キナル事モアルナレバ小サキ積リトハ

違ヒ勘ノ達者ナルヲ以ス 町見等ヲモ計知スル者モアリテ
然ルヘシ

大工

城ノ造作屏或矢倉陣中ノ栖樓等常ノ作事ノ外也 其ニモ限
ラス・陣中ニテハ大工ニモ心得アル者ヲヨシトス

細工

兵器ヲ作ル者其ノ用具モ足シムル也 細工人ノ品一樣二限
ラス 色々ノ細工人アルヘシ 一々書記スニ及ハストイヘ
トモ春田具足屋金具師弓打矢師絃指鞆師鉄砲張台師同金具
師刀脇指ヲ拵ユルニ付タル職人鑓屋其外旗指物等ニ至ル迄
弓道具鉄砲道具迄モ夫々拵ユル職人等其品無際限 其余ハ
書スルニイトマアラス 略之

金穿

城攻ニ金穿ヲ以テ矢倉等ヲ穿崩ス事アリ 其外堀ヲ穿井戸
ヲ穿等ニ用ユ 是迄ニテモナシ 金穿ニモ心得アリ

鍛冶

普請造作共ニ無テ不叶也 最刀鍛冶等モ連行ヘシ

猿樂

軍用ニ非ストイヘトモ名將ハ用ラル、事アリ 或ハ陣中城
中サワグトキニモ能囃子ヲナシテシズマル事アリ 又ハ城

攻等ニモ寄手ノ方ニテ能囃子ヲスル事秀吉公小田原攻ノト
キ如此 又謙信公ハ加州湊ニテ囃子ヲサセラル、其トキ
上方勢ト対陣ノ内ナリ 其余数多アリ ソレユヘ猿樂ノ習
ニモ出陣陣中帰陣等ニ品アルト云々

惣テ名將ハ能アルモノハ捨玉ハスト云々 楠ハ泣男ヲ用太
田三樂ハ犬ヲサエ用タルモ皆其得タル処ヲ挙ルノミ 故ニ
名將ハ其々二人ヲ召仕ハル、也

制法

形アルモノ或ハ其色ヲ以テ人数ヲ使フヲ制ト云 声アルモ
ノ或ハ其言葉ヲ以テ人数ヲ使フヲ法ト云也

太鼓

上古ハ用タルカ 中絶セルヲ甲州流第一ニ太鼓ヲ用ル 近
代ハ諸国皆太鼓ヲ用ユ 人数二千トモアラハ太鼓二ツモア
ルヘシ 其打樣等習アリ

螺

其音高ク勢ヒアリ 然トモ急ナルトキハ音不出 静ナルト
キ用ル也 甲州流ハ螺ト太鼓ト組合テ用ル也 其ユヘ貝太
鼓一組ト云

鐘

大キナルハモタセカタシ 小サキトテモ重キモノナレハ聞

敷用ニ立カタシ 故ニ本陣ニハカリ可有之 陣取ニテ用ル也 又鉦モ此鐘ノ類ニテ陣屋ニテ用ル甲州流也 右太鼓ノ音ハ物ヲ隔テハ不通ト云 螺ハ物ヲ突貫テ音通スト云 鐘ハ物ヲ廻リテ音遅ク通スト云々 然レトモ闇敷トキハ太鼓ニコス事ナシ

扱旗

証扱旗ト云ノ上略也 大小ノ儀ニアラズ 惣テ旗ハ何レノ備其大將其頭ト云ノ印ナレハ証扱タルヲ云也 甲州流如斯

集 或纏 円居

惣人数ノ印ナリ 集ノ字甲陽ノ書ニアリ 纏ノ字ハ武教全書ニ山鹿義呂カ書タリ 是ニテ人数ヲ引マトフノ心也 集ハ是ヲ目当^{マツ}人数集マル心也 円居ハ雄鑑ニ北条氏長ノカ、レタルナリ 是ヲ目当ニ人数マトカニ居ルノ心也 皆是惣軍ノ印ニテ纏進メハ人数モ進ミ纏退ケハ人数モ退ク也

馬駿

是ハ其大将ノ印也 纏ハ其備ニ付事前ノ如シ 馬駿ハ其将ノ進退ニ付也 甲州流ニテ纏馬駿二本ヲ対ニシテ縦ヘハ纏ハ白地ニ黒紋ヲ付レハ馬駿ハ黒地ニ白紋トアルカ如ク作り 其手ノ侍大将御旗本等エ行トキモ馬駿ハ持セテ行纏ハ其備ニ残ス 二本対ノ模様ナルニヨリ割府ノ如クヨシ 敵疑味

方定ルナト云伝アルモ此事也 異類異形ノ纏馬駿ヲ用ル事ハ上方流也 其トモニ此割府ノ利ヲ以テスベキ事也

守旗

山中廻シ備等ヲ以テ合戦ノトキナト山ノ高ミニ旗ヲ立遠方ヨリ味方ノ目当トシ其程ヨキ時分ニ旗ヲ以テ相図ヲナシ合戦ノ首尾ヲ合スル也 其山上ニ立タル旗ノ相図ヲ味方ノ人数守リ居テ勝負ヲ始ムルニヨリテ守旗ト云 信玄公相州三増合戦ノトキ武田典厩信豊此守旗ノ役タリ

見セ旗

森林在所山陰ナドニ人数ナクシテ旗ハカリ立テ備アリト見スルヲ云ナリ

対指物

古エハナキ事也 甲州流ヨリ起リ近代諸国用之ト云々 人数多ク見エ備ノ勢ヒアリテヨキ也 小サキ旗ヲ一手々々対ニナシテサ、スル也 近代異形ノ指物ヲ指事モアリ

冑前立

甲州流ハ一手々々対ニシテ用ユ 旗本ハ金ノ鏡山懸カ手ハ朱ノ角折敷馬場カ手ハ銀ノ上リ半月ナト、アルカ如シ 鍬形ハ上古ノ農兵ノ印シ也ト云々

三卷

是又甲州流ナリ 惣軍ノ刀脇指ノ鞘ヲ紙ニテ三所宛卷也

他国ニテ是ヲ見習ヒ聞伝ヘテ五ツ卷七ツ卷右卷左卷等ニス
ルト末書下卷下八ニ有之 御大将ヨリ末々迄如斯ニ一様ノ
相印アルヘキ事ナリ

相印

幅五六丁ニ長サ一尺余其相印紋ヲ付テ左ノ袖ニ付ルヲ云袖
ハ當時不用ユヘ左ノ籠手ニ付ル也

笠印

右ノ通りナルヲ胄ノ後口総角付ノ鎖ニ付ルヲ云也 但笠印
ニハ大中小有ト見エタリ 右袖印笠印ハ古エ対指物無之時
代ハ専ラ用之也 対指物アレハ不入也 然レ共伏兵ニ行又
ハ夜討ニ行等ノ節ハ袖印カ笠印アルヘキ也

団扇

甲州流ハ本大将ノ外ハ不持之ト云々

采幣

甲州流ハ采幣ハ本大将ノ外不持之 其余金銀ノ采幣ノ
沙汰ハ無之 侍大将足輕大将六奉行組頭等我預リ人数ニテ
一勝負ヲ持ホトノ者ハ采幣ヲ持ナリ 采幣形等甲州流ハ槌
ニ伝アリ

扇

軍扇ハ誰ニテモ持也

右団扇采幣扇此上ニ鞭トモ二人ノ下知スル処ハ同シ事也 但
シ其階級ニ依テ持者ノ違フハ其法也

合札

陣中城中ナトニテ門ノ往来等敵味方ヲ改ル為ニ合札ヲ以テ
出入サスル也

合印

指物前立三卷等ノ印ヲ多ク定メ置トキハ一品二品紛失シテ
モ跡ニ残リテヨシ 此類ヒ合印ト云也

相言

敵味方ヲ改ムル為ニ用ユ 軍法之卷ニ云 敵カト云ハ討ト
答也 花カトイヘハ実ナルト答エトアル如ク吉凶ニマカセ
テ作り諸軍エ云渡ス也

燧火 或狼煙

遠方エ相図ヲスルニ旗ヲ以テモスルトイヘトモ二里トモ隔
ルトキハ煙ヲ立ルナリ 其アケ様狼糞ヲ入テ焼ハ煙ナヒカス
直ニヨク登ルト云々 猶藥法等アルモノ也 然レトモ其焼
草ニ生ノ草木ヲキリクベ狼糞ナクハ牛馬ノ糞ニテモ入煙ノ
多キ様ニシテ其焼所物陰ニテ煙ノ根ニ風ノ強クアタラサル
様ニスレハ高ク煙登ルト云々 昔ヨリノ武功ナリ

相図火

夜討ニ入トキモ夜討ヲ厭フニモ火ノ立様ニ約束ヲ定メテ置
ヲ云也 夜討ヲ厭フノ相図ノ火ノ事ハ前ノ陣取ノ栖樓ノ処
ニモ書之 夜討ニ入トキハ火ヲ不立 戻ルトキニ火ノ立様
品々アル事ナリ 有増ハ末ノ巻ニモアリ

飛脚簞

遠方ノ味方ノ所エ縦ハ敵来リテ我居城ヲ取巻等ノ急事ヲ告
ルニ飛脚モ通シカタク又ハ遅キニヨリ狼煙ヲアクルト其次
々宿々ニ兼テ云付置段々ニ狼煙ヲアクルト早ク先エ通シテ
後詰等ヲナス也 信州河中島ニテ何ゾ事アルトキハ高坂彈
正此飛脚簞ヲ以テ甲府エ半日ノ間ニモ知タリト云々 猶大
河水出テ飛脚ノ通路成カタキニモ是ヲ用ユト軍法ノ巻ニ有
之

右制法是ニハ限ルヘカラズトイヘトモ其大法ヲ書ス 準之
ノ法制其トキニヨリテ猶可有之也

軍詞

是ヨリ末ニ書所ノ軍詞甲州流ニモ限ラス天下通用ノ詞也
惣テ軍サ詞ヲシラザレハ縦ヘ二三度働キアリテモ殊外弓矢
ノ作法不案内ニ見エテ不宜モノト云々 結要本ニモ此事ヲ
述タリ 此末ノヶ条トモノ内サトシ易キトコロハ不註也

一勅ヲ蒙テ朝敵ヲ退治ニ行ヲ節度使ト云 征討トモ追討トモ
進発トモ発向トモ云

勅ヲ蒙ルハ天子ノ命ヲ受ル也 朝敵トハ則天子エ軟ク者也
退治ハ是ヲシリゾケテ世ヲ治ムル也 其儀ヲ帝王ヨリ仰
付ラル、武將ヲ節度使ト云 節度ヲ賜ルトテ御規式アル事
也 其朝敵ヲ討ヲ征伐ト云 追討ト云也 出陣ノ所ヲ進発
又ハ発向ト云ノ詞也

一公方官領ノ出陣ヲハ御動座ト云

將軍家ヲ公方ト云事ハ鎌倉エ宗高親王下リ玉フテ將軍ト成
玉ヒ公方ト称スルヨリ起リ其後京都將軍家ノ三代目義満公
ヨリ押テ公方ト号スル 以後將軍家ノ通称ノ如ク成来ル也
官領ハ尊氏公ノ代足利基氏ヲ関東ノ官領タラシムトイヘ
トモ義満公ノ押テ公方ト成玉フトキ執事ノ号ヲ改メテ細川
頼行ヲ官領トセラル、ヨリ始ル也 ケ様ノ大名ノ御出陣ヲ
ハ御動座ト云ヘキ也

一陣トハ人数ヲ動カシ他国ヘ働ノ惣号也 故ニ陣中封陣出陣
帰陣ト云

陣トイヘハ合戦ノ事ト思フ サニハアラス 中花ニテハ備
ヲ敷事ヲ陣ト云也 委ク本文ノ通也 故ニ陣ハ常ノ旅行ニ
モ大將ノ御座所ナトハ本陣ト云カ如シ

一道ヲ打テ行間ヲ行軍ト云 其次第ヲ定ルヲ行列ト云 或備押ト云 押陣武者押ナト云ハ俗語也

行列ハ備ヲ伸テ押行先ニテ急ニモ備ヲ立ルトキ手間不取様ニ法ヲ定ル事前ニアル通也

一 一夜陣ヲハ陣場ト云 五日トモ留ル所ヲ陣所ト云

是一夜二夜ハ野陣也 五七日モ滞留ノ時ハ小屋ヲモ掛ル其輕重ニ依テ詞モ違フ也

一家ニ陣ヲナスヲ宿陣野ニ陣スルヲ野陣ト云

治国又ハ戦国ニテ味方地ハ皆宿陣ナルヘシ 戦国敵ノ地エ入テハ宿陣ハ氣遣アルユヘ野陣也 或ハ山ニモ陣スル也

一陣ヲ取テ居ルヲ張ト云 引トルヲ拂ト云

宿陣ヲ張野陣ヲ張ノ類ヒ也 何方ノ陣ヲ拂テ何方エ移スノ類ヒ也

一陣具柵木ノ類ヲハ取ト云 切トハ云ヘカラス

味方ノ具ハ惣テ切ナト、ハ不云事也

一 柵ノ木ハサクト云時ハ付ルト云 シヤクト言トキハフルトモ云

是ハ耕作ヲフルト云テ敵地エ入テ麦ナトヲ苅取事ヲ麦作ヲフルト云ニツキテ是トマギル、ニヨリ柵ヲ付ルト云也 又

ハシヤクト言トキハフルト言テマキレナキ也 柵ノ字ノ音サクトモシヤクトモ言也

一味方ノ人数ハ幾手ニ備タルト云 敵ノ人数ハ幾キレニ備タルト云

本文ノ通也 然ルニ備ヲ一手二手ナトト云事日本の通称也ト云々

一大軍出合テ戦ヲ合戦ト云 一手二手或ハ足輕ニテ勝負ヲナスヲ小迫合或ハ足輕合ナト、云

合戦ト云ハ惣軍打合セテ大キナル勝負ユヘマレナルモノ也 結要本ニ委ク論スル所ハ国持ト国持ノ取合ニ大合戦ハ有事也 国持ノ其隣地ニアル郡取ノ不随ヲ随ユヘキトテ出馬アルニ其郡取エ近キ郡取二三頭モ加勢ナトシテ指向フトキハ合戦ニ成事モアリ 国取合争弓矢ナト、云 又郡取ト郡取ノ地取合弓矢ト云モアリ 是小迫合也 然レハ小迫合ハ大軍出テ対陣ノ内ニモ有之 互ニ四境ヲ守ル境目ノ守兵出合テモ有之 地取合ニモ有之故ニ每度アル事也 又其ヨリ事輕ク足輕ニ与三与ハカリモ出テ働クハ足輕合又ハ足輕ヲ懸ルナト、云也

一定レル勢ノ外一手二手ニテ別所エ行ヲ働キノ勢ト云 敵ト対陣ナトノ時前後左右定リタル備ハ不動遊軍或ハ脇後

備等ノ内ヨリニテモ外エ敵アリト聞テ其所エ分テ向ハスル
人数ヲ何方エ働キノ勢ト云也

一進出ル備ノ跡ニ扣タルヲ胴勢ト云

タトヘハ一之先二之先進テ敵ヲ討ニ前備旗本ハ跡ニ扣エ少
シ進ミ懸リテ勢ヒヲ見セテ不懸先ノ働ク人数ニ跡ノ備アル
故心慥ニ思ハスル胴勢也 最其勝負ノ大小ニヨリ人数ハ多
少アリトモ又ハ一備ノ内ニテモ働ク者ト跡ニ扣エタル者ノ
違也

一敵地エ働入退クトキ跡ニ残リ敵ヲ押ユルヲ殿リト云 或尻
拂ト云

雄 勇 田 島

懸ルニ先退ニ殿リ手柄也 人ヲ先ニ立テ跡ニサカリ退トキ
敵ノ付来ルトキハ其働キヲナス也

一ニ二手敵味方相向テ迫合前ヲ守合ト云 ヒシト近寄ヲ鐘組
ト云

敵味方共ニ戦ヒヲ持テ互ニ相向フ所ヲ守合ト云 サレ共守
合タルハカリニテ互ニ迫合ナク相引ニテナル事モアルヘシ
猶互ニ近寄其間十間ノ内外ニモナルトキハ鐘組ト云モノ也
互ニ少シ動ケハ迫合始ル比ナリ
一喰付喰留ルトリクサル事

迹ル敵ヲ慕ヒテ追懸ルヲ喰付ト云 間近ク追寄テ協道エモ

ヤラヌ程ニ成タル処喰留ト云 扱其敵ト勝負ニ結フハトリ
クサル也

一横鐘廻備之事

一之手敵ト取合トキ二之手味方左ヨリ出テ敵ノ右エ懸ル
ヲ横鐘ト云也 場不宜ハ横鐘味方右ヨリ出敵ノ左リエ懸ル
事モアルヘシ 又廻備ハ山戦ナトニ山ノ陰ヨリ人数ヲ廻シ
敵ノ後ロヨリ懸ルヲ云ナリ 平場ノ戦ニモ此心アリ

一小返守返惣返ノ事

敵地エ討入味方其人数ヲ上テ帰ルトキ敵跡ヲ慕フテ急ニカ
、ラハ殿リヲ勤ルノ侍返合テ追来ル者ヲ討取ヲ小返ト云
如斯ノ働何人モ可有之 其小返多ク成テ一手ノ人数皆返シ
合スルヲ守返ト云 二手モ三手モ守返ス事アリ サアリテ
惣軍皆返シ合スルヲ惣返シト云也

一戦ノ場ヲ不動ヲ芝居ヲ蹈ユルト云

大合戦ノ勝負ハ合戦終リテモ其戦場ニ蹈堪エ其場ヲ不去居
ル方ヲ勝トス 是ヲ芝居ヲ蹈ユルト云テ則其場ニテ勝鬬ヲ
取行フ也

一敵ノ首ヲ取ヲ高名ト云 討タル敵ノ太刀刀等ヲ首ニ添来ル
ヲ分捕高名ト云

セワシキ場ニテ分捕ハナキモノ也ト知ヘシ

一 敵国ノ村家ニテ人馬財宝ヲ奪取ヲ乱取或乱放ト云

大合戦勝利ノ後ニアル事也 信玄公ハ度々ノ合戦ニ勝玉ヲ

故下々分捕乱放ヲナシテ勇ミタリトアリ

一味方ノ人数引取ヲハアクルト云

一味方ノ敗軍スルヲハタテラレタルト云

一味方ノ手負ヲハ射サセタル突セタル切セタルト云

一討死シタルヲハ討死逐タルト云

一味方ノ城ヲ敵ノ責破リタルヲハヤフラセタト云

一節所山川谷堀ナトヲ敵ヨリ越タルヲハ越セタト云

一 国端村里ヲ敵ヨリ取タルヲハ其村其里トラセタト云

右七ヶ条本文ノ通也 惣テ味方ノ事ヲハ引ノ切ノナト、ハ

不云事ナリ

一 敵地ヲ焼ヲ放火ト云 味方ノ地ヲヤクヲ地焼ト云 或ハ煙

ヲ立ルト云

一 敵国エ入テ随フ在家ハ不焼 不随在家ハ焼也 又惣テ敵地ニ

テハ放火スル事モアリ 扱又自国エ敵ヲ引請守城シテ防戦

ニ利セント思フトキ地焼スル事等アリ

一 陣屋或ハ城ヨリ立煙ヲ飯霞人氣ト云

食ヲ認ムル煙ヲ飯霞ト云 是ニテ人数ノ多少増減ヲ伺フ武

功アリ 人氣ハ城中陣屋等ノ上ニ煙ニアラス雲ニアラスシ

テ立気也 是ニ依テ其清濁ニ付テ吉凶ヲ占フ事天文軍配ノ
習アリ

一 城ヲトリカコムヲ巻ト云 人数ヲアクルヲホゴスト云

城ヲ責ルト囲ムトノ違アリ 不責トモ囲ム事ハ切々アル事

也 是ヲ取巻ナトト云 其人数ヲ上ルヲ巻ホゴスナト、云

也

一 寄口持口ノ事

敵城ヲ責囲ムニ四方ノ攻衆何方ハ誰カ寄セ口ト云如ク也

竈城ノトキ四方ノ扉ヲ守ル人数何方ハ誰カ持口ト云也

一 敵城攻落スヲ乗取乗定ムルト云

城ヲ乗取テ其城味方ノ手ニ入タル所ヲ乗定メタルト云也

一 攻取タル城ヲ破却スルヲ掃ト云 亦城ヲ割トモ云

近年ハ癡城ナト、云也

一 敵ノ橋ヲハ引ト云 味方ノ橋ヲハハネヌルト云

一味方ノ馬ヲハイサムト云 敵ノ馬ヲハイナ鳴ト云

右二ヶ条本文ノ通吉凶ニマカセテ云也

一味方ノヲハ馬煙マボコリ武者煙ナト、云 敵ノヲハマケフ

リト云

人多ク行トキハ其道路ノ塵埃リ立也 其煙ノ事也

一味方ノ幕ヲハ打ト云 敵ノ幕ヲハ引ト云 船中ノ幕ヲハハ

シラカスト云 遊山見物ノトキハ張トモ云

一太鼓ヲハ打トモイサムルトモ云

一貝ヲハタツルト云

一関ノ声ヲハツクルトモアクルトモ云

一旗ヲハ立ルト云 納ルヲハマクタ、ムトハ云ヘカラス アクルト云

一旗竿ヲハ切ト云ヘカラス ホルト云

一矢ノ筈ヲハタツト云

一旗ヲハ指ト云

一母衣ヲハ掛ルト云 或ハス、ムルト云

一空穂ヲハツクルト云

一矢庫ヲハ負ト云

一簀ヲハタクト云

一野狼煙ヲハアクルト云

一御馬イテマイレツレテマイレト云 引テマイレト云ヘカラス

右十四ヶ条本文ノ通也 惣テ如斯ノ品ハ吉凶ニマカセテ云也 下知スルトキナト似タル詞ノナキ様ニ紛レサルタメニソレ々々定メタル也

一人数五千トモアラハ軍勢ト云ヘシ 其ヨリ内ハ手勢ト云ヘ

シ

五六百ハカリノ人数ナトヲ軍勢ト云ハ不相応ナル事也 其程ニヨリテ云ヘキ也

右軍詞ヲ知サレハ上ヨリノ下知モ調カタシ 昔ヨリ云伝フル武者言葉近代ノ軍詞モアリ 猶是ニハ限ルマジトイヘトモ此前後其所々ニ出ル詞ハ略之 其所々ニテ可知之也 此段ニ出ル所ハ何方エモヨル所ナキ詞ハカリヲヨセテ如斯也 周礼六軍数

五人為伍

五伍為兩二十五人

四兩為卒百人

五卒為旅五百人

五旅為師二千五百人 五師為軍一万二千五百人

右中花備ノ組様也 周礼ニ出タル法ナリ 少ヨリ大エ組上テ一万二千五百人ヲ一軍ト云 備ノ立様等図モアリ 但中花ニテモ国ニヨリ一軍ノ組様違ヒアル也

王六軍

人数七万五千人也

大国三軍

人数三万七千五百人也

次国二軍

人数二万五千人也

小国一軍

人数一万二千五百人也

右段々ノ陣図等委ク尋テモ異朝ノ事ハ不入故略之 但大概ノ度量ヲ知タメニ出之者也

諸葛孔明八陣

天地風雲竜虎鳥蛇

是ハ諸葛亮魚復江ニ石ヲ置テ八陣ヲ図ス 異朝ノ軍書皆以テ是ヲ重ンシ本朝ニテモ八陣ト号シ兵家深ク尊之 其伝トシテ事ヲ誤ル者モ又多シ 四方四維欠ル所ナクシテ中ニ中軍アリ 合テ九ツ八陣九数ト云也 八陣ハ本寄正ノ二ツニテ天地風雲竜虎鳥蛇ハ其陣々ノ名義也 古今其説多シテ結句疑ヒ迷ヒヲ生スル也 其委シキ事ハ爰ニ論スルニ不及 唯其名義ヲ挙ル而已

右軍詞之卷ハ其名目ヲ挙テ知シムル為也トイヘトモ其用法其利形ヲ不知シテハ其詞モ通シカタキニ依テ其事ヲ述テ其詞ヲ知ルノ便リトスルナリ 深理ニ到テハ末書要本ニアリ

右軍詞之卷私解者元禄十二巳卯歲稿之 今歲正徳四甲午年悉令改正増補之處也

三月上旬